山田風太郎傑作大全⑨

剣鬼と遊女

山田風太郎



廣済堂文庫

廣済堂文庫絶賛発売中！

カバーイラスト＝毛利 彰
カバーデザイン＝原田幸生



山田風太郎

剣鬼と遊女

山田風太郎傑作大全⑨

廣済堂文庫

559
や7-9
543

山田風太郎

剣鬼と遊女

山田風太郎傑作大全⑨

廣済堂文庫

特選時代小説

ISBN4-331-60560-4

C0193 ¥543E

9784331605608

1920193005431

定価 本体543円＋税

花魁三千歳の間夫直侍こと片岡直次郎、南部藩と津軽藩の確執から起きた相馬事件の狙撃手相馬大作こと下斗米秀之進ら豪華な脇役を縦横に駆使し、花の吉原を舞台に妖しい剣気につつまれた御隠居と遊女の戦慄と悦楽を描く「剣鬼と遊女」ほか、「元禄おさめの方」「姦臣今川状」「筒なし呆兵衛」「紅閨の神方医」「陰萎将軍伝」と新鮮な素材を練達の腕で鮮やかに捌いた天才料理人・山田風太郎の特製フルコースメニュー6品。

特選時代小説

廣済堂文庫

山田風太郎

やまだ ふうたろう

大正11年兵庫県生まれ。東京医科大学卒業。昭和22年『宝石』新人募集に応募した「達磨峠の事件」がデビュー作。昭和23年「眼中の悪魔」で第2回探偵作家クラブ賞短篇賞を受賞。昭和30年代以降は一連の忍法帖シリーズで一世を風靡し、昭和40年代には『明治断頭台』『明治波濤歌』など明治ものの作品が続き、以後は室町ものに新境地を示す。近年、若い読者の間で人気復活。

剣鬼と遊女

定価 本体543円＋税

平成9年1月10日 初 版
平成10年10月30日 2 刷

著 者 山田風太郎
発行所 廣済堂出版

特選
時代小説

山田風太郎傑作大全 9

剣鬼と遊女

山田風太郎

廣済堂文庫

特選
時代小説

山田風太郎

剣鬼と遊女

廣済堂文庫

特選
時代小説

2230①

山田風太郎　剣鬼と遊女

山田風太郎

花の吉原を舞台に遊女との悦楽を繰り広げる妖しい剣気に包まれた御隠居の正体は？

特選時代小説　**廣済堂文庫**

廣済堂文庫

特選
時代小説

山田風太郎傑作大全

廣済堂文庫売上カード

廣済堂文庫 山田風太郎

山田風太郎傑作大全 9

剣鬼と遊女

559 や—7—9

☆本カード一〇〇枚を一口として貴店様印を押し、小社までお送り下さい。貴店様の売上資料にさせて頂きます。

廣済堂出版
〒105 東京都港区芝3-4-12
営業 03(5445)1202
関西支社 06(4444)5911

ISBN4-331-60560-4 C0193 ¥543E

廣済堂文庫注文カード

特選 時代小説

書店名・取扱店

部数

570

<559>や—7—9

剣鬼と遊女

山田風太郎傑作大全 9

廣済堂出版 山田風太郎

定価 本体543円 +税

ISBN4-331-60560-4 C0193 ¥543E

特選
時代小説

山田風太郎傑作大全 9

剣鬼と遊女

山田風太郎

廣済堂文庫

目次

剣鬼と遊女

木曽殿と背中合せの寒さ哉

「もし」
小稲は呼んだ。
「もしっ、どうおしなんしたえ？　御隠居さま。……」
御隠居は、なお、うなり声をたてていた。まるで、地獄の底からはいあがってくるような、気味わるい声だ。青黒い額からこめかみにかけて、あぶら汗が、ふつふつと浮かんでいる。
ああ、やっぱり——と思うと、小稲はぎょっとしてはね起きた。この声だ。三千歳花魁の部屋から深夜もれてくるのをいくどか廊下できいたのは、この声だ。……みていると、御隠居は、すじばった手で、じぶんの首をしめつけている。ふくれあがった指のさきが、やもりみたいに頭の皮をうねりつつ、這いまわる。小稲は、しばらく声をかけるのもわすれて、恐怖の眼で、この不気味な客をみつめていた。
この客は、実は番頭新造である小稲の客ではない。花魁三千歳の馴染である。馴染といっても、三月に一回くらいしかやってこないが、とにかくふしぎな客だった。
第一に、その素姓がよくわからない。いや、引手茶屋や、この大口屋の亭主の方ではわかっているのかもしれないが、遊女仲間はだれも知らない。三千歳さえも知らないらしい。とにかく、最初は八丁堀の与力といっしょに遊びにきたそうだから、身もとはたしかときまっているが、廓では、ただ、「麹町の御隠居さま」だけでとおっている。年は五十七、八であろう、背のひくい、骨と皮ばかりに瘦せた老人だった。
廓にも、老人客は少なくはない。しかし、さすがにその大半は、いつもにこにこしている垢ぬけのした通人か、もしくはあぶらぎった色親爺かで、この御隠居みたいな陰気な老人はいない。ただ、この老人の唇が目立って大きく、また赤いのが、いかにも獣めいた心もちを起こさせた。
つぎにふしぎなことは、花魁三千歳が、存外この御隠居をきらっていないらしいことだ。けちというほどでもないが、大尽あそびをするわけではない。それなのに、あのわがままで浪費家で、気っぷのいい——まして、直侍といういい人がいる三千歳が、こんな老人のどこにひかれるのだろう？　むろん、今夜のように直侍がくれば御隠居には名代をあてがってがまんしてもらうけれど、ともかくも、あの直侍がいや味をいうほどに。
もう夜明けにちかい春の廓は、さすがにひそと寝しずまっている。そのなかに、老人はなおうなっている。

「ううむ。……諸行無常……是生滅法……ううむ……」

かたかたと鳴る歯のあいだから吐き出された舌が、風にふかれる枯葉のようにそよいでいた。

小稲はいちどにげ出そうとしたが、根がやさしく、またしっかり者のたちだけに、必死にすりよって、その背をゆさぶった。

「もしえ、御隠居さま。もしっ」

老人は、眼を見ひらいた。まるで夕闇の光が霧をとおしてくるような瞳で、ぼんやりと小稲をみて、

「ああ、おまえか」

「あい。ひどくうなされていなんしたが、なんぞ悪い夢でもお見なんしたかえ？」

「ううむ。……血に酔うたような」

「え」

「いや、酔いが、まだ醒めぬようじゃ、宵の酒にな」

小稲は、まじまじと老人の顔を見つめている。御隠居は、ちょっとどぎまぎして、ふとごまかすように、床の間に置いてあった印籠をとってくれといった。

みごとな蒔絵の五重の印籠のうち、老人がいちばん上の匣のふたをとると、脂ぎった、薄鼠色のどろどろしたものが入っている。彼は、それを指ですくって、ぺちゃぺちゃとなめた。

「御隠居さま。それはなんの薬でありんすえ」

「これか、これは——ふふ酔いざめの薬じゃよ」

「なんで作ったものでありんす」

「さ、それは南蛮渡来の秘方箋で、おいそれとは申されぬ。新造、なめて見ぬかえ」

「ま、甘いような、気味のわるい匂い。——わたしは、酔っておりんせんからようありんすよ」

小稲は、顔をそむけた。老人は、笑いをうかべた眼で、じっと小稲をながめている。

「それでは、これはどうじゃな。精をつける妙薬じゃが」

御隠居が次にいちばん下の匣からとり出したのは、七、八分くらいの、細長い、赤黒い、ちょっと青味をおびた、茄子の腐ったようなかたちをしたものだった。

「妙な顔をしておるな。あやしげなものではない。このわしが作ったものでな、その効験、巷間に用いられる女悦丸やら鶯声丹の比ではないぞ。ふふ、三千歳も大好物じゃが」

「ほほほほ」

と、小稲はむりに笑った。もとからぶきみな老人だと思っていたが、いよいよ妖術使いみたいな恐ろしさを感じてきた。そのへんなものの正体は知れないが、そのききめは疑えないようだ。老人が泊った夜、あのうめきのあとでよく三千歳の身も世もあらぬ声をきいたことがしばしばだから——。

ああ、ひょっとすると、三千歳がこの御隠居にいくぶんでもひかれるのは、この薬のためか

も知れない。……

「そんな薬をいただいては、花魁にしかられんす。……御隠居さま、おきのどくでありんすねえ」

馴染客がきた夜に、花魁にさしさわりがあると、客は妹女郎をあてがわれる。これを名代とよぶ。揚代金は花魁とおなじ値段、しかも背中合わせにねるだけで、この名代には一指もふれてはいけないのが、廓のしきたりだった。

老人は笑いながら、その茄子の腐ったようなものをぺろりとすすりこんだ。小稲の気味わるがっているのを面白がっているような眼つきである。

「新造、おまえなかなか美しいの。三千歳にもおとらぬ。……生まれはどこだえ」

「南部でありんす」

「なに、南部」

「ま、恥ずかしい。御隠居さまは、南部にお知り合いでもおざんすか」

「うむ。わしの養子が、南部の家中からもらったものでの。もっとも、もう五、六年もまえに死んでしまったが。……したが、これは奇縁じゃ。どうじゃな。新造、花魁には口をぬぐって」

いま食べたもので紫色にぬれた唇が、にたりと笑うのをみると、小稲は総毛立った。

「花魁が叱りなんすよ。どうぞ不承しておくんなんし」

「はは、固いの、新造。それでは、もういちど柳下恵をきめこむか」

「柳下恵とはなんでおざんすえ」

「若い女といっしょにねても平気で眠った唐の聖人じゃよ」

小稲は、たとえ背中合わせにしても、もういちどこの御隠居とねるのがいとわしかった。それに、またあのうなされる気味のわるい声をきかされるようなことがあっては。……

「御隠居さま、さっきどんな悪い夢をお見なんしたえ？」

「首斬りの夢じゃ」

「え？　首斬り？」

「されば、きょう、悪縁での、牢屋敷で、斬首の刑に立ち合わねばならぬ羽目にあったのじゃ。それで夢見が悪かったらしい。……新造、おまえ、お仕置をみたことがあるかえ」

「めっそうもない。そんなものは見たこともないし、見とうもありんせん」

「罪人は、半紙二枚をかさね、二つに折って、折目に藁縄をとおして目かくしをされておる。それを三人の男がお仕置場にひっ立ててくるのじゃが、もう罪人の足は宙に浮いているようであったよ。首の座にひきすえられた囚人のまえには、九尺四方の穴が掘られてあっての。そこに男二人が、罪人をまえにかがめ、首をのべさせ、返り血が穴へとぶように左右からその足のおや指をしっかとにぎっておる……」

「よしておくんなんし、御隠居さま……」

「まあきくがよい。きょうはひどい雨であったろう。首斬り役は片手に傘をさしておったが、いや、みごとなものであった。右手にひきぬいた一刀、諸行無常、とつぶやいて柄に中指をあてる。是生滅法、といってくすり指をおろす。生滅滅為ととなえて小指をおろす……」
「ああ、それでは、さっきの念仏のような囈言は――」
「寂滅為楽っ、とさけんだとき、紫電一閃、罪人の頭から血煙がとんだ。首はおちない。首は、頸の皮一枚をのこして、ぶらんとぶら下る。これだけみごとに斬って、首斬役山田浅右衛門の袖は、血はおろか、雨一滴にもぬれてはおらなんだな」
「御隠居さま。……主さんは、牢屋敷の御役人さまでおざんすか？」
なにやら、陶酔したように、陰々滅々としゃべっていた老人は、急に夢からさめたように、ちょっと小稲のおびえた顔をみて、にやりと笑った。
「いやいや、わしは役人ではない。刀剣鑑定をなりわいとする浪人者じゃよ。……ただの、斬罪にあったあとの屍骸は御試しの御用に立つ。わしは、或る御方からの御依頼での、新刀のためし斬りを山田浅右衛門にたのんだので、それを立ちあったのじゃ。首なしの屍骸の胴を、土壇の上に釣って、一ノ胴をまっぷたつに斬っておとす……」
「よして――もう、よしておくんなんし」
「斬り口は、まるでまぐろを輪ぎりにしたよう……」
油がつきたか、ふっとたそや行灯がきえた。きゃっと小稲はとびあがりかけたが、相手にす

がりつきかねて、耳を覆っていやいやをした。
もう夜明けがちかいが、朦朧とほの明るい障子を背に、瘦せこけた老人は、うす気味わるい笑いをたたえて、燐みたいにひかる眼で、じっと遊女のおびえを見つめている。

傾城のふるさと寒きところなり

半年ばかりたって、廓には、正燈寺の紅葉をかついでやってくる客が多くなった。その秋のある夜、「麴町の御隠居さま」が、あやうくとんだ左野次郎左衛門をきめこむ騒ぎがもちあがった。
その日の夕方、大口屋の柿色のれんを割って入ってきた御隠居は、たいへん機嫌がわるかった。もともと、きたときから何やら不愉快そうな顔つきであったが、そのうえ、おめあての花魁三千歳が廓にいなくなってしまったときいて、老人は苦虫をかみつぶしたような表情で酒をのみはじめた。
三千歳が脱廓したのは、二、三日まえの風雨のはげしい夜のことだった。朝になって、そういえば、前夜大引け前に、大門の外でいそいで四手駕籠にのった袖頭巾、赤合羽の男が、妙になよなよして、内股だったという者があったし、その駕籠についていた頰かぶりの男が、どうやら直侍らしかったという者があって、まえまえから三千歳の間夫が、その片岡直次郎という素寒貧の渡り侍であることは吉原雀のあいだでは知らないものはなく、店の方でもちかごろ直

侍がくると三度に二度は会わせまいとしていたところだから、三千歳がドロンをした手引をした奴はこいつにきまっているのだが、さて名うての色悪、前夜から仲の町の引手茶屋に泊っていたと、もっともらしいアリバイまでこしらえてしゃあしゃあしているのだから、始末におえない。

さて、それはともかく。

麴町の御隠居のきげんのわるさには、みんなほとほと手をやいたらしい。たいていのことにはおどろかない太鼓持の志庵が、頸すじをかきかき階段をおりてきて、

「へっ、死にはぐれめ」

と舌を出したくらいだから、よほどのことである。そしてキョロキョロあたりを見まわして、小稲の姿を見つけると、

「おいおい、小稲さん、おめえさんを是非呼んでくれってきかねえぜ。いってやっておくんなさいよ。もう三千歳花魁がかえってきても、これからはおめえさんに乗りかえるそうだ——」

「ばからしい。よしておくんなんし」

と小稲は顔色をかえた。恐ろしい、身ぶるいするほどいやな客だった。

三カ月ばかりまえも、直侍がきたときに三千歳の名代をまたたのまれて、小稲はにげたのだが、そのかわりに出たお雪という振袖新造が、御隠居にれいの妙な薬をついのまされたばかりに、なにかに酔ったようになって、そのあいだに老人から、あとでかんがえると吐気をもよおすようないたずらをされたという。——だから、小稲は、今夜もわざとかくれるようにしていたのに。

そのくせお雪は、どういうわけか、ふらふらと御隠居の座敷へ出ていったのだった。

「もし、もうお雪さんがいさんすのではないかえ？」

「それが、御隠居は、どうあってもおまえさんが御執心らしい。たのむたのむ。花魁なみにお食好みをあそばしちゃあ、番頭新造の亭主さんにもわるかろうぜ」

この小稲という女、番頭新造のくせに、何だか妙に地女めいたところがあって、侍客などにはそこが好かれるらしいのだが、志庵にはあまり気に入られない。

ちくりと一本刺されて、小稲は悄然と、御隠居の座敷に出た。

「おお、新造、よくきてくれた。おまえがきてくれぬと、わしは……今夜はこのまま帰ろうかと思うていたのじゃ」

麴町の御隠居は、小稲をみて、額をたたいて恐悦した。もう呂律が、だいぶあやしい。彼はいつも酒をのんだ。たいして好きでもないらしく、お銚子を三本もあけるともう苦しそうにぜいぜいのどを鳴らすくせに、なにか人に語れぬ屈託を麻痺させたいとでも思っているように、口に酒をながしこむのがつねだったが、今夜はまるで猿みたいな顔になって眼までがギラギラと赤くひかっている。

「これはまあ、はばかりでありんすねえ」

とお雪はぷいとそっぽをむきながら、朱羅亭(しゅらお)の煙管(きせる)を隠居の膝におしつけた。これがふつうの客なら、

「熱ッ、とんだ煙管のやきかね場――」とかなんとか悦に入るところだが、ひどく手前勝手な老人で、

「な、何をいたす、この無礼者めが」

と、邪険にお雪の手をはらいのけて、盃を小稲の方へさし出し、溶けてながれそうな笑顔で、

「さ、新造、のんでくれえ。わ、わしの盃を受けてくれえ」

「御隠居さま、あんまりお酒がすぎますと、またあとで苦しゅうはありんせんかえ」

と、小稲はしかたなく笑いながら、おずおずと傍に坐った。

「おお、苦しい……うなされるかもしれぬ。わ、わしは、新造、またきょういやあなものを見たよ。……」

「えっ、それじゃ、また、あの――」

「左様さ。例の御刀鑑定で、よ、よんどころなく……」

「あっ、よしておくんなんし」

小稲が身をもがいたのは、話もいやだが、老人の骨ばった、そのくせ、酔っているせいか妙にしなやかな腕がくびにまきついてきたからだった。

「まあ、きいてくれえ。きょ、きょうは山田浅右衛門め、いかがしておったのか。……いや、

罪人が女であったせいか、こ、こいつひどく未練な奴でな、縄もとかぬうちにあばれまわって、あ、浅右衛門も縄取りも、もてあました風じゃった。検視はあごをふって、は、はやく斬れと仰せられる。女は、斬れば化けて憑(と)り殺すとかなんとかわめいて、まるで石橋(しゃっきょう)の獅子のように首をふる。……」

頸をがくがくさせながら、老人は、またあの茄子みたいなものをしゃぶっていた。しかも小稲をはなさないのだ。半ば面白がり、半ば本人も本当におそろしくて、女にすがりつき、しゃべらずにはいられないといった様子だった。

「ついに、たまりかねたか山田浅右衛門、縄取りに、放せ、と申した。縄をはなされて、まえににげるところをうしろから、ぱっと斬りつけたが、き、き、斬りそこねてうしろ頭が、じゃりっと小豆でも斬ったような音をたてた。あっと思ったとたんに、女はふりかえりざま、いやあな声をあげて、あ、浅右衛門に抱きついた」

「きゃあ」

と、お雪が妙な声をたてて、つっ伏してしまった。老人は痙攣(けいれん)する腕で、あのしゃぶった茄子を小稲の口にむりにおしこもうとしている。

「眼かくしはとれ、女が狂いまわるたびに、血、血がダラダラと顔じゅうにながれて、まるで夜叉(やしゃ)のようじゃ。浅右衛門とて、全身蘇芳(すおう)をあびたよう。が、とうとう女は押したおされて、ね、ねじ斬りに首を斬られてしもうた。……」

「うっ」

小稲は死物狂いに顔をそむけようともがいていた。口におしこまれようとするものの、なんというやな匂いだろう。

いまにも吐きそうになって、蒼白になって、やっと身をふりほどくと、小稲は五尺も向こうへころがっていって、すっくと立つと、紅潮した顔で、

「……………」

何かののしろうとしたとき、障子があいた。入ってきたのはお銚子をとりに下へいっていたやりて婆さんだ。

きょとんと妙な顔をして小稲をみたが、とっさに事情を察したらしく、

「あれまあ、新造、めずらしい風で、四谷の先生が店においでだ。ちょいとはやくいってごらんな」

「まっ四谷の――」

と小稲はさけんだ。眼がかがやいたが、この場合、あんまり話がうますぎる。ちらっとやりての顔を見ると、

「ほんとだよ。まあいって見さっし」

うそまでついて、女郎をたすけてくれるような婆あではない。

「四谷の先生とは誰じゃ？」

と、麹町の御隠居がにがりきっていった。

「四谷の平山道場のやっとうの御師範で、下斗米さまとおっしゃるお方で――小稲さんとは、お故郷がおなじとかで、新造が大熱々のお馴染さんでござんすよ」

女郎をかばうほどの気もないが、こういう婆さんの声になんとなく小気味よさそうなひびきがあるところをみると、さすがのやりて婆あも、この御隠居ばかりは少々うれしくないお客らしい。もっともそれは、この老人が存外しまりやのせいであるかもしれない。

「まあ、御隠居さま、ここはひとつ粋なところを見せてやっておくんなさいましよ。――ささ、御不承をねがって、お熱いところをもうひとつ――」

やりての気味のわるい愛想笑いを背に、あともふりかえらず小稲は階段をかけおりていった。

絃歌さんざめく見世さきに、ひやかすでもなく、下斗米秀之進は苦笑いして立っていた。傍に、へべれけになって、しきりにその袖をひっぱっているのは、これはいつもよく遊びにやってくる関良輔という浪人者だった。

四谷で、門弟三千をかかえる平山塾の主平山子竜は、心貫流からあみ出した実用流の独創者で、その名のしめすごとく形や見栄をきらう、実用一点ばりの剣法を鼓吹したが、その荒道場で四天王の随一といわれた下斗米秀之進。もともと、こんなところへ来る人間ではないが、彼に兄事する関良輔が多血多感の豪傑で、一夜むりにさそい出してきたらしいのだが、たまたまそれに出たのが大口屋の小稲。話してみて故郷がおなじ南部なのでびっくりした。

南部も南部、下斗米秀之進といえば幼いころから南部藩の神童とよばれ、十四歳にして南部侯へ建白書を出して脱藩して江戸へはしり、いま江戸第一の大道場平山門の師範代となっているという噂は、南部一円で知らないものはない。

――その下斗米さまと――小稲はゆめではないかと、ふだんでもわが身をつねって微笑する。南部にいれば思いもよらないことだ。全身をやくほどの恥ずかしさと同時に、彼女はいつ死んでもいいほどの女郎冥利(みょうり)をかんじていた。

この純情が下斗米を打ったのだろう。それからも彼は、なんどか関良輔にひかれて大口屋へ足をはこんできた。

「おおっ、待兼山(まちかねやま)のほととぎす――先生、菩薩降臨(ぼさつこうりん)でござるぞ」

いちはやく良輔が小稲を見とめて浮かれるのに、

「これ、よせ」

と秀之進は苦笑いしている。小稲はその声をきいただけで、からだじゅうの血がドキドキ鳴って、生娘(きむすめ)みたいに真っ赤になった。

「まあ、きついお見かぎり。今日はどっち風が吹いたのでありんしょう」

うらめしそうにいって、はしりよって下斗米にとりすがったとき、見世の奥から荒々しい跫音(あしおと)がした。

「刀っ、面白くもない。わしは帰る!」

麹町の隠居だった。ぎらぎらと光る眼でこちらを見ながら、唇を、ぐい、とまげて、大小を受取っている。その足もとに、にゃあ、と黒い猫が一匹まつわりついていた。この老人の持つあの奇妙な薬の匂いが、猫をひきつけるのであろう。

「こ、これは、あの三千歳の飼猫ではないか」

と、隠居は刀を腰にさしながら、ぎろっと足もとを睨みつけた。

「へい、左様で」

若い者がそういって手をすったとき、隠居は、たっとその猫を宙に蹴りあげた。

ぎゃあ――、舞いあがった猫の声は異様な余韻をひいて、あとは血しぶきに断ちきられた。隠居の刀がその胴を真っ二つに斬って土間へ落したからだ。

「あっ――」

みながいっせいにたちあがったとき、隠居は、猫はおろか、下斗米や小稲も見ず、のれんを割ってヨロヨロと外へ出ていった。

「なあんてえ畜生だ。あのおいぼれ三ピンめ」

若い者が舌打ちして、みんなこわごわと無惨な猫の死骸のまわりに集った。

関が呵々(かか)大笑した。

「眼中血ばしり、いや、身共かえるじゃて――か。あははは」

「ああ、いやや、ほんとうにいやな客でありんすにえ。主さん、さあ、こんないやなところより、

はやくあっちへ――」

　身ぶるいして、袖をひっぱる小稲に、下斗米は土間にひき入れられたが、ふとふしんげな視線が猫の死骸におちると、はっとしたように、

「はて、この斬り口は――」

と、関良輔と顔を見合わせた。なんとなく愴然（そうぜん）としたものが、ふたりの面をながれたようである。

夕鴉ほど土手をゆく黒頭巾

「――お、あれは」

　四ツ、というと、まだ、各妓楼の二階からは、三味線や太鼓や女の嬌声（きょうせい）やが、天楽のように降り、見世見世の格子からも、それにまけぬ三味のすががきの音、女の呼ぶ声、それにからむ嫖客（ひょうかく）の笑い声、客を案内する茶屋の箱提灯。――そのぞめきのなかから、思わず小さく叫んだ声がある。

「うむ、麹町のおいぼれだな」

　こううなずいたのは、いま叫んだ男と同様頬かむりしているが、大小はさしているところをみると、侍のはしくれだろう。

「うむ、三千歳がいねえものだから、隠居め、むくれてかえるところだな。丑（うし）、ちょいと耳を

かせ」

　ふたりはヒソヒソ何やら話しあっていたが、そのうち、どっちもふいと人ごみにきえてしまった。

　麹町の隠居が大門から衣紋坂（えもんざか）に、ふらりとかかったとき傍によってきて、ぺこぺことお辞儀する男があった。

「ええ、今晩は、御隠居さま、ごきげんよろしゅう。……」

「きげんは悪いぞ。大きにわるい！」

「へっへっ、実はそのことにつきまして――」

「そのことについてとは何じゃ。おまえは何者じゃ」

「大口屋の若い者で――御隠居さま、三千歳花魁のゆくえがお知りになりたかあございませんか」

「なに、三千歳？　三千歳はどこにいるのじゃ」

「実は、その、入谷の寮にいなさるんでございますよ。御存知かどうかしりませんが、花魁には片岡直次郎という悪がくっついていやしてね。これには店はむろん、花魁もホトホト手をやいて、それでそっと寮にかくれていなさるんでございます」

「さ、左様か。それで安堵（あんど）したわい。じゃが大口屋でも、わしにまでかくすことはあるまいに」

「いえ、それが、ほかの女郎もやりても太鼓もいるところでは、どんなはずみで直侍の耳に筒ぬけになるやらわかりませんや。そこで、御隠居さまにだけそっとお知らせするようにってことで——」

「あ、あのわしにだけ？」

「左様で。こいつは花魁からのたのみでもごぜえます。是非御隠居さまを寮へお呼びしてくれろ——と、へっへっ、お熱いことで」

老人は、年甲斐もなく、顔じゅうをニタニタさせた。もう子供みたいに足ぶみして、

「駕籠をよべ、駕籠を」と、若い者をせきたてる。

——まもなく、隠居をのせた四手駕籠が一挺(ちょう)日本堤を北へはしっていた。途中でやや南におれて、鷲(おおとり)神社から太郎稲荷(いなり)の傍をとおって、入谷田圃(たんぼ)にかかる。

この道は上野方面から吉原へゆくのに最短距離ではあるが、人通りがないので、夜は物騒だから、御徒町(おかちまち)へんの手利(てきき)の武家でもなければ、めったに通う人もない。が——。

案内の若い者は駕籠の傍についてかけているが、同時に、いつのまにかその駕籠の前後を、十人あまりの黒頭巾が、とりかこむようにはしっていた。——いつか中秋の満月が空にかかって、キラキラと刈田の水にくだけている。

「駕籠をとめろ」

こう叫んだ声は、駕籠の中からではない。地に下ろされた駕籠からは、なんの声もない。

「ええ、御隠居さま」

ついてきた男が声をかけたが、駕籠がしんとしているので、うす気味がわるく、とみには近づきかねた風情である。

——と、黒頭巾の群のなかから、これは頰かむりをした半纏(はんてん)の男が、つかつかと歩み出て、

「やい、老いぼれ、出ろえ」

と叫んだが、駕籠の中から、かすかに鼾(いびき)の声がするのをきくと、急に、にやにやと笑い出して、どんと駕籠を蹴った。

「な、なんじゃ。もう寮についたのか」

なかで、こんな寝ぼけた声がして、よろよろと隠居があらわれた。

駕籠にゆられて、酔いがいっそう深くぶりかえしたとみえて、朦朧(もうろう)たる眼で、まわりにひろがる入谷田圃と、妖(あや)しい黒頭巾の群とをみても、べつにけげんとも思わないらしい。

「こ、これ、三千歳はいずれにおる？」

「けっ、この腎張(じんばり)爺いめ」

と、相手の男は舌打ちしたが、急に猫なで声になって、

「もしえ、麹町の御隠居さま。あっしゃあ、おめえさまと、実は廓で乳兄弟。へっ、三千歳からいろいろとお噂をうかがっておりやすから、とんと他人と思えやせん。まだ青二才だが片岡直次郎という弟を、どうぞ末ながく、可愛がってやっておくんなせえまし」

言葉はまるでやくざだが、手拭をとると、凄味のあるいい男。さすがに隠居は、ぎょっとして月明りにそれを見返して、侍髷の月代がのびた、

「ほほ直次郎とはおまえか。み、三千歳にだにのようにくっついているという悪党は。――いろいろと、悪名がたかいぞ。まだ若いのに、ゆくすえが案じられる」

「こいつは御挨拶だ。へっ、御意見を承るまでもなくこの片岡直次郎、どうせいつかはふんづかまって、天下の御法で首の座にすわることあ覚悟しておりやす。――そこで、御隠居さま。ものは談合でやんすが」

「な、なんじゃ」

「三千歳が、入谷の寮にいることあ、むろん嘘の皮。実あ、あいつのたってのねがいで、世間の噂どおり、このあっしが廓をぬけさせたのにちげえねえ。この上は、へっへっ、おたげえにこがれ死するほど惚れているふたりが、世間の隅っこでちんまり世帯をもてばほかに望みはござんせんが、金が仇の世の中でね、それにはちいっと金が足りねえ。そこで御隠居さま、お願えというのあ、その金を、あっしの首代として前金でお貸しねげえてんで」

「な、なに」

直侍、ピシャリとじぶんの細いくびをたたいた。

「こういやあ、ものわかりのいい御隠居さまにあ、ずんとわかっていただけやしょう。こんながん首でも、廓を通りゃあ入山形の花魁が、みんな格子へ鈴なりだ。まして、おめえさまの弟

分、どうぞおとこ気を出して、たった百両!」

襟のあいだから、ぬっと手を出した。

隠居は、駕籠に背をもたせかけたまま、夜光虫みたいにうすびかる眼で、じっと直侍を見つめている。なんとなく直次郎が妙な気持になったとき、隠居は突然、ケタケタと笑い出した。

「うむ買うてやろう。そ、その首――。はははははは、その面、その美しいしゃっ面の皮ばかりではなく、め、眼も、舌も味噌も喃、ひひひひひひひ」

直次郎はなぜか総身に水をあびたような感じがした。隠居はふところに手を入れたが、すこし考えこんで、

「じゃが、百両はすこし高いな。……さ、三十両にしてくれぬか?」

と梟のような眼つきをした。

これが直侍をからかっているのでも何でもなく、たんに老人らしい吝嗇のせいで、その実、隠居が存外臆病なことはそのつぎにわかった。

「な、なめるねえ、このおたんちんめ。下手に出りゃつけあがりやがって。――ううむ、その様子では、ふん、そこにたんまりともっているな。おい」

と、直次郎はうしろをふりむいた。なに、こいつだって、色男金と力はなかりけりで、腕のほうは、からっきし自信はないが、はったり度胸だけは人一倍、ましてうしろに狩りあつめてきているのは、御家人崩れやら、無頼の浪人やら、町の悪党仲間。

「めんどくせえ。いっそたたッ斬ってやろうか」

むろん、おどしでこういったのだが、黒頭巾のなかから二、三人、存外本気で眼をひからせてつかつかと寄ってきた。

「よかろう。斬るなら、おれにやらせろ。おれはこのおいぼれに、ちょいと恨みの筋があるのだ」

「ひっ」

というような声をたてて、老人は両手をまえにつき出した。酒も何もさめはてたらしい。狼狽して、ヨタヨタとうしろへすさりながら、

「お、お手前方は、な、何を——」

といいかけて、突然その二本の足が宙にあがったとみるまに、ざぶうん、と、あおむけに田圃のなかへ落ちこんだ。

「しまった！」

かえって、直侍のほうがあわてふためいた。隠居が奇声をあげながら、もがいて、泥田の中をにげようとするのを見たからである。鴨をにがしては万事休すだ。

「おい、しかたがねえ、斬っちまえ！」

そう叫びながら、抜討ちに刀身をのばしたが、老人の背にはとどかない。

——と、そのとき、この騒ぎに誰も気がつかなかったが、そこからすこしはなれた杉木立の

かげに立ってこちらを見ていた二つの影が、疾風のようにかけよってきて、

「待て、待て」

と黒頭巾の群に割って入った。

泥の中でこけつまろびつしている隠居に、数本の乱刃を泳がせていた悪党たちは、愕然とふりむいて、それが仲間でないと知ると、

「おやあ？　こいつ——どこからうせやがった」

「邪魔すると、こうだっ」

ふたりほど、いきなりうしろなぐりに刀をふるったが、たちまち田圃のなかに蹴こまれて、夜目にも真っ白な水けむりをあげた。

「やっ？」

みな仰天して、あわてて路の左右へどっとひいたが、おどろきよりも怒りに眼が血ばしったのは、直侍ばかりではない。今夜の仕事にドジをふめば、酒代はおろか、飯にもありつけぬ餓狼のような連中ばかり。

「えい、こいつらもいっしょに、ぶった斬ってしまえ」

ふたたび、じわじわと寄りつめてくる兇刃の中で、二人はにやにやして話をかわしている。

「先生、さっきの猫の斬り口でござるが、あれはまぐれでもありましたろうか」

「さればさ。いまの老人の醜態では、思いもよらぬが。——追ってきたのが、くたびれ儲けら

しい」

「くたびれついでに、このうじ虫どもとひとあばれするとしますか」

「待て待て。関。――恥ずかしいことに、わしはまだ人を斬ったことがない。どうせ近く殺生の旅に出ねばならんうえは、ここでその腕だめしをさせてもらうことは、天のあたえしもっけの倖せ、良輔、おまえは斬ってはならんぞ。――」

「こなくそ！」

ひとり、獣のようにとびかかってくるのを、

「わしに斬らせろ！」

声と同時に、黒頭巾の刀とからだが一間も泥田へとんで、水音一颯、あとに声なし――。

むりもない。鬼道場平山塾の竜とうたわれる下斗米秀之進。にっとみせた白い歯のあいだから、蜘蛛の糸のようにたぐり出される妖気にからみよせられて、またふたり、フラフラと泳ぎ出て、絶叫と血けむりのなかにつんのめった。

「諸行無常――」

誰やら、そんなことをつぶやく声がきこえたが、悪党たちはもうその声の主をふりかえる余裕はない。もみにもんで斬りかかる乱刃が、凄まじい鋼の音とともにはねのけられると、

「是生滅法！」

黒い影がのけぞって、ねじれて、路上にどっと打ち伏した。

「たっ、逃げろ、みんな逃げろ！」

たまりかねたか、片岡直次郎、まっさきに刃をひいて、あともふりかえらずはしり出した。それにつられて、どっと雪崩のように逃げ出す群から、またひとり、運の悪い奴が、一間はしって、もんどりうった。

「生滅滅為。――」

陰々滅々たるこの声に、ようやく気づいたのは関良輔、ヒョイと田圃のなかを見ると、まるで枯木のような黒い姿が、ガタガタふるえながら、呪文のようにとなえている。

「寂滅……為楽……」

頭から泥をかぶって、眼ばかりひからせている麴町の御隠居、しかもなにやら陶酔しているような――さしもの下斗米の胆を、ぞっとさせるような声であった。

名代は言わんすなとて罌粟の花

三年たった。

苦界にしずむ女たちは、歳月の波にみるみるあさましいほど容色が衰えてゆくものなのに、ふしぎにも大口屋の新造小稲ばかりは、いよいよ美しく凄艶なばかりになった。

ふしぎにも？　――ふしぎではない。それは彼女の心が、毎日きえることのない白熱の炎をもやしつづけてきたからだった。恋の炎を、そしてまた手に汗をにぎるような戦慄の炎を。

すべては、下斗米秀之進によるものだった。けれど下斗米は、その三年間に、ほとんど廓にきたことはない。そしてもう永遠に小稲のもとへは来ないであろう。

なぜなら――彼はあの夜からまもなく南部へかえった。南部の津軽に対する二百年の宿怨をはらすためである。

津軽の藩祖はもと南部の一家老にすぎなかった。ところが、太閤の小田原陣のさい、彼はまんまと秀吉にとりいり主家をあざむいてその津軽領をうばってその主となったのである。しかもそののち勢いは南部藩をしのいで、ちかくはその国境の檜山をだましとり、その山の檜で暮しをたてていた南部の百姓は塗炭の苦しみにおちいった。――小稲も、そのために身を売った娘のひとりである。

下斗米は決然立って、津軽越中守を狙った。陸奥から羽後にこえる矢立峠に大筒をしかけて津軽侯の行列をねらい、また大館で越中の乗物を樹上から狙撃し、地雷火で多数の津軽藩士を空中に飛散させた。その執拗な暗殺行に、越中守は戦慄し、また激怒して、無数の刺客をはなったが、下斗米は、江戸に、奥州路に神出鬼没のはたらきをしめして、彼らを斬りすてた。滄海に壮士を得、秦を椎す博浪沙、韓に報じて成らずといえども、天下みな震動す。変名した下斗米は十日ばかりまえ、ついに幕吏にとらえられたが、津軽は天下の笑いものとなり、下斗米変形の名は、江戸の町々に瓦版となってうたいはやされた。

すなわち、その名、相馬大作。

「……新造、泣くことはない」

と、いったのは、関良輔。そうはいったが暗然たる顔だ。八月の末ちかい雨の夜、廓のはずれ、三千の遊女の化粧水が小暗くながれる水道尻の、おはぐろどぶのふちだった。

「越中の首はあげ得なんだとは申せ、あれほど津軽の胆をうばい、恥を天下にさらさせたうえは、先生の士道万世を照らす。先生も、もはや、御本懐だろう」

彼は、いよいよ大作が小塚ッ原で処刑される日がちかづいてきたらしい、と小稲に告げにきたのである。

雨が、蕭々と傘をたたいていた。

「ただ……」

と、彼は頭巾のかげの顔をくもらせて、

「少々気がかりな噂がある」

「……なんでありんすえ？」

「首をきるのは、公儀御試御用の山田浅右衛門。その浅右衛門に津軽家から三百両をそえて、越中守の差料延寿国時をわたしたという噂じゃ。ついに津軽の手にあまった先生を、せめて越中の刀で斬ろうというわけであろう。めめしき奴らの思いつきそうなこと。――が、もしそれがまこととすれば、先生の御無念はいかばかりか。……」

「ま、卑怯な――」

「なんとか、それはさしとめたい。が、わしは逢ったことはないが、山田浅右衛門はなかなかの理財家で、そういうことは珍しくはないということじゃ。こまったことは、このわしの非力、いや腕にはおぼえがあるが、何分、わしとても先生の一味として目明しどもに狙われておる人間、三百両という大金は思いもよらねば、よし才覚がついたとしても、まさかおおっぴらに浅右衛門のところへ参るわけにもゆかぬ」

小稲の眼が、うしろの秋葉常灯明のうすぼんやりした光の中をふる雨にそそがれた。恐ろしさのため、吐気のようなものが胸にこみあげた。

けれど、そのつぎには、或るよろこびがその胸にあふれみちてきた。

きっと顔をふりあげて、

「関さん。そのことはわたしにまかせておくんなんし」

「あんたに？」

「あい、お金も、それから山田浅右衛門との話合いも」

「あんたが、どうして」

「わたしには、この三年ばかりまえから、どうしても身請けをしたいといってきかないお客がひとりありんす。……そのお客が……まあ、なんという天の配剤でありんしょう、その山田浅右衛門とやらと、どうやら知り合いのお人らしゅうおざんすにえ」

「な、なに、それは、どういう――」

「やはり、その御刀鑑定の方で、昵懇らしい様子……あまり好きでないお客ではありんすけれど、大作さまのおためとあれば……ほほほほ」

小稲は笑った。

その声は生娘のように明るく、その横顔は常灯明の灯に、白蠟のようなひかりをはなった。

「いえいえ、関さん、もう何もいって下さんすな。これはまあ、ほんになんという倖せでありんしょう、南部のためにあれほど苦労しいした大作さまに、気ははやってもかなしい遊女の身、なんのおためにもなりんせんことを心苦しゅう思うていいしたに、やっとお役にたてるとは。……」

ひぐらしや地獄をめぐる油皿

――小稲は、船酔いのような思いで、夢ともなく、うつつともなく、明るんでくる障子の影をみつめていた。

彼女にとっては、殉教的な一夜だった。頭のおくに、痛みとともに、その夜明けのような仄明るさがあった。これで……これで大作さまが、怨敵越中の刀できられなさることだけはまぬがれる。せめて、せめてこれが遊女のわたしの恋の……

二、三日まえ、小稲はあの御隠居に身請けしてもらうことを承諾したのだった。いや身請けばかりでなく、べつに三百両まで出してもらったのだ。そして、その金を御隠居にそのままわ

たして山田浅右衛門に、相馬大作を越中守の佩刀で斬らないように願ってくれとたのんだのだった。――どっちかといえば、なかなかしわん坊の御隠居のことだから、ひょっとしたら、という恐れははんぶんあったのだが、老人は存外たやすくいうことをきいてくれた。

「よいよい。その金出してやろう」

老人はにたにた笑いながらいった。

「そして、浅右衛門にたのんでみてやろう。……可愛いおまえのためとあればな」

可愛いおまえのためとあればな――、なんというそれは恐ろしい愛撫であったろう。

もう六十に手のとどいた御隠居は、気ばかりあせった。彼はまた例の自家製の異様な薬をくれた。そして、それを小稲にもしいた。小稲はやけになってそれを食べた。殉教者にとっては、苦しみが、甚だしければ甚だしいほど、いっそう愉悦をかきたてられるものだ。

けれど、その茄子の腐ったような、甘酸っぱい薬は、たべてみると、いつまでも舌にトロリとした脂をのこし、小稲のからだの肉のふかみからうずうずさせた。隠居は今夜はうなされなかった。いや、明けがたまでも、寝もしなかった。彼は、歯のない歯ぐきで、小稲の肌のすみずみまでなめまわした。

小稲はもだえて、あえいで、声が出た。

（ああこれだ、三千歳花魁の声は、やっぱり……）

まだ身うちに熱をもっているような女のからだが、自分ながらかなしく、それが（ただ、大

作さまへの）という彼女の満足をかげらす、呪わしい一つの雲だった。

「妙に、赤いの、新造」

と、老人がいった。疲労をくぼんだ眼窠によどませて、死人のように眠っていた隠居の眼が、いつの間にか、うす赤くひかっている。

「朝やけじゃな」

なるほど赤い。夕やけとまちがえたか、庭の方から、雨のふるように、もうひぐらしが鳴きしきっていた。

「起きなんしたかえ、御隠居さま。まだ早うありんす。もっと寝ていなんし」

「ふしぎな光じゃ、この赤いひかりでみると新造の美しさはまた格別、まるで天女のようじゃの」

なめるように小稲を見まわして、また枕もとの印籠にモゾモゾと手を出すのを、小稲はあわててとめた。

「御隠居さま。そのお薬は、いったい何でありんすえ？」

「これか。ふふふ、どうじゃ、なかなかよい薬であろうがな。……おまえはもう身内、もうゆうてもよかろう。これ、耳をかせ。……これはな、人間の臓腑や脳味噌やら」

「ええっ？」

たまぎるような声をあげて、小稲はがばとはね起きた。老人は、もうその茄子みたいなもの

をぺちゃぺちゃとしゃぶりながら、

「それ、あの山田浅右衛門よ。あれの家に、肝蔵というものがある。なに三間に二間くらいの小さな蔵じゃがの。なかには綱をひきまわして、それにこのようなものが、たくさんぶらさがっておる。下にはいくつかの大甕があっての、なかにはこれまたドロドロした臓腑がいっぱいつまっておる。……首斬御用、お大名からの新刀おためし御用、刀剣鑑定、それにこの御仕置人の肝やら脳味噌やらからつくる薬と、ひひ、あれもなかなか、なまじお旗本などより内実裕福じゃよ。ヒヒヒヒ」

小稲は行灯のそばにいざり逃げて、みぞおちをおさえたまま、肩で息をしていた。

「この薬を手に入れるためにも、わしはときどき首斬りにもたちあわねばならぬ。……うまく斬れても、斬りそこねてもいやあなものじゃ。わしはその日はきっとここへやってきて、あたたかな、柔かい女の肌にふれねばようねられなんだ。……きのうはべつに首斬りがあったわけではないがの、おまえの身請けが待ちきれんで、やってきたわけじゃ。もう、おまえはわしのところへ来てくれるのじゃから来んでもよかろうと思うが。……いや、また今夜来るかもしれんぞ。きょうまた首斬りが一つある。……ヒヒヒヒ」

障子いよいよ赤く、部屋じゅうに満ちる妖しい血いろのひかりのなかに、老人は白髪あたまをふりたてて笑った。油がつきたか、灯心がじじっと鳴って、行灯がきえた。

「ご、御隠居さま、きょう、きょうの、首斬りというのは？」

「可哀や、きょう首討たれるのは、おまえの恋いこがれる相馬大作。おお、何たる悪縁じゃろう。それをき、き、斬らねばならんとは。……思うに、あの花魁三千歳の間夫片岡直次郎とやらも、いつの日か御試御用の座にひきすえられることじゃろうが」

小稲は、朱色のひかりも染めきれない蒼白の色にかわって、すくんでいた。全身が、ひきちぎれるような恐怖にうたれた。

「それはそうと、新造、もうなんどきじゃろう？」

老人はむくりと身をおこした。

「わしは、そろそろゆかねばならぬ。伝馬町の牢屋敷へ。――きょう小塚ッ原へ送られる相馬についてゆかねばならぬ。……」

小稲は、しめつけられるように叫びをあげた。

「御隠居さま。あなたはいったい、どなたでありんす。もしや……もしや……」

「わしか。ふふふふ、わしの素姓を、まだ亭主はおまえに告げておらなんだかの。いや、それをいうと花魁たちにきらわれると思うて、わざと長いあいだ伏せてもらっていたのじゃが、女房になるおまえにまでかくすわけにもゆくまい。わしは、麹町の浪人、ただし、先祖代々――」

立ちあがって、みるみる衣服をき、袴をつける老人の瘠せたからだを、ぼうっと靄のように妖しい剣気がつつんだ。

「公儀御試御用を承わる――わしが、山田浅右衛門吉睦（よしちか）」
音もなく歩いていって、障子をあけて、
「おお赤い、赤い、死人の腸（はらわた）のように雲が赤い――」
がっくりと失神した小稲は、その刹那に、朝やけをうずめるひぐらしの声を、この世の終りの海嘯（つなみ）のようにきいた。
時に、文政五年八月二十九日。
五代山田浅右衛門が、相馬大作処刑後、津軽家の家老笠原八郎兵衛に送った口上書がのこっている。
「――御庖丁をもって二品とも料理仕り候ところ、御道具見事ゆえ出来はなはだよろしく、さりながら疵（きず）をつけ候段恐れ入り候。御道具結構（けっこう）の上、手さえすき候ほどと存じ奉り候」

元禄おさめの方

妖姫（ようき）おさめの方

一

「出羽、近う」

と、綱吉はいった。

「盃をつかわす」

まひるの酒のせいか、それとも先刻みずから演じた能のせいか、綱吉の顔はさくら色だ。柳沢出羽守吉保は膝ですすみ出て、うやうやしくお流れを頂戴した。

小姓が酒を注ごうとしたとき。――

「これよ」

綱吉はうしろに控えている小姓をかえりみた。

「それ、よこせ」

小姓はしばらく何のことかわからないらしかったが、将軍の眼が自分の捧げている刀に向けられているのを見ると、狼狽しつつも、その刀を将軍にさし出した。綱吉の佩刀伯耆（はいとうほうき）安綱であ

る。

「出羽、これも引出物としてつかわそう」

あまりの寛闊（かんかつ）さ――というより度外れの将軍の機嫌ぶりに、そこに居ながれた重臣や柳沢家の人々はどっとどよめいた。

「出羽どの、頂戴なされ」

と、毛のない梟（ふくろう）みたいな顔をした知足院隆光がやっと声をかけた。

柳沢吉保は盃を手にし、刀をつき出した綱吉を見上げて、身動きもしなかった。むろん感動のせいもあるが、すでに頂戴したお盃を、これから頂戴するお刀の処置にとまどったせいもある。それと見るや。――

「その盃、返せ」

と、綱吉はいった。

人々はどよめきも忘れ、息をつめてしまった。臣下から返盃させる将軍というものが、いままでにあったろうか。

しかし、この日は綱吉と吉保のプレゼント合戦ではあった。

この春の一日、はじめて神田橋の柳沢出羽守の屋敷を訪れた将軍綱吉は、そのために吉保がわざわざ隣りの小笠原遠江守の屋敷を除去させた二千五百坪の土地に新しく設けた北殿、中屋、西東殿に迎えられ、将軍の趣味である「大学」の講義、また能舞台での「橋弁慶」「羽衣」な

どの将軍自演の猿楽などの行事をすませ、いま山海の珍味をつくしての宴楽となったのだがこのあいだにも、数時間おきに綱吉が、吉保及びその一族におびただしい引出物を下賜する。白銀、羽二重、縮緬、時服、鞍馬、伽羅香などに、雪舟の絵屏風、明の陳広翻手筆の「孝経」など。——これに対して吉保も、黄金、太刀、紗綾、茶壺など、将軍に倍する量を献上する。

しかし、綱吉が側用人たる吉保に返盃を求めるに至って、この君臣交歓はきわまった。

感動のためにふるえる手でお盃を返し、お刀を拝領したあと、

「上様」

と、吉保はいった。

「もはや出羽、上様にささげまつるものとてはござりませぬ。ただこの上は、女人一人を」

「なに？」

と、いったが、反射的に綱吉の眼が一方に走った。吉保はいう。——

「御還御までのお慰みに、あそこにおりまする女どものうち、お気に召したもの、どれなりと」

そこには吉保の妻のみならず、四、五人の側妾が坐っていた。綱吉の酔眼に、その中の一人がかすかに——しかし、花のようににいっと笑んだ。

その顔に綱吉の眼がとまったのはいまがはじめてではない。きょうここへ臨んでから、彼の眼はことあるごとにその女人へ吸いつけられていたのだ。

吉保が女人に対する好みが極度に洗練されていて、世にもまれなる美女の側妾を揃えているという評判はきいていて、綱吉もそれは認めたが、その予想や認識を超越して、彼はその側妾の一人に魂を奪われた。

眼、鼻、口、そして姿態、いずれもともより無双の美しさだが、それらを超えて何たる気品と妖艶さのみごとな溶合であろう。

……かかる女人もこの地上にはあり得るか、とこれまた美女には馴れた、綱吉も舌を巻いた。

——ほんの先刻、「大学」を講義した口で、しゃがれた声で綱吉はいった。

「出羽、ここには他の家来どももおる」

まさにその席には老中や若年寄の、大久保加賀守、阿部豊後守、土屋相模守、戸田山城守、秋元但馬守や、知足院隆光などの学僧が陪席していた。

「その前であえてそのようなことを申してくれたその方の心、綱吉、尊いと思う」

ものはいいようだ。しかし、衆口をかえりみず、かかる途方もない献上の意志を表白した柳沢は、たしかにおのれを捨て切ったものといえる。

しかし、そんな判断はたんなるいいわけで——ただ肉欲に心魂燃えあがった綱吉は、顔のみならず眼まで充血させていった。

「よし、その忠心受けて、あのおさめを愛でつかわそう」

——数十分ののち、綱吉は、吉保の愛妾おさめの方とともに閨にいた。

そしてこの女人の、それまでのあらゆる期待、妄想をはるかに絶する蠱惑に酔いしびれた。漁色家の綱吉だが、こんな女ははじめてだ。彼女の肉体は幾千匹の白蛇のように微妙にくねりまといつき、そして彼女の粘膜は彼の髄液まで根こそぎ吸いあげるようであった。しかも、妖艶さの一方で、この世のものならぬ気品をもけぶらせていたこの女人は、実に綱吉をうめき出させたほどの大胆な——破廉恥とも思われる所業をもあえてした。

綱吉は狼狽し、むろん恐悦し、ついにはとろけ果てた。

「さめ。……そちはいつも吉保にかようなことをいたしておるか」

綱吉は吉保にはじめて嫉妬をおぼえながらいった。

おさめの方は、綱吉の股間から顔をあげ、問いとはくいちがった答をした。

「わたしは、去年の九月から、主人の伽に侍ったことはございませぬ」

「去年の九月？」

「上様お成りのことが決まりましてから」

「出羽の心か？」

「はい。——」

痴鈍化した綱吉の頭にも、「では、おさめを献上したのは、そのときからの吉保の予定であったか」という驚きがひろがった。

しかし、彼は吉保の罠にかかったと思わなかった。怜悧なやつ、とも思い、また忠義なやつ、

とも思った。たとえ吉保の罠であるにしても、これはあまりにも魔魅の罠であった。

しかも、この寵臣の妾はさらに驚くべきことをいう。

「まちがいなく上様のおたねを身籠りますために」

たんに将軍に献ぜられるために身体を洗って待っていたのではない。将軍の子を孕むためだといっているのだ。

おさめは甘美な濡れた唇でいった。

「わたしは上様のお子を生みとうござりまする！」

そして、意志とは無関係に恢復した将軍の肉体に、彼女はまたも蔓のように巻きつくのであった。

その夕刻、綱吉は城へ還御した。柳沢家での最後の出来事は、むろん一握りの人間だけが知っていることだ。彼は何くわぬ顔をしているつもりであったが、乗物のまわりにいた家来たちは、この壮気に満ちた将軍がひどく疲労気味で、足さえふらついているのを認めた。

二

まもなくおさめの方は男子を生んでいる。

吉保はこれを吉里と名づけた。

そのやや少し前に、綱吉は例の「生類憐愍の令」を出している。これは、手あたり次第の淫

楽をほしいままにしつつ、世子というものが出来ない綱吉に、妖僧隆光が、「人に子の生まれないのは前生に殺生をした酬いであります。されば子を求めんとすれば、生類を殺生しないにしくはありませぬ。上様に於かれましても、まことに御世子を欲せられるならば、なにゆえ殺生禁断の令をお下しなされませぬか。しかも上様は戌年のお生れでござりますから、何よりも犬を苦しめることを禁ぜられなければなりませぬ」という仏教的迷信を吹きこんだためだといわれるが、またべつに一説がある。

たまたま綱吉の何度めかの柳沢家へのお成りのとき、庭で騒ぐ声が聞えた。犬が交尾しているのを、中間たちが面白がって、水をかけたり棒で叩いたりしているのだ。が、犬の交尾は牡が射精しなければ離れることが出来ないから、犬は大いに苦しんでいた。それを見たおさめの方が、中間たちを叱って犬を助けた。

その日、例によって綱吉はおさめの方を愛撫したのだが、その直前の見世物に昂奮したのかおさめの方は牝犬に化したかと思われるほどの痴態をあらわにした。

――その結果、吉里が生まれたのである！　この奇縁、さらに綱吉はもとよりおさめの方も二まわりのちがいはあるが、いずれも戌年であったということから、おさめの方の願いによって生類憐れみの令が出されたという。

吉保の閨に侍ったことはない、とおさめの方が保証した通り、吉里の顔はあきらかに綱吉の風貌を伝えていた。

それはともかく、柳沢吉保の昇進ぶりは、吉里の誕生以来飛躍的となっている。

もともと彼は百六十石の小姓に過ぎなかったが、その抜群の聡明さと滑脱の社交性によって綱吉の寵を受け、このときまでにお側御用人、つまり将軍秘書として柳沢出羽守三万二千三十石の大名にまで累進していた。これさえも珍しい出世である。しかも吉里の誕生以来、それはさらに異常なものとなった。綱吉一代のうちになんと十五万千二百八十八石、しかも別に課役免除の石高七万七千余石、併せて二十三万石になんなんとする大々名に成りあがったのだ。

吉保はたんにその愛妾を将軍に献じたばかりではない。綱吉にまた男寵の嗜好があるのにつけこんで、美少年たちをおのれの邸内の寄宿舎に住まわせ、これを監督して出仕させた。

また将軍のみならず、しきりに美少女をおのれの養女として、老中土屋相模守や大久保加賀守の嗣子に輿入れさせた。彼はその妾を娶るにも、その女を嫁せしめるにも、「一本の空矢なし」といわれるほどの閨閥の網の目を張りめぐらした。

昌平橋に聖堂を作り、しきりに大学を講ずる一方で、家臣の妾を愛し、男寵にふけり、さらに人よりも犬を尊しとする悪政を恬然と行う綱吉の下で、決してこれに抗がわず、その欲するがままにまかせ、吉保はひたすらおのれの権勢の扶植と彼自身の栄華の愉楽にはげんだ。

しかも、この一代の権臣にして、ついに吉里を綱吉の正式の子として認めさせることは出来なかった。綱吉にほかに世子がないにもかかわらずだ。母が吉保の妾というのでは、いくら何でも徳川家六代さまとするわけにはゆかない。――

正夫人、また大奥の側妾についに世子を作ることの出来なかった綱吉は、どうしても亡兄の子、甲府宰相綱豊を後嗣（こうし）と決定せざるを得なかった。

そのころから、おさめの方は病んだ。

宝永二年四月末、綱吉は五十何回めかの柳沢邸訪問をした。吉保を通じて、おさめの方に呼ばれたのである。

吉里がついに公認されなかったことに至るまでのおさめの方の悶えぶり、隆光に頼んで綱豊調伏まで祈らせたということをよく知っていた綱吉は、彼女の病いもそれによる打撃に相違ないと推量し、やや恐怖心を以て臨んだが、想像以上のやつれぶりに眼を見張った。おさめの方は、病床で彼を迎えたのである。

しかも、三十九歳というのに、何という美しさであろう。やつれはて、しかもいよいよ月輪のごとくとぎすまされた美貌は、世にひそかに伝えられ、綱吉も耳にしている「元禄の大魔女」「妖牝犬」などという評を、はじめてその通りだと彼に認識させた。

にもかかわらず、おさめの方は、その病める褥（しとね）に綱吉をみちびき入れ、綱吉はそれに吸い寄せられずにはいられなかったのだ。

そして、魔界の交合をくり返した。

「護国女太平記」という江戸時代の実録体小説によれば、このとき。——

「おさめはおん手にすがりて申すよう。いやしき私こと、たびたびお情けをこうむり、ついに

おんたねを宿し参らせ、いまの吉里はこれぞまさしく君のおんたねゆえ、大切の儀なれば——」

この秘密を知っている柳沢家の女にして口軽のものは、大事を包まんがため吉保がひそかにことごとく殺害したことをいい、

「私の子なれども吉里はおんたねゆえ、かほど出羽守は守護したてまつり、敬いおり候に、しかるに先日御養君綱豊卿西の御丸に入らせられ候えば、まさしくお世嗣（よつぎ）にならせ給うべし、と出羽守申すたびに、女ごころのやるせなく、将軍のおん子と生まれながら、わずか十五万石の御宛行（あてがい）にて一生を送り給うと思えば、果報つたなく存ぜられ、ゆいしょなき私の腹に身籠らせ給いしゆえと存じ給えば、もったいなくもただわが身を恨み候よりほかはござなく候」

と、かきくどいたという。——悪文だけに、かえってそのかきくどきの情が現われている。

綱吉はたまりかねて、ついにおさめの方にお墨付を渡した。

「柳沢出羽守に、甲斐・信濃両国にて百万石、追て沙汰すべきもの也。綱吉朱印」

吉保に百万石与えることは、すなわち吉里に百万石与えることである。

おさめの方はにっこりと打ち笑ったが、それから十二日目、眠るがごとくこの世を去った。

さて、それから三年八カ月、このお墨付はまだ実行されなかった。この途方もない約束を実現させるためには、どうしても柳沢吉里が綱吉の実子であることを内外に公表しなければ通らないからである。

が、宝永六年を迎えるや、綱吉はついに踏み切った。彼は権現さま以来徳川家相続の伝統を黙殺することを決心した。そもそも彼は、自分こそ第二の権現さま、世の虫けらどもを超えた特別の人間であると信じるほど大天狗になっていたのである。

しかるにその一月十日朝、突如彼は死んだ。

一ト月を経て、その正夫人信子も俄かに死んだ。夫人は京の鷹司家から来た人である。

この将軍夫妻の相つぐ死について、匿名の筆者ではあるが——事実は大宰春台の著わしたものといわれる——必ずしも無責任の記述ではないと見られている「三王外記」にいう。

「王（綱吉）、峡侯（吉里）を益すに扶百万石をなさんことを定め、正月十一日を以て詔を下さんとす。藤后（鷹司信子）これを知る。ゆえに期に先立つ一日、手づからこれを刃傷す。藤后またすなわち自殺す。列相近臣合議して藤后の喪を秘し、出痘起たざるを以て聞ゆ。月を越えて喪を発すという」

綱吉が吉里に百万石をあてがうことを発表せんとする前日、御台所がその暴挙を防がんがためにその夫を手刃し、自殺した。近臣たちは御台所が疱瘡を病んでいることだけを発表し、わざと一ト月おいてからその死を公けにしたというのである。「護国女太平記」という稗史の題名はここに発している。

なお、人も知るように、日本の将軍の閨房には、当番と非番と二人の女人が同衾するという世界に例のない怪風習があった。これはこの綱吉の百万石のお墨付事件以来、房中の密語によ

るかかる将軍のとろけぶりを防止するために爾後生じた慣習であるという。

三

——以上が後代ひそかに面白がって伝えられた妖婦おさめの方についての巷説である。

事実はどうであるか。

綱吉がその正夫人に殺されたというのはフィクションであって、両人は当時流行した天然痘のために死んだというのがほんとうらしい。また柳沢吉里に対する百万石のお墨付というのも作り話らしい。ただ、吉里が果して綱吉の御落胤であったか否か、という問題はどうであるか。

これについても疑問視するむきがある。それはだれしも常識的に見て、まさか？と思うからである。しかしそれを否定する声は甚だ弱い。

私は、これは事実だと見る。それは綱吉があまりに非常識な人間だからであり、かつ柳沢一族に対する待遇があまりにも非常識だからである。ここに世の常識は通用しない。

さて、おさめの方の事実はどうであるか。

彼女は、ほんとうの名は染子という。

十三歳にして京から下って江戸城大奥に勤めた。江戸城大奥には京の公卿の家に縁ある女性が多かったから、彼女も同じ出身であったと思われる。やはり柳沢吉保の愛妾となった町子という女性が正親町家の娘であって、染子はその姉ではなかったかという説もあるが、正しい素

姓はわからない。

そして貞享四年九月三日に柳沢邸で吉里を生んだ。ときに染子は廿一歳であった。

正親町町子の残した「松蔭日記」のこの年この月の條に、

「三日、太郎君生まれ給う。ちかく抱きたてまつり見せたてまつるに、いとうつくしうめずらかにておわすれば、ゆくすえたのもしう嬉しと御覧じいれるさま思いやるべし」

とある。

従ってすでにこのとき染子が大奥から下って柳沢家の側室になっていることはたしかであるが、しかしこれが綱吉の子としても、綱吉が柳沢邸に臨んで身籠らせたものではない。

なぜなら綱吉がはじめて柳沢邸を訪れたのは、「徳川実記」にも明らかなようにその四年後の元禄四年三月廿二日のことだからである。

私は貞享三年の暮、江戸城大奥に於てお手がついて懐胎したお染が、その後吉保に下賜されて柳沢邸で出産したものと見る。

なぜ、それがあくまで綱吉の子であると見るのか。

――くりかえすようだが、それ以後柳沢一族に対する処遇があまりに異常だからだ。

吉保の稀有の累進はすでにのべたが、綱吉が柳沢邸に臨んだのは、元禄四年三月を皮きりにその死の三カ月前、すなわち宝永五年十月までの足かけ十八年間に実に、五十八回に及んでいる。大ざっぱにいって四カ月にいちどは訪れていることになる。

さらに吉里に対しても、百万石のお墨付というのは伝説であって、実は吉保に二十三万石を与えたのに尾鰭がついたものだが、二十三万石にしても論外であって、このときさすがの吉保も固辞したのを、綱吉みずから吉里に朱印状を与えたという。吉里わずかに十九歳である。これ父が子に二十三万石を与える光景でなくて何であろうか。

そしてまた染子だが、彼女が病んだとき綱吉はとくに老中松平右京太夫を見舞いにゆかせている。これが臣下の妾に対する扱いであろうか。またその死するやその墓に、吉保は「施主甲斐少将吉保」としるした。官名まで書くのは、臣か主を祭るときの行為だという。またその百日忌にあたり吉保は、「霊樹院（染子）百日の忌、特に台命をこうむり、うやうやしく和歌二十一代集・源氏物語おのおの一部を献ず」としるしている。これがおのれの妾に対する言葉であろうか。

妖婦であるか否かは知らず、無限の女性を手に入れるのに何の労もいらぬ大天狗綱吉、人間操縦の大家たる大官僚柳沢吉保をして、かかる人倫外の境外にたてまつらせた染子は、たしかにただの女人ではない。――

大天狗綱吉

一

——元禄山護持院の本堂に読経の声がこだましている。林立する円柱や飾られた仏具の金銀は香煙に燻（いぶ）されて重々しい光をはなち、その下にいならぶ僧や侍の姿は、すでに霊界の幻影のようだ。

大僧正隆光にうながされて、将軍綱吉はすすみ出た。

彼がこの日、この場所に出たということさえ、異例も異例、文字通り空前絶後の出来事だ。この将軍の行為は、いかなることでも唯々諾々（いいだくだく）として従う家来たちも、はじめこの知らせをきいたときは、みな顔見合わせてうなり声を発したほどであった。しかし、いまはもうだれも、神妙な、厳（おごそ）かである顔を伏せて、じっと手をついている。

そして綱吉はまた群僧、群臣の表情などをおもんぱかるところはなかった。平常もその通りだが、きょうはいよいよ以て他人の心などかえり見るゆとりはない。

彼は香をつまんで、そして煙の中に見下ろしている「霊樹院本然自覚大姉（ほんねんじかくだいし）」の法名を見上げ

た……。

二

——余は帰るべき港を失った小舟のような気がする。

はじめ、まなじりを決して荒海へ乗り出したときのあの壮志はどこへいったのか？

二十五年前、余は大野心を抱いていた。たんに将軍になろうとする野心ではない。もともと余は将軍たるべき立場の人間ではなかった。本来ならば兄の子たる綱豊がその地位につくべきであったのだ。それを押しのけ、大老酒井の制止や水戸の老公のいやがらせを踏みにじって、強引に余が五代将軍となったのは、すべてその野心をとげんとする意志にほかならない。

野心とは何か。

要するに余のもとに日本はじまって以来の盛代を現出しようという望みだ。

秩序はもとより必要だ。しかしそのために頭から世を圧服し、民を奴隷化するような世を作ろうとは欲しない。また支配者だけの栄華を求めない。太閤の治世のごとき、あれは真の盛代とはいえない。余は、民のすべてがおのれの才能と欲望のゆるされるかぎりをほしいままにし、しかも豊かで秩序ある世を現出させたいと望んだのだ。

将軍になるや、ただちに余はその望みの実現に乗り出した。

ただ、余は考えた。いかに善意の政治を行なおうと欲しても、その一面に秩序は必要である。

その根幹に民のあなどりを受けない権威は堅持しなければならぬ。古来、いかに善意だけの為政者が、結果としてどのような破綻を生んだか。たとえば最高度の東山文化を作り出しながら、ついに応仁の大乱をはぐくんだ足利義政などのごとし。それにくらべては、堂々と「余は魔王なり」とうそぶきつつ、応仁以来の戦国を終熄させた織田信長のほうがはるかに偉大だ。そこでまず余は、秩序のために学問を鼓吹する一方、権威確立のために劈頭大鉄槌を以て臨んだ。襲職以来、諸藩とり潰しの連打がそれだ。

余の襲職のいきさつがいきさつであったから、いっそう諸大名に対して強面に出ておく必要もあった。実は知行没収によって幕府の財政を建て直す必要もあった。しかし目的はまず五代将軍恐るべしという印象を、ひろく天下の民の脳裡に叩きこんでおくことにあった。

思いみれば、あれは一種の恐怖政治といってもよい。何しろ、万石以上の大名だけで二十余家、合わせて百四十数万石を召しあげたのだから。

これが効き過ぎた。天下は余に慴伏した。

やがて余は手綱をゆるめ、真の目的たる民の欲望と才能をほしいままにさせることに努め、その通りの世は現出したのだが、余個人に対する畏怖感はついに変らなかった。

一面それを望みつつ、一面余は不満であった。

そもそも余は上州館林の一大名から将軍に変ったとたんに、余のまわりの家来たちの態度がたちまち一変したのを滑稽に思ったものだ。

「これ、その方ら、それほどかしこまるのは、将軍という位に対してか」

「はっ」

「余の人間そのものが変ったと思うか」

「はっ」

「人か位か」

「はっ」

彼らはただひれ伏すばかりだ。余は苦々しくなった。

特に家老の牧野備後までが変ったのにはめんくらった。あれは余が決して厳格一点張りの人間ではない——むしろ八方破れの性格であることを知っている。襲職以来の仕置が、ことさらの意志を以て行っているものであることは知っているはずだ。が、彼がいちばんそれ以来おのれというものを殺したもののように見えた。

次第に余は腹立たしくなった。彼らも余を人間外の人間と見たが、余もまた彼らを人間とは思えなくなった。余は——少くとも余のまわりの者が——自我を没することを望まぬ。秩序さえ保てば、この余自身も大いに自我を発揮し、まわりの家臣どもも分に応じた自我を発揮することを欲したのだ。

余は彼らがまったく無抵抗な動物と化したのに耐えられなくなった。

三

特に、女だ。全然面白うなくなったのは。

館林の大名であったころは、余の寵愛した女どもは、それなりに活気があった。余はうぬぼれをいうようだが、まるはだかの男としても、充分女に対して魅力のある男だと思うている。女たちは、大名としてではなく、たしかに男としての余に応えているように見えた。

それが、余が将軍となってからは、それ以来新たに大奥に入れた女はもとより、以前からの女もまるで人形みたいになりおった。感情はおろか、熱い血までなくなってしまったような。

これは、形容ではない。実際、女どもは子を生む力さえ失ったようだ。あるのはただ嫉妬心だけだ。その感情だけは残っていたのがふしぎだが、事実その通りだ。どういうわけか、余のたねを身籠った女は、かたっぱしからみな流産した。心がよろこんでおらぬからだ。ただ男女二人だけが生きて生まれはしたが、それもまた幼くして死んだ。女どもが子を生む力さえ失ったというゆえんだが、ひょっとすると他の女の嫉妬の呪いのせいかも知れぬ。それも思えばあたりまえだ。もしぶじに男子を出生すれば、それが六代将軍となるのじゃから。

とくに奥の信子の嫉妬は甚だしかった。これはそもそも京から来たときから、血のない、嫉妬だけの女であったが、おゝ、いまにして思うと、女どもみな流産したのは、信子の嫉妬を恐れてみずから水にしたのかも知れぬ。それほどあれの妬心は手のつけられないものがあった。

さて、余は歯ごたえのない食い物には飽きた。余は抵抗を欲した。——家来にも、女にも。

そこで起ったのが例の阿久里(あぐり)事件じゃ。

いまは柳営の側用人となった牧野備後守成貞(なりさだ)、あれの屋敷に臨んだ際、余はふと備後の妻の阿久里を所望した。

もとより備後の妻は、夫には不相応な美女として聞えた女ではあった。さればこそ左様なことをいい出したのだが、いかに将軍とて正気でそれを望む者があろうか。余はまったく酔余のたわむれのつもりであった。しかるに備後はひれ伏した。

「あ……ありがたき御所望でござりまする」

余はむしろかっとした。まことに阿久里を余の閨(ねや)に侍らせたのはその怒りのためだ。

さりながら、この大破倫に対して、いかに何でも四十に近い女が抵抗せずにはおくまいと覚悟しておった。かりにも老中首座にひとしい側用人の妻ではないか。

余はふるえておる阿久里にきいた。

「これ。……この夜のこと、そちは何と思うておる？」

「光栄に存じております。……」

阿久里は答えた。そしてやすやすと余に抱かれた。

燃えるはずがない。女は自我を殺すのに必死で、燃える余裕などあろうはずがなかった。余は燃えた。ただしさげすみの炎を以て。

そのころじゃ、余の前におまえが現われたのは。

――いや、おまえが護持院隆光、そのころ大和長谷寺の塔頭慈心院隆光につれられて江戸へ下り、わが母桂昌院の手引によって大奥に奉公するようになったのは十三のときであったと申したな。

しかし、余の眼にとまったのは、おまえが廿才になった春のことであった。

それまで余の眼に入らなかったのをふしぎに思う。おそらくあまりの美しさのために、まわりの女どもがわざとかくしておいたのであろう。しかしおまえの春の月のような美しさは、大奥の雲を破って余の前に現われずにはいなかった。

とはいえ、余はべつにさしたる昂ぶりもなく、おまえを抱いた。

おまえをいわゆるお手付きの中臈の身分にもしてやらずにそういうことになったのは、そのような手順を踏むいとまさえ惜しいおまえの美貌のゆえであったが、一方またすぐに捨てる人形の一つのつもりでもあったからだ。

しかるに。――

抱いて余は、これは、と思った。美しい女ほど味気ないという考えにとりつかれていた余をおまえは驚かした。おまえの肉の柔媚快絶もいまだ味わったことのないほどのものであったがその上――おまえは燃えたではないか。

おまえは実におとなしい女であった。おのれの美しさを知らないというより、恥じて恐れて

いるかに見えた。むりもない、いまの大奥は身分がつり合わねば、美しうあればあるほど、それを恐れなければならぬような妖しき雲がたちこめている。おとなしいが、他の女のように無反応とはちがう。おまえがあのころ、何の技巧も心得ているわけがない。おまえは天然自然に快楽の坩堝と化したのだ。おとなしいおまえが、余の愛撫に応えるときだけは純粋に燃えた。

ふしぎな女だ、おまえは。

余にとって珍しい。――いや、はじめて知ったといっていい女であったが、世上の男のだれにとっても珍しい女の一人であることを余は疑わぬ。

そして、おまえは当然のごとく懐胎した。身籠るとともにおまえの美はいよいよとぎすまされ、同時におぼろおぼろとなり、まさに春の満月のごとく妖艶無双の女となった。

余はそのいずれをも悦ぶべきであった。事実余は悦んだ。同時に恐れたのだ。そのいずれをも。

そのときおまえはまだ中臈ではなかった。信子は大奥の掟にうるさい女であった。やがて生まれて来る子を六代将軍たるべき余の世子とは認めそうになかった。いや、それどころか余は漠然とその子とおまえのいのちにすら危険をおぼえるようになった。

余は隆光に相談した。隆光はくびをかしげて思案したのちにいった。

「いかにもお危のうござるな。……とくに、御台さまと同じ、京から参られた方だけに」

いま思うと、隆光がそういったから余が不安になったのかも知れぬ。

隆光はいった。

「柳沢にお下げなされ」

知らなかったのだ。おまえを貴重な女と知りつつも、なおかつほんとうの値打ちを余はまだ知らなかったのだ。

そのころ余もまだ四十一才。ほかの中臈どもからまだ世子の生まれる可能性は充分あると思い込んでいたのだ。

柳沢出羽は、そのころようやくうとましくなっていた牧野備後に代って、余の最も信寵する第二の側用人たらんとしていた。

その年の暮、余は身籠ったおまえを出羽に下賜した。

あくる年の九月三日におまえは柳沢の屋敷で吉里を生んだ。

四

余がはじめて柳沢の屋敷へ臨んで吉里を見たのは、それから四年後のことだ。

なぜ四年も捨てていたか。——捨てていたわけではない。吉里が生まれると、それまで二千石であった吉保を翌年に一万二千石にとり立ててやったことでもわかるであろう。もとよりあれは吉里の養い料だ。

しかし、ともかくそのあいだ余を足踏みさせたわけはほかにある。例の安子事件だ。

余は牧野備後夫婦をうとましう思った。しかもそれ以来も、あれは絶対の忠誠に徹し切ったつらをしている。余はたまりかねて、いっそうあれを蹂躙してやりたい衝動にかられた。そこで、そのころ、また牧野邸に臨んで、こんどは廿一になる娘の安子を所望してやったのじゃ。

驚くべきことに牧野夫妻はこれも平伏して受けた。

「ありがたき儀に存じたてまつりまする」

余は安子を犯した。これで余は第一の臣下の妻と娘——母娘をともに姦したことになる。

さりながら——安子もまた冷たい人形のように身をまかせたが、数日後——おまえも知っておるように自害した。

さすがに衝撃を受けて、わしはその当座臣下の家に臨むことは中止した。

とくにおまえのような立場の女と、余の子の住む柳沢の屋敷へなど、滅相もないことであった。

しかし、ようやくこのころ、余はもはやほかに子は出来ぬのではないかという怖れが生じつつあった。

余は隆光に相談した。

隆光はまじめな表情でいった。それが例の生類憐れみの令じゃ。かかる慈悲の功徳によって子を作ることが出来るという。——

余は隆光の顔を見つめた。すると隆光はいよいよ厳かな表情で申した。

「犬を憐れむというより、むしろ人より犬を大切にするのでござる。犬を人の上に置くのでござる。もとより世は騒ぎたてましょう。それに耐え、それを抑えてなお犬を人の上に置く。かかる念力、意力があってこそ、はじめて御世子御誕生のお力も生じましょうぞ」

甚だ突飛な結びつきのようだが、余にはよくわかった。何やら祈願することあるときは、茶断ち塩断ちするのと同じことだ。——かかること思い立つがゆえに、余はあの隆光という天才的坊主を捨てられぬ。

しかし余はまたべつのことを考えた。

それは人よりも犬を高くするという世を作り出して、人間どもの我のあわてぶりを見てやりたいという望みだ。余のゆくところ草のごとく伏し、余の一言、神のごとくあがめおる——その実、そう見せかけておる家来や民の自我の殺しよう、自尊心の捨てようが、はたしてどの程度のものか見てやりたいという望みだ。余は諸人の服従ぶりにほとほとうんざりしておったのだ。

かくてかの生類憐愍の令は下された。施行の責任は柳沢にゆだねた。

余の意志と柳沢の施行ぶりは絶対であり、徹底的であった。——はじめこの法を、まず気持だけのものであろうと軽く考えて犬や燕を殺した侍や町人を、彼は断乎として処刑した。ほんとうに遠島にしたり、甚だしきは斬首したりした。

果せるかな、怨嗟の声は巷に満ちた。それは余も知っている。余はむしろこのことから、民

のあいだに一揆ぐらい起ることを待望したのだ。しかるに、そのようなことはついに起らなんだ。怨嗟は役人のいないところで、口や落首で泡を吹くだけで、かえって役人には石を投げるどころか密告する始末だ。

何やらなまこでも相手にしておるような気色の悪さであった。ほんとうに一揆が起ったら果して余が愛い奴と快哉をさけんだかどうか、余自身わからぬところもあるが、とにかくこれはこれなりにあと味の悪い反応であった。

そのころに、柳沢がふと申したのだ。

「牧野備後守どののひそみにならい、いちどわが家にもお成り下さらば、生々世々の光栄に存じまするが」

ふと余は、余のただ一人の子の吉里のことを思い出した。そこではじめて柳沢の屋敷にいって、見てやる気になった。吉里が生まれてから四年目、すなわち元禄四年三月のことだ。

吉里を見るのが、余と吉保の表面上の黙契であったが、むろんおまえも見ることになって、余ははじめておまえを見たときよりも驚きをおぼえた。

おまえはちっとも変ってはおらなんだではないか。いや、さらにその妖艶ぶりをいやましておったではないか。しかも、それを背光のごとくふちどる清らかさは何であろう?

やがて余はそのわけを知った。吉保がにいっと笑ってささやいたのだ。

「吉里君お母さまは、吉里君お母さまとして四年お過しなされておりまする」

つまり吉保は、おまえを清浄のままにしておいたというのだ。

余もあのあとで悔いたのだが、しかし余がおまえを吉保に下賜したときは、生まれる子は子として、あとはおまえを吉保にくれてやったつもりであった。こういうことは権現様以来例のないことではないし、むしろ常識上、おまえの美貌とまた吉保がなかなかの好き者であることと思い合わせ、吉保がその後まったくおまえに手をつけぬ、などいうことがあろうとは夢想もしておらなんだ！

吉保、ふしぎなやつだ。

天下一の利口者であることはとっくに承知しておるが、それだけではない。あれもまた自我を捨てておる。世上ではなんぴともおまえを吉保の妾と見ているのだから、自我を捨てねば出来ることではない。しかし、他のやつらの、歯をくいしばって自我を捨てるのとちがって、あいつはそれをどこやら愉しんでいる気配がある。

吉保は微笑していった。

「恐れながら上様、上様は権現様このかたの偉大な御君主であらせられまする。そのおかたに御子さまがなく、おん血がここで断絶するなど、天が許しませぬ。事実、ここに吉里君がおわしまする。そのお方とおん母君をお護りいたすことは、これ以外に吉保がこの世に生れて来た意味はないとさえ存じておりまする」

それはともかく、おまえとは——俗にいう焼けぼっくいに火がついた。

爾来十五年のあいだに、柳沢邸に通うことなんと五十数度。——もはや吉里を見るためではない。おまえを抱くためだ。その無双の味を味わうためだ。

この節度を越えた柳沢通いを、世がいかに見ておるか、もとより知らぬではない。何とでもいえ。余はおまえを数カ月おきに抱かずにはいられなかった。しかも、ただ無上の快楽にふけるためばかりではない。——

おまえは、民のあいだに持てはやされておる近松やら西鶴やら芭蕉やらのものを、寝物語に読んだりきかせたりしてくれた。心なごみ、魂うるおうて、将軍として城で四書五経を講義しておる余には、それは格別の愉楽であった。余がおまえのところに通って来るのは、海から舟が安らかな港へ帰ってくるような気持であった。

ああ、その港いまやなし。おまえは余をひとり、虚しい、荒々しい海に残したまま、天上からの霧に永遠に姿を消してしまった。——

南無、霊樹院本然自覚大姉。……

寵臣柳沢吉保

一

元禄山護持院に読経の声はつづいている。鉦、磬、銅拍子が交響する。その読経を圧し、また楽器の音よりひときわ朗々と美しいのは大僧正隆光の声であった。

——と、隆光をのぞいて、それら僧たちの声と楽器のひびきが、心なしか乱れた。柳沢吉保が立ちあがったときである。

大老格の側用人、将軍第一の寵臣柳沢出羽守吉保。——このとし四十九になるが、それでも彼の姿は美しかった。天性の貴族のごとく優雅であった。

ふだん、どんな慶事にも哄笑するということもない代り、どんな凶事でもさして悲嘆の表情も見せず——ただし、この人物に悲嘆の経験などあるとも思えないが——とにかくいつもゆったりと春風のように微笑している吉保が、この日ばかりは、持ち前の優雅さこそ失わないが、しかし動く歎きの像のように見えた。

もっとも彼はきょうの喪主ではある。

しかし、喪主であればこそ、彼ほどの人間がこれほど恭謙悲痛の相をあらわにするのは奇妙ではないか。まして、香煙けぶる中に彼を見下ろしている位牌の主と彼の関係を思うと、これはいよいよ異常である——と、思った者もあったであろう。

しかしまた、これはこの人物らしい演技ではないか、位牌の主と将軍家との関係を思うと、どうあってもこういう態度を見せなければならぬところだ、と考えた者もあったかも知れない。

衆人の心々は知らず、またそれを意に介する風もなく、柳沢吉保は香をつまんで、「霊樹院本然自覚大姉」の法名を見あげた。……

二

——私は海の果てに見ていた灯台の灯が、ふいにふっと消えてしまったような気がする。

あくまでも広い明るい波の上を、華麗な水泡をひいて、おのれの思うがままに自在に乗りこなしていたつもりの私なのに、いつ日は暮れたのか、海の明るかったのは、その灯のせいではなかったのか。いや、いまにしてそれにちがいなかったことを知る。

この世の海へ乗り出したときから、私は自分の意志と知力だけで航海しているつもりでいた。何ぴとの助けもかりる気はなく、またかりたはずはないと信じていた。

私が大いなる目標を立てたのは、殿が五代さまとおなりなされたときと同じ日だ。それまでは館林綱吉卿の百六十石の小臣として、ただ殿の御意にそむかぬ小姓として大過なく奉公すれ

ばそれでよしという心境で生きていた。

　しかるに延宝八年、殿が二十五万石の大名から一躍将軍におなり遊ばされると同時に、私の望みも飛躍した。野心といっていい。何しろ大老になってやろうと思い立ったのだから。――時に二十二才。

　とはいえ、百六十石の無名の一小姓が大老になる道は、ともかくも先代将軍家の弟君であらせられた殿が五代さまにおなりなされるよりも断絶した道であった。徳川家はじまって以来大老になった人間は、土井、酒井、堀田、いずれも赫々（かっかく）たる名門の人々であった。しかも、武勇の点にかけて必ずしも自信のない、たとえ自信があったとしても武勇のふるいどころのありそうにない時代に、どうすればその道が切りひらかれるか。

　私は、殿とともに江戸のお城に入り、小姓として侍りながら悩んでいた。そして、そのうち野望の悩みにもう一つの悩みが加わった。――はじめての、恋の悩みが。その対象が、そなただ。

　そのころ、そなたはしばしば大奥からお使い番として表へ出た。はじめて見たときから、薄暗い殿中でまるで光の精のように浮き出たそなたに私は眼を吸われた。こんなに清らかで美しい生物がこの世にあり得るか、と私は魂を奪われた。

　そのときそなたはまだ十七才であった。私は二十七。

　私はすでに妻帯していた。何の浮き浮きした心もなくもらった妻は、私の出身地たる甲州の

遠い縁辺から来た平凡な女であった。

　次第に私はその妻を離縁してそなたを妻には出来まいか？　と真剣に考え出した。

　そして運命のあの日が来たのだ。私はようやくそなたと口をきく機会をつかんだ。

「お染どの。……拙者、柳沢弥太郎と申す」

「……は？」

　そなたは、顔あからめて、にっこりした。

「いくつになられる」

「十七でございます」

「いつから大奥に奉公なされた」

「十三のときからです」

「どこのお生まれ」

「京」

　まるで銀の鈴をふるような声でそなたが答えたとき――すぐ近くで地震のごとき叫喚が巻き起った。それが、貞享元年、当時の大老堀田筑前守さまに、若年寄稲葉石見守どのが刃傷なされこれを刺殺された騒動のひびきであった。

　このとき私は、そなたへの恋にわれを忘れて、ついに思いを、打ち明けかけたところであった。たちまち背後から、側用人の牧野備後守どのがころがるように走って来られるのを見た。

私はその前に立ちふさがった。

「いずこへ」

「刃傷じゃ、刃傷じゃ！　上様お守りのために罷り通るに、弥太郎、何ゆえそこをふさぐか！」

私は黙って、備後守どのの腰を指さした。備後守どのははっとした。奥の御休息の間近く——従って当然身につけてはならぬ刀を、備後守どのは狼狽のあまりまだ腰に帯びておられたからだ。

それを運命の日という意味は三つある。第一は堀田筑前守さま御横死によって上様がそれ以来大老の職を廃し、側用人を使ってみずから御政務を司どられるようになったこと、第二はその側用人の牧野殿がいささか面目を失われ、「それにくらべて弥太郎、あの際に落着きたる仕方、神妙である」と上様のお眼が私にとまったこと——すなわち、私が立身のいとぐちをつかんだことで、第三は、それによって私がそなたを忘れる決心をしたことだ。

いかに美少女とはいえ、いま女人に心奪われるときならず——と、私は思い返したのだ。少くとも妻ある男が大奥に奉公する十七の娘に恋をして、人にとやかく噂されては身のためにならぬ、と私は判断した。

それよりも、出世だ。

出世の道はある。——側用人になることだ。牧野どののあとをつぎ——或いは、時至らば追い落してもその地位をつかむことだ。その可能性ならばないことはない。——

しかし、その法如何？

それはこの野心と一見背叛するようだが、おのれを捨てることであった。自我を捨てることであった。……いわんや、この際、女をや。

三

見本はある。牧野備後守どのだ。

館林時代の御家老であった牧野どのは、殿が上様におなりあそばされたとたん、もとより悦ばれたに相違ないが、それよりも仰天自失——文字通り、おのれを失っておしまいなされた。つまり、上様にすべてを捧げたてまつることをおのれの天命と信じこまれたようだ。

そこが上様のお気に召したようである。

恐れながら上様は、比肩するもののないほど我の強いお方であらせられる。従って、やはり我の強い御大老堀田筑前守さまとはそろそろ衝突をはじめなされておられた。筑前守さまの御横死をもっけの倖(さいわ)いとばかり、ただちに大老なる職をやめられ、我の弱い牧野どのをお使いなされて親しく天下の政治をお執り遊ばすようになったのは上様のお強い我のゆえだ。

私もまた牧野どのにならって我を捨てた。いや、我を捨てる修行をした。我を捨てたと人には見えぬほどに我を捨てる工夫に心を労した。

すると、忽然世界は変った。我を捨てると同時に世界はひらけ、私の思うがままになった。魔法のように私の出世がはじまった。

それからわずか二年、貞享三年には私はなんと二千三十石、柳沢出羽守といわれる身分になっていた。——

その年の暮に、突如私の心を乱すことが出来した。

そなただ。

そなたに上様のお手がつき、ついにおんたねを宿し参らせたということをきいたのだ。

次第に大奥から外へも聞えはじめていたそなたの美貌だ。いま突如といったが、しかし実はそうではない、そういうことは当然あり得るだろう、どのようなことになっても、もはや自分とは縁なき女人——と覚悟はしていた。にもかかわらずそれは、そんな覚悟もおし潰されるほどの衝撃であった。

私のそのころのおだやかな家庭、順風満帆の出世の上り道が、すべて木ッ葉微塵になれとさえ思った。失ったものの大きさを、失って見てはじめて思い知ったのだ。

失った？

永遠に私の知らぬところへ消えたわけではない。もしかするとそなたは、六代さまのおふくろさまとして、私の上り道のてっぺんに坐ることになるかも知れぬのだ。それは耐え切れない！　それでは出世がかえって苦痛となる！　私は輾転反側した。

そして、いまから考えると、よく思いついた、と自分の大それた強引な着想に身ぶるいをおぼえるのだが、一つの、途方もない、苦肉の奇策をしぼり出した。

そのころから、まだ御世子のおわさぬ上様をめぐって大奥には女人衆の暗闘があった。私は特にそういうことには興味のあるたちなのだが、それは実に陰湿な、いとわしいものであった。とくにあの場合、まだ或る程度の地位にもいない番外ともいうべきそなたが、懐妊中相当な嫉妬、呪詛、いやがらせの霧につつまれることは必至であった。

その憂いを、私は親しい知足院隆光に述べた。そして私の必死の思いを秘めていったのだ。

「お染どのを、ぶじ御出生まで私のところへおあずかりしたらどうでござろうか？」

「ふむ。……」

隆光も大奥の雰囲気は知っていた。私はなおいった。

「しかも、拙者つらつらと案じたのでござるが……上様が当代様とおなりあそばしたについても、恐れながら相当な御無理がおわした。そこへもしいま御中﨟にもあらざるお染どのに御世子でも御誕生あったとすれば、いよいよ以て内外とやかくいいたてるであろう。それらのようす、とくと見究めがつくまで、公然お名乗りあそばす日が到来するまで、おん母子ともに拙者がお守りした方が完全と存ずるが。……」

隆光は青い火のともっているような例の眼で、じっと私の顔を見ていたが、やがて重々しくうなずいた。

「たしかにあの女人は危い。——」

「やはり、御坊もそう見られるか」

「いや、それはおまえさまの申されるような意味からではない。あの女人は、みずからに危険を呼ぶのみならず、男をも危くする魔性がある。……よろしい、上様にそのむね申しあげておくでござろう」

隆光の言葉には不審な点もあったが、しかし彼は上様をどう説いたか——事実は私の望みの通りになった。

——

しかも、何たることだ、上様はそなたそのものを、まったく私に御下賜になったのだ！ おんたね御出生の上は、あとそなたを煮て食おうと焼いて食おうと望みのままにしてよいぞ、と。

そこまで私は期待していなかった。

あまりのことに私は夢かとばかり茫然とした。

やがて私のところへ送られて来たそなたを見て、自分が夢の中にいるという気持はいよいよ高まった。それほどそなたは妖しい美しさにけぶっていた。ときにそなたは廿才、将軍家のおんたねを身籠(みごも)り、なお処女のごとく匂わしかった。妖しい美しさとはそれをいうのだ。

——この女人が自分のものになるというのか？

いかになんでも、おんたねが御出生になるまではわがものとするわけには参らぬ、それまで

待つのが、私にとっては地獄のように思われた。

しかし、私は待った。翌年九月、吉里が生まれるまで。

そのあいだに私の心境はまた変化した。

四

私の心境を変えさせたのはそなただ。

そなたは柳沢家へ来てから憂わしげにもの想いにふけって、一時は食もとらなんだ。私は狼狽し、また当然だとも思った。上様に捨てられたそなたが歎いていると考えたからだ。

「上様……上様……」

放心状態でつぶやくそなたの眼はただごとではなかった。事実そなたは上様から捨てられたのだ。

捨てた上様を恋いしたって、病みかねまじきそなたを見て、私は今さらのように愕然となり、腹立たしくなり、ふびんになり——そして最後には怖ろしくなった。

怖ろしくなったというのは、これほど上様をひたむきに恋したう女は、おそらく上様にとってはじめてであろうし、また絶後であろう、と思いやったからだ。

ようやく私は、上様がそなたを御身辺から離すことを承知なされたのは、隆光の忠告もさることながら、数年前私がそなたをあきらめたのとやや似た心情、すなわちまだそなたの値打ち

がよくおわかりにならなかったせいだ、ということに気がついていた。しかし、やがて間もなく上様にはそのことがおわかりになって来る。——その日のことを想像して怖ろしくなったのだ。

隆光の謎のような言葉が耳によみがえった。

「あの女人はみずからに危険を呼ぶのみならず……男をも危くする魔性がある」

その意味はまだしかとは知らず、私は私なりに自分の未来に光をあてた。

——この女人をほんとうに側妾にしてしまったら、そのときは私の破滅だ！

私は戦慄した。そして変心したのだ。

その変心は恐怖のためであったか、例の「野望のために我を捨てる」という初心が骨の髄までくいこんでいたせいか、自分でもよくわからない。

つまり、ふたたびそなたを私とは無縁の女人とするということだが、その上にこの皮膚をはがすような苦痛の代償として、そなたを利用することを思い立ったのだ。

そなたと、そなたのやがて生むお子を人質として出世する——結果から見て、私のしたことをそのように評したやつらがあったことは、私も承知している。が、ばかなことを！　左様なことをする吉保と見えて、上様がその手にお乗りなされるか。そんなふやけた、甘い綱吉公ではない。たちまち私の首の飛ぶことは自明の理だ。

私は、私が上様に対しておのれを捨てている、とお信じいただける具体的な証拠としてそな

たを利用することを思いついたのだ。

いくどくり返してもいい足りないほどだが、上様は満身我に溢れたお方であった。世に大天狗と呼ぶ者があるそうだが、その通りだ。この上様のもとで出世する道はといえば、ただ我を殺して仕えるに限る。

いや、それならば家臣のだれもが我を殺して仕えておるというかも知れない。ところが、実際はそうではない。そうはゆかない。そこは人間だから、どうしても我が出るのだ。殺したつもりでも、それが内部から外へにじみ出すのだ。その例が牧野備後守どのだ。あれほどの人でさえ、妻を犯され娘を犯されたときは、名状すべからざるお恨みの心がにじみ出た。——とたんに牧野どのは失脚した。

私は徹底的におのれを殺した。愛するそなたに手をつけず、ふたたび上様に献じたのは上様に先手を打って、みずからその証明とするためであった。

果せるかな、上様の御満足はこの上もなかった。上様の御悦気ぶりを見て、曾ての自分の予想が的中したことを知り、あらためて私は戦慄をおぼえたほどだ。

しかし上様の御満足には、ふたたびお手に入ったそなたのこともさることながら、私の献身ぶりに対する御満足もあったことはたしかだ。

世評はいかにもあれ、私は上様の御満足を得るためには何でもした。生類憐れみの令などという暴政をも、側用人として断乎施行し、美少年を邸内に飼って、これを城へ通わせるなどと

いう傾城屋――いや、かげま茶屋にひとしいことも平然としてやった。

上様はすべて御存知だ。私がみるみる大禄(たいろく)を加えられ、大老格の地位についたのを、人は献妾のせい、また御落胤のおかげだと思ったろうが、上様は、恥をいとわぬ私の滅私ぶりに対して御褒美を下さらずにはいられなかったのだ。

人は何とでも言え。私は後世の批判など意には介さぬ。人はたったいちどこの地上に生まれ、それっきりで、永遠に消える。後世などいう自分には何の関係もないことにあれこれ気を使うのは愚かなる人間の錯覚だ。現世の悪評にしろ、その実、およそ何も出来ぬやつらの嫉妬に過ぎないことが多いが、何にしてもそれが自分に実害を及ぼさぬかぎり屁(へ)とも思わぬ。

おのれを滅するのは、ただ上様お一人に対してであった。それ以外には。――

私は飛ぶ鳥おとす一代の権臣として、やりたいこと、やり得ることは何でもした。財物、女色、権勢など――徳川はじまって以来、私ほどの軽輩から立身して、私のような栄華を極めた者がほかにあるか。

とはいえ――そなたのことばかりは、唯一の痛みであった。

思い出す。いつであったか、何のはずみであったか、そなたと語ったことを。――私は痛みをかくし、にこやかに、私がはじめてそなたを恋したときのことを口にした。

「わたしもあなたさまが好きでした」

と、そなたは私の顔を見つめていった。

私は心臓を鷲づかみにされたような思いになり、初恋を語る少年のごとく頬をあからめた。

「いまは?」

「いまも好きでございます。わたしはあなたに何をしてあげたらいちばん悦んでいただけるかと、いつもそればかり考えているのでございます。……」

何たる言葉を吐いたものだろう。……そしてそのときのそなたの表情の、何という真実味に溢れ、しかも何という妖艶さであったろう。

危く私は、何もかも忘れて、そなたを抱きしめるところであった。そのときそなたが吉里を抱いてさえいなかったならば!

――私はそなたを自分の「我」の象徴として、それを犠牲にしてそれ以外のことごとくを得た。野望はすべてとげられた。しかし、いまにして私の生涯はすべて無ではなかったかと思う。灯が消えて、うす暗い海原にひとり虚ろに漂っているような感じがする。

南無、霊樹院本然自覚大姉。……

怪僧護持院隆光(ごじいんりゅうこう)

一

元禄山護持院——神田橋五万坪の土地にそびえ立つ上野寛永寺以上と称される大伽藍だ。本堂、経堂、護摩堂、御成御殿、客殿、鐘楼、唐門と、まるで江戸中の初夏の日をここに集めたかのごとくひかりかがやいている。柳沢吉保が総奉行として建立したものである。

が、薄暗い宏壮な本堂に読経の声はみち、香煙けぶる中に、大僧正隆光は木魚を叩(たた)いていた。紫衣をまとった毛のない梟みたいな顔をしていた。後代に於て元禄のラスプーチンと評された通りの妖気がその姿にまつわりついている。しかし、ロマノフ王朝のラスプーチンがそうであったように、祈れば青天に雷雲を生み、不治の病者をも起たせるという怪力がたしかにそなわっていることを、いやでも知覚させるものが、その燐光を放っているような眼とあぶらを塗ったような顔の皮膚にあった。

大和(やまと)長谷寺から出て来て、いまや将軍よりも大奥に君臨しているといわれる護持院隆光である。

彼は厳(おごそ)かな顔で、焼香している柳沢出羽守吉保を眺めながら木魚を叩いていたが、やおらその眼が、香煙の中の「霊樹院本然自覚大姉」の位牌にそそがれているうち——その梟みたいな眼が、いつしか例の魔光を失って、ただ小さな洞穴のように見えるのに侍僧たちは気がついた。

二

——何やら上様も吉保もなかば死んだように見える。ひょっとしたら、政治的にはきょうが二人の死んだ日となるかも知れない。そんな予感がする。わしの予感はあたらぬということがないのだが。——

あの両人の魂がぬけてしまったら、わしもどこかへ消滅してしまうことになるわけだが、はてそんなことになったら一大事だぞ。そもそも二人の魂をつかんでいたのはわしのはずであったが、それが勝手にぬけてしまうとは、魂をつかんでいたのはわしではなかったのではないか？

しかし、ふしぎだ。そうと知ってもわしの心に動揺が起らぬとは。わしの心がこんな——生まれてはじめてといっていい感傷的な涙にぬれておるとは——妖僧隆光と呼ばれるわしにしてはわれながら奇怪千万だ。

とはいえ、わしもこのへんでそろそろこの俗世からおさらばして、もういちど大和の山奥へ逃げ帰るべきところかも知れない。わしもこの世に生まれて、やるべきことはやってしまった

ような気がする。

わしのやるべきこととは何であったか。

それは人間の自我というものの研究であった。

その素材は綱吉公と、綱吉公以外のすべての民衆であった。一方は人間というものがいかんなく自我を発揮するとどうなるかという研究で、一方は人間というものがどこまで自我を踏みにじられるのに耐えられるか、という研究だ。

実験はあの生類憐愍の令であった。

人よりも犬を高しとする――こんなむちゃくちゃな、ばかばかしい法令を出した者が古今東西にあろうか。

それをわしはやったのだ。

「御世子をお生みなされるために、その禁厭として」

と、わしは進言した。

むろん御世子誕生は何よりも上様の御熱願であったから、それを聴許なされたお心の半分は、たしかにそのためもあったであろう。しかしあと半分は――わしの見るところによると、半分以上は、民衆を蹂躙したい、おのれの力がどこまで偉大であるか、それを具体的に見たいという将軍の御欲望からであった。わしはその御欲望を読んで進言したのだ。

それにしても、生類憐れみの令は、いやもう徹底的に行われた。

武士町人を問わず、およそ犬を飼う者は、その頭数、種類、毛色までいちいち番所にとどけ出て、十日に一度は犬目付が見回って異常はないかを点検した。

ゆくえ不明になった犬があると、あくまでそれを探してつれ戻させた。武家屋敷の台所の井戸に犬が落ちて死んでいたのを知らなかったというので、遠島に処せられた侍がある。犬にかみつかれたので棒で叩いておるところを見つかって、訴えられて、縛り首になった町人がある。訴えた人間は、御褒美をもらった。往来の犬も、人がはばかって遠回りして歩くので、横着になって大八車が来ても寝そべったきりで、うっかり坂道でひき殺して斬首された職人がある。

犬が病気になると近所じゅう集まって相談し、犬医者に運ぶ。市井の犬医者は、六人肩の駕籠に乗り、若党、草履取、薬箱持ちまでつれて、まるで御典薬のようだという。死ねばその病状、死因をとどけ、検屍の役人がかけつけて来、近所の者すべてから口書をとり、葬式も人間並みにせねばならぬことになった。

中野に十六万坪にわたり、一頭ずつ節なし総檜の小屋を作って野犬を入れ、中には厚綿の蒲団を敷いてやる。食物は一日十頭あたり白米三升、味噌五百匁、干鰯一升として、その費用は武士は百石につき一石、町方では一町あたり米五斗六升を供出させる。犬の世話をする総奉行は六千石、その下に犬小屋奉行四人、六十人の犬同心がある。

日夜吠声数里に聞ゆ、とある。

犬ばかりではない、生類憐れみの御仁政は牛馬に及び、過重の荷を積ませておる者は鞭打ち

の刑を受け、鶏、うなぎ、どじょうを殺して食うことは禁ぜられた。夏に下水を道にまくことも御制禁になった。ぼうふらが死ぬからである。……

　これが嘘でも作り話でもないことは、みんな知っておる通りじゃ。

　わしはオランダ甲比丹について江戸へ来たケンプエルという異人から、イギリスのスウイフトという伴天連の書いた妙な書物についてきいたことがある。何でもガリヴァーという男が馬が人間を治めている国に漂いついたという話で、その風刺、骨を刺すばかりじゃというが、ガリヴァーは長崎の蘭館に来て日本を見たのではなかったか。とにかくそれは物語だが、わしは現実にそれをやったのだ。風刺どころではない。

　さて、これで日本の下民どもは激発したか。怒って一揆でも起したか。お勇ましい将軍家はむしろそれを期待されたふしもあった。

　ところが何も起らなかった。ただ、かげでぶつぶつ蟹の泡のごとき声をもらしているだけであった。

　野良犬が床下で子を生んだ届け書をわしも見たことがある。

「……早速五人組名主立ち合い、医者へも申しやり、大切に養育つかまつり置き、母子ともに達者に相見え候。御番所へ申しあげ候えば何とぞ御検視下されたく候」

　或る学者の話をきいたこともある。

　二匹の犬が春秋四匹ずつの子を生んでゆけば、今春の二匹は来秋百五十二匹となる。あげく

のはてはどうなるか、と案じて気鬱症にかかった男にその学者はしずかにさとしたという。

「そのときは人、立つ鳥跡をにごさず犬に家を明け渡し、野山に住居いたして御仁慈に添い申すべし。……」

　これらの話を見聞して、わしは抱腹絶倒した。これらの届け書や学者の訓戒に毒があるので、いっそうげらげらと哄笑せずにはおれなかったのじゃ。もっとも、毒を感じたのはわしばかりで、当人たちは存外死物狂いであったかも知れない。いや大きにそうであろう。
人間というやつは、腹鼓さえ打たせておけば、どこまでも自我を殺して平気なものじゃ。……

三

「その通りでござる」

と、吉保がいった。——右の意味の感慨を、別の言葉でわしがふともらしたときだ。

「このことによって、民は鼓腹撃壌の生活を愉しむことが出来るのでござる」

　吉保、ふしぎなやつだ。

　愚民は知らず、頭のよいことでは当代一の吉保が——しかも、かかるたぐいの法令をだれよりも馬鹿馬鹿しがりそうなたちの吉保が、決していやいやながらではなく、みずから進んで、勇壮活発に施行するとは。

「とは？」

「泰平には秩序の骨が通っておらねばならぬ。人間が秩序を守るには、どこか恐怖を持っていなければならぬ。それがこの法令でござる。お上というものに、この一点だけ怖れを持ち、あとは野ばなし。上様の御大度によって御覧のごとく、民は色欲、享楽欲、経済欲をほしいままにし、まず史上空前といってよい安楽を愉しんでおる。ただ一つの手綱は何と申してもたかが犬のこと、それさえ気をつければべつにいのちにも暮しにも愉しみにもかかわることではござらぬから、一揆が起こるどころか、これがむしろ一揆の歯どめになっておると私は考える」

わしの感慨とは方向がちがうが、利口な吉保だ、それは承知で、しかしあれも思わず平生の所懐をもらしたのであろう。

「また上様は、怖れながら御素質としては乱世の雄でおわす」

「なるほど」

「その御気性がかようなことだけに現われておるとするならば、その意味でもこれはやはり歯どめでござる」

ここまではよかったが、彼の所懐は飛躍した。

「それに、人よりも犬を高しとする。このことに民が不平を鳴らすことはない、という理由はもう一つある。皮肉ではなく、素直に人はもう少し犬を学ぶがよい。――」

「とは？」

「本来なら、犬を愛せぬ人間がござろうか。あのどこまでも主人に従い、尾を振り、機嫌をうかがい、金輪際裏切らぬ犬を」

「ふむ」

「人間、完全に犬になったら、どれほどひとに愛されるでござろう」

皮肉ではなく、といったが、まったく吉保はまじめな顔であった。もっとも心中何を考えておるか、このわしにさえわからぬところのある吉保だが。

「虚勢、見栄、自尊心、恨み、悪意――などを寸毫たりとも放下して、完全に犬になり了わせたら、その瞬間に世界は変る。四周は和楽に満ち、前途は洋々。――」

はからずもわしは、柳沢吉保出世の秘訣をきくことが出来たのだ。簡単にいえば阿諛（あゆ）ごますりということになるだろうが、吉保の意味するのはもっと徹底した、その処世の極北をつきぬけたところにあることはいうまでもない。前々からうすうすと感じてはおったが、彼がそこまで明確に意識してそれをやっているということははじめて知ったのじゃ。

つまり、将軍はいかんなく自我をふるい、民は気息奄々（えんえん）として自我を殺し、吉保は自在に自我を調教しておる。将軍はああ見えてどこか甘いところがあり、民はああ見えてぶつぶつ愚痴をこぼしたり皮肉をいったりしているが、吉保は完全に自我の抑制を利用しておる。

そうであったのか、と思いあたる。

吉保が染子の一件について、みごとな、というより驚くべき対策を講じたことを。

染子が上様のおんたねを身籠ったとき、それについて吉保はわしに相談した。「お染どのを

このまま大奥に置いておくことは危険である。私にあずからせてはくれまいか」と。

わしは吉保の顔を眺めた。そして彼が珍しく動揺しているのに気がついた。もっとも、そもそもそんなことをわしに相談するのが動揺していた証拠だが。

こやつ、染子に惚れておるな、とわしは看破した。

もっとも染子に惚れない男はあるまいが、ただ、あの吉保が――すでに妻もある吉保が――年に似合わずもうそのころから分別だけは百才の老人みたいであった吉保が――そんな途方もない願いを持ち出したのでちょっと胆を抜かれたのだ。

吉保がわしに相談したのは、わしが染子を京からつれて来たゆえと、わしが大奥に対して強い影響力を持っていたせいであろう。考えた末、わしは承知した。

理由は三つ四つある。

第一は、そもそも染子を京で見つけ出して江戸へつれて来て大奥に入れたのが、わしの遠大なる望みによるものであった。十三才にして染子の古今にまれなる抜群の美貌は、将来必ずそのためのわしの道具になるであろうことを充分に予想させた。その後の成長を見るに、美貌はますます臈たけて来た上に、彼女の女体そのものが世にも例のないものであることを、観相術によってわしは確認した。その染子に上様のお手がつき、懐胎したという。わが望みいよいよ叶う時や来れりというべきである。しかるに、そのときはわしの方針は変っていた。お染の力をかりることなくすでにわしは大奥にくいこんでいた上に、上様にお子さまがない、という事

実の方が、もっとわしの影響力をふるうに好都合であることを知ったのだ。

第二は、吉保の動揺を見て――一つ彼をからかってやろうと思い立ったことだ。自我の抑制を出世の手段として明確に意識している、とまでは知らなかったが、そのころから漠然とわしはその匂いをこの若き才人お側衆に嗅ぎとっていた。その男がいまや心みだして、将来九分九厘破滅を呼ぶであろう禍いのもとを、みずから抱え込もうとしている。――それにこちらから手をかしてやろう、という少々意地の悪い愉しみにわしはとり憑かれたのだ。これはわしの自我の研究の一題目ともなる。

第三は、吉保がいったように、たしかに捨てておけば染子は必ず大奥で難に逢うであろうことをわしも予測したからだ。懐胎のことがなくても、あの女人国では染子はまちがいなく禍いを呼ぶ妖美の光を放ちはじめていた。それはあまりにむごいことに感じられた。

それから第四として、これはなぜかわしにもよくわからぬが、上様の御身辺に染子を置くことによって、上様の人間が変質する――わしの自我研究の対象から逸脱したお方になってしまわれるような予感をおぼえたということがある。

あのとき、吉保に、

「あの女人は、みずからに危険を呼ぶのみならず、男をも危くする魔性がある」

とわしがいったのは、実はその第二と第三の理由をふくんでの言葉であり、また染子を吉保にあずけるのではなく、そのまま与えさせたまうように巧みに進言したのは、第一と第四の理

由によるものであった。
わしは吉保が染子をひっかかえて、ぶざまにひっくり返るのを見たかった。
しかるに、何たること――あやつ、ふたたび本性をとり戻そうとは！　いや、本性というべきか、本性を殺す術というべきか。ともかくもまたも、ああまで自我を抑制し、それを道具にしようとは！
吉保は染子をあずかった。文字通りあずかって、上様をお待ちした。のみならず、染子の生んだ吉里君まで、出世のための二つとない人質にしてしまった。
あの染子の魅力を思えば、実に驚くべく意志力だ。わしは吉保、あやつだけには歯がたたなんだ！
あやつは犬を志す、といった。しかしあんなに意志力の強い犬があり得るか。
それにしても柳沢吉保、いかに大才物とはいえ、もし染子の方と吉里を抱え込んでいなければ、決していまのごとき老中格の大名にまでは、成り上れなかったであろう。二十三万石、それは綱吉公が将軍家におなりなされる前の館林二十五万石にほぼ匹敵する大禄ではないか。
そのもとを作ってやったのは、このわしじゃ。しかるに、あやつは――長らく幕府内部の権力闘争にわしと共謀しながら、このごろになってわしが護持院への御加増、御寄進をいかに幕閣に請うても、そのままには通さず、いちいち自分の手でとり調べ、必ず修正を加えおる。あやつ我を抑える対象は上様お一人にかぎり、わしさえもはねのけようとする。実にけしからぬ

やつだ。
しかも、一方では。
その吉里君を六代さまにするというような愚かな陰謀をあやつは企てぬ。次代は将軍家のおん甥甲府宰相綱豊卿ときめて、ぬけめなくこれに秋波を送っておる。たんに莫大な進物を贈るのみならず、例によって女を道具に使いおる。なんと綱豊卿の御側妾お寿免(すめ)の方は、あやつの妾町子の従妹というではないか。……実に煮ても焼いても食えぬやつだ。
――あやつに何とかしっぺ返しをしてやりたいが、しかしもはやわしの力では手がつけられぬ。それどころか、このごろ何となくわしによそよそしいのは、わしと結んでおるのがのちのちの災いとなると見込んだからではないか？
ともあれ、将軍家に名目上とはいえおのれの妾を献じ、寵童を養成してはお城に送り込み、一代の権勢をほしいままにしたあやつは、必ず豪奢なたたみの上で、極楽往生をとげるであろう。それにくらべてこのわしは、万一、お代変りにでもなればどうなるか。
しかしまた――待てよ。
ひょっとすると、あやつを呪うにはあたらぬかも知れぬ。
吉保はお染の方を道具にした。あくまで道具として使ったのであって、ついに女として一生抱かなかったではないか。あれほどの女人をいちども抱かずして、何の愉楽ぞや。何の男としての生涯ぞや。それどころか、傍に置いておるだけに、その抑制は地獄ではなかったか。そし

てまた、染子の方はついにこの世から消え失せた。あやつの心に痛恨はないか。

見よ、あのすでになかば、みずから亡霊と化したような姿、あれこそは吉保が充分その罰を受けたことを自覚している姿でのうて何であろう？

じゃが。

わしの心に愉悦は湧かぬ。また、近い将来、護持院を追われて落魄(らくはく)する自分の姿を想像しても、べつに悲哀の感もない。——わしもまたすべてを失ったような気がする。やるべきことはすべてやったと思っていたが、わしもまた何もやらなかったのではないか？

何たることか、われながら驚くべきことだが、人間軽蔑論者のこのわしもまた、あの女人を愛しておったのじゃ！

南無、霊樹院本然自覚大姉。……

霊樹院染子(れいじゅいんそめこ)

一

香煙の中にけぶる「霊樹院本然自覚大姉」の位牌をちょっと見あげ、正親町(おおぎまち)町子は経机に向って筆を走らせつづけていた。

「……弥生ばかり、うららかに照らす春の日に、ところどころの花とりどりにあらそい咲きたるに、かようの折につけてもおん前に霊樹院のおわせぬことを、いま甲斐なきにてもおぼし忘れず、もと住みたまえるところをかき払いて、持仏堂たてさせたまえり。……」

すなわち、柳沢邸内、もと染子の方の住んでいた場所に建てられた持仏堂がここであった。

町子はそこで彼女の「松蔭(まつかげ)日記」を書いているのだ。いまは亡きひとを偲んで。

「今年は三年(みとせ)にぞあたりたまえる。さみだれのころは、ましてまぎるるとしもなきおん徒然(つれづれ)のほど、昼夜無うぞ思いいづらんかし。……」

さみだれのふる日、お染の方死して三年——なお消えぬ吉保の悲しみをしるしつつ、同時に彼女は彼女自身の悲しみをも縷々として書きつらねているのであった。

元禄の清少納言と呼ばれ、柳沢吉保第二の愛妾と目されている正親町町子が、いまは亡き第一の寵妾、同時に世には、奸臣（かんしん）吉保が破廉恥将軍にかけた「肉の罠」そのものと信じられている女人に対して、滴々と涙をそそぎつつ。——

二

そんなことがあり得ようか、とだれだって思うだろう。わたしがあのひとにこんな感情を抱いていたことを口にしても、態度に見せても、人はわたしのお芝居だというだろう。ただ、他人を疑うということを知らないあのひとだけはわたしの心を知っていたろう。わたしはそれでよい。

わたしにしても、もしあのひとがほんとうに殿の第一の御側妾であったら、こんな感情を持てるかどうかわからないけれど……いや、たとえそうだとしても、わたしはやっぱりあのひとにはかなわないと頭を下げたろう。もっともこういうと、あのひとはびっくりして眼（め）を大きく見ひらいたかも知れない。

何がかなわない？

——あの方といっしょに暮していたはじめのころの自分の心を思い出す。

美貌？　あの臈たけた妖艶さと、いくつになってもふしぎに変らなかった新鮮な可憐さの絶妙な混合、あれにはたしかに及ばないけれど、わたしだって、柳沢の第二の側妾だ。それどころか、ほんとうは第一の側妾なのだ。それにたしかにお世辞ではなく、二人ならんでいるときに、どちらが美しいか迷うといった人もある。女の顔に対する好みは人それぞれだからだ——と、実はあのひとに対して張り合う気はまったくない。あのひと以外の、わたしよりも美しいと思う女に対して起きた敵愾心（てきがいしん）が、あのひとだけには露ほども起らなかったことが、そもそもふしぎなのだ。そしてそれこそわたしがかなわないところなのだ。

才智？　才智にかけては、ゆめ口に出してはいけないことだけれど、これはわたしの方が上だ。しかも、長い眼で見て、男に対する女の美しさなどは知れたもの、ほんとうの魅力はやっぱり才智にあるとわたしは信じている。——にもかかわらず、その才智が、あのひとに対して武器にはならない。また武器にしようという気にもならなかった。

つくづくとふしぎなひとであった。あのひとは。

常識からいうと、尊敬は出来ない。尊敬しようにも出来かねる人生であった。何しろ名目的には柳沢の側妾でありながら将軍家のお子を生み、しかも一生将軍家と「密通」していたひとなのだから。

もっとも、密通といってもむろん殿の御方寸にあることだ。この点、殿もふしぎな——というより、恐ろしいお方だ。

そもそもこのことについて、最初に殿にきいたときのことを思い出す。

「お染のお方さまは、殿が上様から拝領なされたものでございましょう？」

「そうだ。お子をもふくめての」
それはわたしも承知している。べつに皮肉でもなく、おちつきはらった殿の御顔色に、この方は何を考えておいでなのか、怪しみつつもわたしはなおたずねた。
「けれど、お子さまはお子さまとして、お染さまはお染さまとして頂戴なされたものでございましょう？」
「そうであった方が、そなたにはよかったか」
「いえ、わたしのよい、わるいではございません。お子だけの里親なら知らず、お母（はは）さまごとの里親など、わたしはきいたことがありません。——里親だけならまだしも、世間では」
そのころはまだ殿のお心を知らず、わたしの気性として耐えられなかったからきいたのだ。わたしはそれだけいって黙った。あとはいうに忍びなかったからだ。
「世間では、柳沢は将軍家の傾城屋をひらいておる、といっておるのだろう」
殿は平然とお笑いになった。
「わしはそれを望んでおる」
「殿のお名にかかわります」
「わしの名にかかわることを望んでおる」
「上様のお耳に入りましたら」
「わしは上様のお耳に入ることを望んでおる。——吉保は、わしのために名も捨てておる、と

御覧なさるであろうから」
手がつけられない、といった気持でわたしはまた黙りこんだ。そのわたしを面白げに眺められながら、殿はまた仰せられた。
「だいいち、お染は上様をおしたい申しあげておる」
「それは、そうでありましょうが」
「お染という女を、そなたどれほど知っておるか知らぬが、あれは自分がどうすれば愛する男がよろこぶか、それだけしか考えていない女じゃ」
「女はだれしもそうです」
「それが、似ているがちがう。いまわしのいった言葉を、お染の場合は、そのまま、まったく余念なく雑念なく、文字通りに解釈してくれてよい。という意味は、そなたはいま、女はだれでもどうすれば愛する男がよろこぶか考えておるといったが、しかしその男がほかの女を愛すればやきもちをやくではないか。側妾を何人か持つことが当然のことと慣習づけられておる将軍大名の家にしても、側妾同士のやきもちは防げぬ。……」
「それはあたりまえでございます。男を愛しておればこそやきもちをやくのではございませんか」
「愛する男が、ほかの女を愛することによろこびをおぼえるのに？　いまの言葉がいつわりでないなら、なぜいっしょによろこんでやらないか。それでは理窟が通らぬではないか」

「殿のお理窟は、机の上のお理窟です。女も、人間ですもの。……」

「それそれ、そこじゃ。女も人間の我にとらえられておる。やきもちとはおのれの自我が侵害された怒りの一種にほかならんのじゃ。……ところが、お染にはそれがない。文字通り、愛する男がよろこぶことしか念頭にない。情念にない。……」

「……」

「どうしてあんな女が出来上ったか喃。わしから見てもふしぎな女じゃ」

「……」

「しかし、こういう女はこわいぞ。そんな女だから、裏切るとこわい、という意味でこわいのではない。そもそもおのれがないのだから、相手が裏切るもへちまもない。にもかかわらずこういう女は、男にとっていちばんこわいのじゃ。弱いといえば、これほど弱い女はない。哀れといえば、これほど哀れな女はない。世には強い男ほど弱い女を愛するということがある。保護欲をそそるのであろうが、その極限までいったかたちがあの女じゃな」

そのときわたしの考えていたことは、では殿はこのわたしをどう考えておいでなさるのだろうか、ということであった。――こういうところが、殿のお言葉にすれば自我を捨て切れない女ということになるのだろうが、わたしにはどうしようもない。どんな女だってそうだろう。

「上様にも、やがてそのことがおわかりになるだろう。いや、もうすでにおわかりかも知れぬ。わしがお染に手をつけなんだことを、さすがは吉保、と必ず心中に御嘉賞に相成っておるであろう。……さればによって、いまわしがお染に手をつけて見よ。わしの首が飛ぶ」

それから笑顔がいたずらッ子みたいな表情に変って、

「論より証拠、そのうちそなたに見せてやろう」

と、仰せられた。

何をお見せ下さるのか、わたしにはわからなかった。しかし、ほど経て、わたしはそれを見ることが出来た。

三

それは上様が、十何度目かのお成りの日であった。

例によって御宴楽ののち、上様はお染のお方さまとお褥をともに遊ばされた。そのとき殿はひそかにわたしを呼んで、暗い一室に導かれたのだ。

その座敷の探幽の掛軸を外されると、壁に小さなひかるものが嵌まっているのが見えた。すぐにわたしはそれがギヤマンの玉であることを知った。殿はいつこのようなものをこんなところに取り付けなされたのであろう？　またこれは何のためであろう？

「のぞいて見よ、声をたててはならぬぞ」

殿にささやかれ、そのギヤマンの玉に眼をあてて、わたしは息をのんでいた。そこは上様とお染のお方さまがいっしょに御寝なされているお部屋であったのだ。夜ではなかったから、そ

のお部屋の屏風、諸道具、褥まであざやかに極彩色に見えた。その中にお動きなされている上様とお染のお方さまは、いずれも一糸まとわぬ御裸身であった。

……見ているうちにわたしはふるえ出し、血が頭に上りつめ、汗さえにじみ出した。

「そなたなどよく見ておくがよい」

殿はわたしの手をとり、小さく笑われた。

「あれがほんとうに男を熱愛する女の姿じゃ」

わたしは首をふっていた。否定とか嫌悪とかいう感情からではない。それは痙攣の一種であったかも知れない。見えた光景は、実の眼で見る倍も大きく、倍も鮮やかなものであった。

「わしはせめて、あれを見てがまんをしておる」

この場合にも、痛苦にみちたひびきを、それでもわたしは感じとった。わたしはギヤマンから眼を離した。

「殿は……殿は……」

「いや、そうではない」

殿はもとの通り平静な表情に戻られた。

「わしがかかるからくりをしたのは、お染が手落ちのう上様をお慰めいたしておるか、それを見とどけるためであった。しかし、見て、わしも参考になった」

わたしは、殿がわたしに強いられて、わたしが拒否した行為をお染のお方さまが上様にむかってなされているのを見た。わたしは頭が混乱して、殿の顔をにらみつけていた。

「ほんとうだ。わしがお染に教えたのではない。お染がわしに教えてくれたのじゃ。このギヤマンの眼鏡を通して」

「……」

「わしが教えたものでない以上、だれがあのようなことをお染に教えたか。上様であろうはずがない。十三のときから大奥にあり、廿才にしてわしのところへ来たお染に教えたものはだれもない。あれは——いかにすれば男をよろこばせることが出来るか、その一念のみの女がみずから本能的に見つけ出した行為じゃ」

「犬です」

と、わたしはさけんだ。

その口をあわてて抑え、殿はわたしを抱きあげて、別の座敷へおつれなされた。わたしはからだじゅうしびれ果て、殿の背中に立てた指も離れなかった。

「その通り、あの女は犬じゃ」

その座敷に坐らせられてから、殿は仰せられた。

「人間、犬になり了わせることが出来たら、これほど強いものはない、というのがわしの哲学であり、処世の法であった。しかし、わしなどはまだまだ学と心得、法と心得ておるだけに遠く至らぬ、天然自然のあの女には。——」

殿は首をかしげ、もういちどふしぎそうに仰せられた。

「どうしてあのような女がいまの世に現われたものか喃。……思うに、あの女は稀有の美女である。美女というものは当然その美を鼻の先にぶら下げておる。いや、美女でないほとんどの女までが、何やらその錯覚をぶら下げておる。しかるにここに、その美を、誇りよりも怖れの根源と考えておる女があったとしたらどうなるか。あれは十三のときに大奥に入り、女ばかりの世界で、その美しさはむしろ憎しみのまとになった。廿才になって、いっとき将軍家の御寵愛を受けたかと思うと、追われるようにわしに下賜された。そのあいだほかの男には、完全に隔離されておるのだ。そんな場合に、美しい少女はあんな風になるのではないか。……それとも、だいたい女というものが男の愛玩物になった元禄という時代の象徴か喃。……」

けれど、そのあとで殿は身ぶるいなされた。

「ともあれ、もしわしがお染に手をつければ、わしの首が飛ぶと申したこと、あれでよくわかったろうが」

「殿さま」

と、わたしは嗄れた声できいた。

「けれど、あなたさまは、それで御満足なのでございますか？」

すると、殿はしずかに首をふられ、沈痛な声で、それまできいたよりももっと思いがけないことを仰せられた。

「わしは、お染が大奥におるころから好きであった。そしてお染もわしに対して好意を持っておったという。――」

「え？」

「いや、いまもお染は――いかにすればわしがいちばんよろこぶか、そればかり考えておるという」

「では、なぜ？……」

「わしが止めたのじゃ」

殿のお顔はむしろ凄惨なものに感じられた。

「まず、犬におあずけを命じたようなものだといおうか。お染はそれを守っておる」

「あのお方は」

「犬だと申したではないか？」

「……」

「あの女は、将軍家をお迎えすれば全力をあげて将軍家を愛し、わしを見るときはひたすらにわしを愛する眼で見、またもとより一心不乱に吉里君を愛しておる、そのあいだに何らの矛盾もなく、苦しみもない。犬とは、そういうものじゃ」

このとき殿は厳然とした御顔色に戻られた。

「お町、犬というのはな、わしは蔑んでいっているのではないぞ。先刻から申しておるように、

わしが犬を志しておるのじゃ。人間、犬となり了わせたら、世に成らぬことはひとつもない。いわんや、それが美女である場合に於てをやだ。蔑むどころではない。それは天下をも動かす。――きくがよい、いまの元禄の泰平は、実にあのお染の存在が根源であるぞ」

「ま！」

「冗談をいっておるのではない。恐れながら当上様は乱世の雄でおわす。民を蹂躙することを生まれ甲斐となさる性のお方じゃ。それがいまのごとく、ただ生類憐れみの令のごとき非常識なる悪法一つで過しておらるるは――ひとえにあのお染あるがためだ、あの柔らかな女体が御雄心をなだめ、乱世の雄を泰平の英主と変形させておるのだ」

はじめてわたしも、それはそうかも知れない、と思った。いまの、お染の方とおたわむれに余念もない上様のお姿を瞼にえがけば。

「わしはそのためにも、あの女人にその役割をつとめさせておる。それどころか、わしはあれに対して罪の意識にさいなまれておる。それゆえ、あの哀れむべき女人に一生不幸を味わわせたくないために、逆に渾身の知力をふりしぼってこの泰平を維持してゆこうと努めておるのだ」

殿は眼を宙にあげてつぶやかれた。

「見よ、わが時代は芭蕉を生んだ。西鶴を生んだ。近松を生んだ。光琳を生み、師宣を生んだ。西には坂田藤十郎あり、東に初代団十郎あり。……これはただ、いま元禄という一時代に咲いたあだ花ではない。後世千年に聳える巨木の林立ではないか？」

「……」

「しかもただ芸術ばかりではない。見よ、先年の赤穂浪士どもの事件を。――勅使御参向の殿中に於て刃傷したる乱心者浅野内匠を即日断罪したる果断、またその相手たる吉良をその後ことさら辺鄙なる本所に移し、江戸市中に入り込みたる四十七人の浪士を見て見ぬふりをしてわざと討たせた御慈悲、さらにその後徒党狼藉の罪を以てことごとく切腹せしめたる処置。――寛厳水ももらさぬ筋の通しようは、彼ら義士にも劣らぬ武士道の花じゃと、わしはひそかに自負しておる」

「……」

「後代、うわっつらはこの元禄に似たる世はまた来るであろう。が、かくのごとき根のすわった芸術と政治に彩られた盛代はそうざらに来ようとは、わしは思わぬ。もし左様な時代が来たとしても、片腹痛くも元禄の再来など称してもらいたくない」

「……」

「それを、われらが作りあげたのじゃ。犬公方の名ある綱吉公と、奸臣の誹りあるこの柳沢吉保が」

そして殿はからからと御一笑なされた。

「そしてその両人の根源の力は、あの我のない女染子であると思え」

四

──いまにして思う。世にとかくの批判のあった吉里君への二十三万石も、あれは将軍家と殿の、お染のお方への精一杯の謝意と心からなる哀れみのあらわれであったのだ。無我無欲の一人の女性に対して、あの二人の御男性のお出来になることは、それしかなかったのだ。……

正親町町子は、もういちど香煙の中の位牌をふり仰いだ。位牌にからみつく香煙が、ふと妖しき女体の幻想をえがき、しかも女の町子にも、世にあれほど美しいものを見たことはなかったと、消え失せた天女のごとく思い出された。

ふと、庭に跫音（あしおと）が聞え、ふりかえると、桜の一枝を抱いて柳沢吉保が歩いて来るのが見えた。霊樹院染子死して三年、なお花紅葉ことあるごとに仏に奉りに持仏堂に訪れて来る吉保であった。

宝永四年、哀愁ただようしずかな春の夕暮である。年以上に急に老いた吉保に、町子は目礼して、その枝もたわわな花を受けとった。枝には短冊（たんざく）がつけられ、それにはこうあった。

「ものいわぬならいながらも慰めよ昔に似たる花の木の本（もと）」

姦臣今川状

一

善大将。

と、三浦右衛門は主人の今川刑部大輔氏真のことをそう呼んだ。

「善大将――とは？」

前に詰めかけていた三人の若侍は、ちらっとお互いに顔を見合わせた。褒めた言葉のようだが、同時に馬鹿にしたような言葉でもある。いずれにせよ、あまり聞いたことのない用語である。

「左様、わが君はまったくの善大将であらせられる。……それに比して、今川家を挟む甲斐の信玄、三河の家康、これこそ悪大将の代表であろうな」

べつに憂えている様子はない。三浦右衛門はいま突然自分の発見した用語に自分で感心して面白がっている顔つきであった。詰めかけた三人よりもまだ若い。右衛門は二十三歳だ。事と次第では斬る、という覚悟で来た三人が、問答とは別に感覚的にふと見とれずにはいられない

美貌、女にも珍しいほどの妖艶さであった。

「さ、さればこそ、われらが殿をお案じ申しあげておるのではござらぬか……」

と、侍の一人、手綱鷲丸がいった。

「仰せのような二人の悪大将に挟まれて、のほほんと善大将顔しておわすことは……いまのような戦国の世にあっては、一種の悪とさえいえる。このまま捨ておかば今川家の滅亡は火を見るよりも明らかでござりまするぞ」

「殿の御善人でおわすことは金輪際なおらぬ」

三浦右衛門はふさと眼をとじた。

「な、なに？」

と、侍の一人、関ノ戸乗康がさけんだ。

「お手前は、そうと承知なされておって……」

「御善人でおわすのは一応まだ御美徳と申してよい。しかし、殿の御日常は恐れながら無為安逸、いやそれどころか、ひたすら淫楽に日も夜もこれ足らずと申しあげてようござる」

と、もう一人の大塔掃部がいった。

「それをお勧めなされておるのは、三浦右衛門どの、お手前ではござらぬか！」

三人は傍の刀をひっつかんだ。

「わしを斬りに来たのか」

三浦右衛門は美しい眼をあげて、微笑の顔をしずかに回した。
「斬れば、今川家の滅亡はそれだけ早まるだろう」
「いや、お手前こそ、まさに獅子身中の虫――」
「今川家はすでに獅子ではないと申しておるのがわからぬか」
右衛門は自若していった。
「よし。おぬしら三人、今川家に奉公する若手のうち、その忠節、その武勇、最も信頼すべきめんめんと認めるから、おぬしらを買い、おぬしらを信じ――せっかくわしを国を誤る奸臣として難詰に来たきょうを機会に、右衛門の存念をとっくり聞かせよう」
駿府城の奥深く――青葉若葉の翳(かげ)が座敷までさして、今川家第一の寵臣、二十歳を越えてもなお美童といっていい三浦右衛門の姿を絵のように浮び上らせている。
しかしこの美しき寵童の語り出したことは、斬奸決死の覚悟をすえて乗り込んで来た三人の若侍をううむとうならせるものであった。
「いま申したように今川家は、八年前先君義元公が御上洛途上に討たれ給いてより、もはや東海の獅子ではなくなった。今川家の危機は、あの桶狭間のあった永禄三年にあったろう。しかるに、主を失った駿河は不思議に安泰であった」
「……」
「それにはいろいろ理由がある。徳川どのはまだ今川の一将でおわしたゆえ論外におくとして、

東の北条氏康どのの御台は義元公のおん妹君、またいまの今川家の御台さまは氏康どののおん姉君。それから北の武田信玄どののおん姉君が義元公の御台さま、また信玄どのの嫡男義信どのの御台は今川家のおん姫君――といった風に、御閨閥の網でがんじがらめとなされた先君の御政略のゆえもあるが、何よりも桶狭間の破れは北条、武田にとっても青天の霹靂で、とっさに手も足も出なかったというところがほんとうのところであろう。しかし、それから八年――」
「……」
「それから八年、煮ても焼いても食えぬ武田、北条がいつまでも閨閥に縛られておるはずもなく、また今や西に独立して恐るべき一国を作りつつある徳川が、指をくわえておるはずもない――と思われるのに、現実はわが今川家はなお安泰である。これは何にもとづくか」
「……」
「それはわが今川家が平和に徹しておるからじゃ。今川家は西上の挫折で懲りた。これよりもはや天下制覇や他国侵攻の夢は持たぬ。ただ一国の和楽をこそ念願とする意志を、武田、北条、徳川などに明らかにしておるからじゃ」
「ばかな!」
たまりかねたように関ノ戸乗康がさけんだ。
「それが危いと申しておるのでござる。いかにも、今までは不思議に無事であった。が、これ

はまったくの僥倖（ぎょうこう）で、隣国が当方の意志などを尊重しておるわけでは断じてない！」

「いや、駿河が安泰であったのはそれ以外にない。――悪大将どもが今川を尊重しておるかどうかは知らぬが」

右衛門は、にやっと笑って、

「ま、舌なめずりする凶漢どものあいだに、ごろんとまる裸でころがった豊満の美女のようなものだな」

と、甚だ不謹慎な例えを持ち出した。

「だれかが飛びつけば、ほかの二人がそやつに飛びつく。さはさせじと、お互いに睨みっこをして相牽制しておるという図じゃ」

こういうところが、この寵臣にとかくの批判のあるゆえんである。同時に、その不敵さに人々の口をつぐませてしまうゆえんでもある。

しかし、このような今川家のありかたに焦燥を禁じ得ないからこそ詰問にやって来た三人はむろんこれで納得して口をつぐむというわけにはゆかなかった。手綱鷺丸がいった。

「右衛門どの、そんなことがいつまで続くとお思いか」

「では、どのようにしたらよいと申すのか」

「殿を……いかなる敵をも怖れるにあたらぬ戦国の大武将に……」

「ふふっ」

右衛門は笑った。

「無益だな」

怒ってしかるべきであった。それを怒りに三人の侍はここへ推参したはずであった。にもかかわらず、とっさに三人が、こんどは口をぱくぱくさせるだけであったのは、右衛門の口吻があまりにも――妙な形容だが、行雲流水のひびきをおびていたからだ。

「相手が悪い。甲斐の信玄、三河の家康――戦国の悪大将多しといえども、わしの見るところでは、この二人ほどの悪大将はちょっとない」

また最初の問答にもどりかけた。――

「これに対して、われらが殿ほどの善大将はこれまたいまの世におわさぬ」

と、右衛門はつづけて、さらにまた戦慄すべき予言をくり返したのである。

「されば、しょせん今川家の滅亡はまぬがれぬ。へたにあがけばあがくほど、それは早うなる」

「三浦どの！」

「おぬしら、あの殿の御善人ぶりが直せるものと思うておるか？　思うてはいまい――」

彼はまた眼をとじた。そのとじた眼から二すじの涙が白い頬につたいおちたのを見て、歯がみしていた三人の武士はぎょっと息をひいた。

「右衛門はな、ただ三つのことのみを念願しておる」

と、三浦右衛門はひくい声でいった。

「一つは、もとよりその亡滅の時を一日でも先へ遠くすることだが、二つには、せめてそれまでの間――それはあまり長うはない――なし得るかぎり、殿が愉しきおん日々を過させたまうように相努めること、三つには、ついに今川家の破局が来たとき、せめて殿のおんいのちだけはつつがなきようにと采配いたすことだ」

「――や？」

「その三つの願いを達するには、それ、今申したように、これまでのような無為安逸、いやおぬしらの言葉によれば淫楽の国を駿河にくりひろげておるにしくはない。特に、わたしの悲願は三つ目にある。あの天下の好人物であらせられる殿に、無惨の御最期をとげさせてよいと思うか。亡国のあるじにしてこの御運からお救い申しあげるには、いかなる敵からも、この人、生き永らえさせても恐るるに足らず――と見込ませるよりほかはない。わしはこのように思案いたしたのじゃ」

右衛門は眼をあけた。

「わしに奸臣の評あることは承知しておる。ふ、ふ、奸臣三浦右衛門忠節の次第は以上のごとし」

三人の侍は、ううむとうなったきり、黙り込んでしまった。

もとから主君と衆道を以て結ばれているという噂があるにもかかわらず、ただの寵臣ではな

いと思われていた三浦右衛門であった。だから今川家の家臣たちすべてがこの若い右衛門に一指も加えることが出来なかったのだ。だから三人が、大袈裟なばかりの覚悟をすえて押しかけて来たのだ。どのような弁解をされようと、それこそ奸物の遁辞、断じてたぶらかされまいぞとかたく申し合わせてはいたのだが――それにしても三浦右衛門が、こうまで思い切った、身の毛もよだつ考えから、八方破れの遊惰国を作りあげているとまでは思わなかった！

「わかったか」

と、右衛門は涙の眼を美しくかがやかせていう。

「わかってくれたら――いまふと思いついたのじゃが、おぬしらを見込んで、一つ頼みたいことがある」

「――は？」

「わしのこの方針に協力してくれる気はないか？」

「とは？」

「すなわち、殿の御快楽をいよいよ深くなし参らせる方向へ」

「せ、拙者どもが？」

武術においては何ぴとにもひけはとらぬという自信のあった三人は、めんくらった。

「な、何をいたすのでござる？」

「殿の最も愛でたまう三名花――お旗の方、香月の方、おこよの方――さまがたに、男女快楽

の道の限りなき深さをお教え申しあげることじゃ」

二

そうきいても、とっさに意味がわからなかった。――

なお睫毛(まつげ)に涙の珠をやどしつつ、彼らをのぞきこむ三浦右衛門の眼はほとんど甘美であった。言葉よりも、そのなまめかしさに、三人の侍は思わず知らずうっとりしたくらいである。

右衛門は、先刻からの話に倍する驚くべきことをいい出した。

――おぬしらも知る通り、わが殿は大変な御好色であらせられる。さればこそ、さきごろ駿河遠江(とおとうみ)のあらゆる女人のうちから美女百人を探し出し、その中からこの右衛門はみずから三人を選び出しておすすめしたほどである。ところが、左様なことまでして、さて殿がしんそこ交合の快の極みまで味わっておわすかどうかというと、甚だ心もとないものがある。わが見るところでは、それも殿の御善人ぶりのゆえ、すなわちあまりにも女人も御大切になされ過ぎるせいもあるように思われる。女人は男から、必ずしもいたわられ、敬われて心満ち足るものでない。時により、事と次第では荒々しい男の力にもみしだかれて、それをかえってよろこびとなすことがある。とくに交合の際においては然りである。さりながら、それは鈍ならざる男を以てしてはじめて知ることの出来る快で、知らされなければ知りようがない。が、ひとたび知れば、女は変る。この女の開眼によって、逆に鈍なる男は新しく交合の醍醐味を味到するに至る。

――

「その女人をまず燃やす役目をおぬしらに頼みたいのじゃ」

と、右衛門はいった。

「いや、われわれはそんなわざは存ぜぬ」

あわてて、関ノ戸乗康が手をふった。右衛門は薄く笑う。

「おぬしらなら大丈夫じゃ。わしのめがねに狂いはない。わざは必要でない。おぬしらがふつうに女を御するがごとく御すればよいのじゃ。なおそれ以上なんぞ工夫もがなと思うならばそのときはわしが伝授して進ぜる」

「あの三人……御三人を」

しゃっくりみたいに、大塔掃部がつぶやいて、ふいに夢から醒めたように、

「ばかなことを！」

と、吼えた。

「殿、御寵愛のおん方と……ば、ばかな！」

「それがまことの忠節となることは、今申した通り」

右衛門の声調は冷静である。手綱鷺丸がふるえ声でいう。

「そ、それは殿のお考えでござるか？」

「いや、わしの思いつきじゃ」

「で、では……密通でござるな」
「どういうことに相成るか。少なくとも御三方の御了承を得ねば成り立たぬことである以上、なりゆきによっては殿のお耳にも達するかも知れぬ」
「さ、左様なことになっては、お手討ちは必定。いや、お手討ちどころでは追いつかぬ――」
「あの殿が、お手討ちなさるようなお方であれば、かようなことを思い立ちはせぬ。しかし万が一にもそんなことのないよう、あくまで女人御開眼のためであると、わしよりじゅんじゅんと申しあげておく」
実に常識では考えられないような保証をしたが、それがあり得ないことと思われないのは、平生からのこの寵臣の主君への魔魅のごとき影響力を知ればこそだ。いや、三浦右衛門の魔力が働くのは殿に対してばかりではない。――
彼はさらに重大な保証をした。
「これはおぬしらの雄々しさを見て、いまふと思いついたことで、そんな、大それた――とおぬしらが仰天するのは或いは無理もない。ひょっとしたら、自分たちを罠にかけるのではないかと危惧するかも知れぬ。心配ならば、この試みの計画者はこの三浦右衛門に相違ないという誓文を書いてもよいぞ。――どうじゃ？」
そうはいったが、もはや頭から三人がこの委嘱を引受けることをきめている顔つきであった。
彼は、本気だ！

三人の若侍は憤怒して然るべきところであった。彼らはこの奸臣が、彼らの考えていた以上にケタはずれの奸臣であることを知った。知ったのに、彼らは怒らなかった。
度胆をぬかれたせいばかりではない。――彼らの魂をひっつかんだ別の力があった。まず、理屈ぬきに三人の女人の顔だ。駿遠の美女の中から選びぬいたというその絶世の美貌は、彼らから見て以前から天上の花としか思われず、それを何とかするという空想はとにかく恐ろしい力であった。
「……そ、それなら」
と、大塔掃部がうめいた。
「お手前自身がおやりなされたらよいではござらぬか？」
「わしはな」
右衛門は美しい妖笑を浮かべ、
「女には興味がないのじゃ」
つい先刻、何やら伝授するといったくせに、かろく言い捨てて、判断力を失って茫然たる三人に、
「やってくれるか？」
右衛門はささやく。
「それが、わが殿に対したてまつり――あの殿にかぎって――忠節の行為となるというわが

理（ことわり）、まだ納得出来ぬか？」

まことに奇怪な忠節の論理だ。駿河を八方破れにしておくことがかえって安全保障になるという。主君を遊惰の見本としておくことが主君の無事につながるという。主君の寵妾と密通して女のよろこびを知らせることが主君の快楽をいよいよ深くするゆえんだという。――が、三人の侍には、いつしかその奇怪な論理が最も至極なものに思われて来た。しかし、

「わ、わかり申したが、しばらく、いましばらく考えさせて下され！」

悲鳴に似た声ながら、からくも関ノ戸乗康がさけんだ。

とはいうものの。――

彼らをこの惑乱におとしいれた最大の力は、美女への誘いやこの怪論理より、三浦右衛門という戦国稀代の奸臣の持つ魔力であったかも知れない。

三

それ以後、三人の若侍はまさに魔に憑かれた人のようであった。

いったいあんなことをいって、三浦右衛門は正気なのか――と、まだ半信半疑であったが、一ト月ばかりののち、なんと三人の若侍は三人の寵姫（ちょうき）と、ほんとうに忍び逢うことになったのである。駿府城内にある右衛門の居宅で。

木乃伊（ミイラ）取りが木乃伊になるとは、まさにこのことだ。返答如何では奸物を斬るつもりであった三人は、まんまとその奸臣の自家薬籠中のものになり果てるどころか、それと心を合わせた背徳の一味と化したことになる。

ただし、そのようには三人は考えなかった。自分たちの機鋒（きほう）をそらすためだけに右衛門がこんなことをやり出したと見るには、あまりにも事が意外過ぎ、かつ大それたことであり過ぎる。

「……三浦どのの御思慮はそれなりに一理あるとして、お方さまがたが、左様なことをきかれるか」

「きかれたとしたら、こりゃ一大事じゃが」

「まことならば、死を以てしても御訓戒申しあげるよりほかはない」

「……とにかく、様子を見よう。すべては、それからじゃ」

一応こんな問答をおたがいに交わしはしたが、彼らのいったんけぶった理性がもとに戻ったとはいわれない。その証拠に。――

まず一夜、手綱鷺丸はひそかに三浦右衛門に招かれ、その屋敷にいって、奥座敷に案内されて、そこに主君の御愛妾の一人お旗の方を見出し、愕然とはしたものの――そこから逃げ帰りはしなかったのである。

「これが拙者の見るところでは今川家の三忠ともいうべきもののふの一人で、手綱鷺丸と申す。かように若く清爽（せいそう）の容貌を以てして、剣を使えばこれと太刀打ち出来る者はそうざらにはござるまい――」

と、三浦右衛門が紹介したのに対し、

「よろしゅうお願いいたします……」

と、お旗の方は、顔を伏せて、消えいるような声でいった。

「では」

右衛門がにっとして去るのに、いちど鷺丸はすがりつきたげな眼を送ったが、しかし座に釘づけになっていた。雪洞(ぼんぼり)のかげに、主君の寵妾というより、人身御供(ごくう)に捧げられた処女みたいにぼうっとけぶって坐っている女人の影にひきつけられて。

かすれたような声できく。

「三浦どのからおききなされたか」

「はい。……おんなの道に未熟なのは、殿への不忠じゃと……」

「と、殿は御承知なのでござりまするか」

「いえ、……そのうち右衛門どのより申しあげるとのことです……」

完全にこれまた三浦右衛門の忠節の論理にいかれている。彼女はいじらしいまでに大まじめであった。

そしてまた手綱鷺丸も、お旗の方が右衛門にたぶらかされているとは思わなかった。それどころか彼女の「信仰」をきいて、右衛門の論理に対する懐疑が、魔法みたいにぬぐい去られた。

——そして彼は、お旗の方を抱く破目に陥ってしまったのだ。

鷺丸はまだ独り者であったが、女を知らないわけではない。といって、若々しくスラリとした肢体の持主ではあるけれど、ことさら三浦右衛門に嘱望されるほどその道の剛の者というわけではない。むしろ家中で、同年輩の青年にくらべて初々(ういうい)しい方であった。こういう鷺丸にして、これは驚異すべき女体であった。一つは、この女人はまだ処女のままではないかと思われるほどの清純さに於て。一つは、それにもかかわらず処女ではあり得ない甘美芳潤さに於て。

——

数日後、こんどは関ノ戸乗康が呼ばれた。そして彼はおこよの方に引き合わされたのである。彼は武力もさることながら、三人のうちでは一番の軍師的才能があり、従って最も知性的な容貌をしていた。

これに対しておこよの方は、駿遠から選びぬかれた抜群の美貌は他の二人と同様ながら、肉感的という点では無双であった。——ただし、それが天性のものであって、べつに主君によって肉感的な女に変ったわけではないということを、一刻もたたないうちに関ノ戸乗康は知ることになる。

つまり彼もまたこの美姫の魅惑の罠に抗し切れず、これを抱いてしまったということであった。

彼女は、自分の官能美を知るや知らずや。——

「右衛門どのよりききました。……おまえは今川家でも物識(ものし)りという点ではならぶ者もない由。

……どうぞ、教えてたもれ。殿をほんとうにおよろこばせする法を！」

と、ひたむきに雪のような膝をすり寄せて来る。

その美しい眼は燃えるようであったが、それは忠節のためにそのわざの蘊奥を体得したいという熱情のゆえか、天性の色好みのゆえであったかよくわからない。彼女はおそらく意識してはいなかったであろうが、後者の分子も決して無とはいえない——ということを、やがて乗康は肌で体験したのだ。

とにかく、「……まことならば、死を以てしても御訓戒申しあげるよりほかはない」という言葉を発したのはこの関ノ戸乗康であったが、そんな宣言も炎の中に燃え溶けてしまった。

——

さらに数日後、大塔掃部は、同じく三浦屋敷で香月の方に引合わされた。

香月の方は凄艶とも形容すべき美貌であった。その月輪のような美しさを眼前にちかぢかと見て、外見も事実も今川家切っての強力無双の豪傑掃部がしばらく歯もカチカチと鳴り、胴ぶるいを禁じ得なかったほどである。

彼女はいった。

「わたしはこの世で一番の魅力ある女になりたい。女というものがどれほど美味であるか、その極みにある女人になりたい——」

まるでそのからだの芯から蒼白い炎が燃えて、それが映っているような眼であった。

「殿のために。——あの仏さまのように善い人である殿さまのため！」

大塔掃部はおのれのたくましい、毛むくじゃらの肉体のわななきの下に、白蛇のような香月の方の骨も折れ、肉もおしひしゃげるのではないかと案じた。が、一刻ののち、みるみる憔悴したのは彼の方で、それにからみついた香月の方はまだ容易に彼を離さぬ力を保っていた。

憔悴したのは掃部ばかりではない。春から夏へ——数カ月のあいだに、鷺丸も乗康も、みなが怪しむほどにやつれ果てた。おそらくそれはたんなる肉体的消耗のせいばかりでなく、彼らの心の苦悶のゆえもあったであろう。主君の愛妾と密通するという、破天荒の大逆へのおののき。

にもかかわらず、彼らはなお憑かれていたとしかいいようがない。苦悶しつつ、その密通がついにやめられなかったからだ。

にっと笑んでいるのは姦臣三浦右衛門であり、そしてそれ以上にノホホンと仏さまのような顔で富士にかかる白雲を仰いでいるのは、今川刑部大輔氏真であった。

四

今川家は、もとより武勇なくして東海に覇を唱えるわけもないが、戦国には珍しく文化の香り高い家柄であった。

諸国の群雄の中でも、一、二の名流である。源氏の血をひく足利の一門として今川が駿遠の

守護となったのはすでに建武のころであったが、それ以来代々のうち最も有名なのは、足利義満のころの今川了俊貞世である。軍政ともにすぐれた名将であったが、一方で「太平記」に反駁する「難太平記」などいう史論、かずかずの歌書をものする文化人であり、特に子弟のために著わした道徳書は、世に「今川状」と呼ばれて、遠く、徳川時代の寺子屋教育にまで伝えられた。これにならって、「万民今川」「商家今川」「百姓今川」「女今川」など、庶民の教訓物には多くこの名がつけられ、今川状は修身書の代名詞となったのである。

その十二代の義元が出た。彼もまたその文化の血を伝えていた。

義元を生んだのが京の中御門大納言から迎えた女性で、これに従って多くの公卿が駿府へ下向し、和歌や蹴鞠の会が盛んに催され、駿府の地名さえ、清水、愛宕、北山、西山などと名づけられた。宛然、東海の京といってよい。

彼はふだん髪を公卿風に総髪にして、口にはお鉄漿をつけていたといわれる。また体軀肥満し、足短く、いよいよ上洛の出陣にあたり馬に乗ろうとして、転がり落ちたといわれる。

さて西上の途について、桶狭間で散死してしまったから、彼は信長の天下布武の緒戦を飾る恰好の引立役となり、道化役にさえされてしまったが――桶狭間に「もしもあのとき」雷雲がひろがらなかったら、四万五千の今川軍に対し二千の織田軍の奇襲が果して成功したかどうかわからない。

あたかもミッドウェーで米空母に倍する空母を擁する南雲機動部隊が、そのときの雲にさえ

ぎられて敵機群に気づかず、一挙に敗れ去ったのに似ている。ついでにいえば、真珠湾は本能寺の変に彷彿たるものあり、信長はまずミッドウェーにおけるスプルーアンスの役をやり、順序を逆転させて真珠湾におけるキンメルの役を一人で演じたことになる。

しかし義元は、戦国の群雄のうち、上洛の大志を実行に移した最初の武将であった。足利以来、「公方が絶えれば今川がつぐ」とまでいわれた名門の血にうながされたせいもあるが、この遠征軍を送る実力もたしかにあったのだ。おそらく彼自身は打物とっての勇将ではなかったであろうが、その老獪なる外交力、政治力、経済力を以って、ゆうに駿遠を守るのみか、徐々に浸透的に領土を拡大してゆき、ついに北条も武田も縛りつけて上洛の大軍をひきいて出陣するところまでいったのはただの手腕ではない。

ともあれ、彼は自信過剰から来た油断から西上の途中に倒れた。あとに、一子の氏真が残った。父が戦死したとき二十三歳である。

その刑部大輔氏真が、戦国の世には珍しいタイプの御曹子であった。

彼は父の遠征軍に同行していない。留守を守って本国のおさえとする意味もあったかも知れないが、しかし十二年後、やはり甲斐の信玄が上洛の出陣をしたとき、一子の勝頼を同行させている。つまり父の義元から見ても、いくさにはまったく向かない人間であったのだ。

史書には柔弱暗愚と断ずる。側近の寵臣の表現によると善大将という。見方によることだがその行状を見ると。――

父が中道にして斃れても、弔合戦などまったくない。むしろ弔合戦を主張したのは今川家の一将として桶狭間に参軍した松平元康であったが、彼は首を横にふった。

「父は誤っておった。父の死は痛恨のかぎりではあるが、実力以上の大それた野心を出したことについて、天が罰を下したといってよい。父とともに討死した二千七百五十人の将兵に対しては、許せ、誤ちは繰返さぬという言葉を以て手向けとしたい。そして四海みな兄弟という理想を爾今駿河の国是とする」

と、そのとき彼はいった。

「わが駿河は不戦を以て誓いとなし、ただ万民ひとしく泰平を愉しむ楽土としよう。京に上って天下に号令するよりも、その方がむしろわが今川家の尊さを諸国に知らせることになる。勇を以て鳴る伯父の信玄どのさえ、人は城、人は石垣、人は堀、なさけは味方、あだは敵なりとうたわれて、城も作られぬではないか」

そして、彼を見離した松平元康が今川家にあと足で砂をかけて三河で独立し、それのみか敵の信長と組んでしまったという報をきいても、

「もともと三河は元康どのの国であったのじゃ。それを今川家が侵略しておったのがいま独立したのじゃから、これは本来のかたちに戻ったものといえる」

と、鷹揚にいった。

それどころか、

「いや、元康どのも長らくわが今川家に抱えこまれて苦労なされた。その贖罪のために、松平家の人質は返してやろう。さすれば元康どのも恩義に感じて、これより今川家を徳とするであろう」

といって、当時なお駿府にとどめてあった元康の御台と嫡男を岡崎に返還してしまった。

松平元康こそ、氏真と対照の妙を極めた。

桶狭間の年、元康は十九歳であったが、幼時家衰え、義元の力のまえに国を失って彼自身は八歳のときから駿府に人質的食客となって成長している。が、その不敵な面だましいは人々の舌をまかせた。

十歳のとき、義元の前に拝賀に出て、今川家の群臣綺羅星のごとくならぶなかに、つと立って縁側から堂々と小便をした。また旧臣鳥居忠吉は三河にあって、苦心して幼主に生活費を送り、かつ一子の元忠を遊びの友として元康につけた。然るに元康は、元忠の鳥の飼い方が気にいらぬとて、これを縁側からつき落した。これをきいた鳥居忠吉は、「ただいまのおん境涯、子供ごころにも鳥居に対して多少の御斟酌（ごしんしゃく）あるべきに、いささかもその御様子なきおんゆくすえ恐るべし。われ老いてそのときに逢わざるを悲しむ」と嘆じたという。安倍川で子供たちの石合戦を見、その勝敗を占うのを愉しみとしたというのもこのころの話である。

いずれも「悪大将」の萌芽躍如たるものがある。

それだから、むろんこの不敵な悪童は今川家の家来たちからつら憎がられた。

天正九年、家康が武田方の高天神城を攻め落したとき、孕石主水(はらみいしもんど)なる勇将を生捕った。家康はこれを刑殺したが、それは高天神城での敵対行為のためではなかった。この孕石主水は以前は今川家の家来で、家康が人質時代、鷹狩りで駈けまわって孕石の屋敷の畑を踏み荒したのをつかまえられて、主水から「三河の小伜め、うぬのいたずらには呆れはてたり」となぐりつけられた恨みを、三十数年後にはらしたのである。家康の執念深さもさることながら、以て当時の家康に対する今川家の待遇を知るに足る。

この中で、彼をかばったのは、四歳年上の氏真であった。

「ふびんな元康ではないか。むごう扱うな」

彼は家来たちにしばしばこう命じたのみならず、元康を呼んで、四歳年上の少年らしく、菓子を与えたり、自分の趣味とする和歌や蹴鞠など教えようと努めた。

氏真は元康を憐れんだが、彼の鷹揚でやさしい性質は亡国の孤児のみならず、まわりの誰にも及んだ。彼は人を疑うということを知らなかった。

かくて、松平元康のもとへ御丁寧にも人質の妻子を返した今川に対して元康が酬いたのは、義元からもらった元康という名を改め、爾今徳川家康と称するという宣言であった。のみならず、これ以後徐々に三河をかためて、今川の領土たる遠江方面の蚕食(さんしょく)を開始した。

このとき家康は突如おのれの足もとから一向一揆の大叛乱に逢い、このために徳川存亡の悪戦死闘に追い込まれた。

「奇貨おくべし。――これは家康に下った天罰でござる。この機に不埒(ふらち)なる徳川の息の根をとめようではござらぬか」

むろんそんな進言は火のごとく氏真のもとへ相ついだが、氏真は、

「隣国の苦難につけこむのは大国のなすべきことではない」

と、首をふって肯(がえ)んじなかった。

「ひとのいいにもほどがある――」

と、匙を投げて今川家を退転し、徳川、武田、北条などに走る者が若干あったということはいうまでもないが、これにも氏真は、「去る者は追わず」と、悠然としていた。こうなると、

「まさに、これぞ天下人たるの大器――」

と、感服感銘して、よそから今川家を慕って来る者もある。

結局、桶狭間以来八年を経て、善大将の国駿遠は天下泰平である。――駿府では、静閑な侍町にのどかな和歌の朗詠の声や鼓や蹴鞠の音が流れ、殷賑(いんしん)をきわめる町人町には十日もあけず華やかな祭の行列がねり歩く。

こうなると、まったく群雄を超越した大人物のようだが。――

今川氏真は、人を愉しませることも好きだが、それ以上に御当人も愉しむことが大好きであった。例の「平和論」も、論旨は寵臣三浦右衛門からの借物だという者もある。たしかに彼は理屈ぬき哲学ぬきの好人物であった。

何より美童と美女の愛好者だ。

三浦右衛門は、今川家で凶勇をうたわれ、義元の全盛時代吉田にあって三河の検断職を勤めた小笠原肥前守鎮実の一子で、その無双の美貌は父に似ず、氏真があるじとなるやまもなくその寵童となった。しかも父譲りの不敵な資性はたちまち恋童の域からぬけ、駿河のあらゆる治政は氏真を介して実は彼の方寸から出ているとさえいわれる存在となった。三浦右衛門にあやつられているという噂に、氏真だけは無案内であったようだ。氏真は人の善意しか見ない殿さまであった。

いちどは右衛門を自分の恋童とはしたが、それも戦国の習いであって、やがて右衛門の周旋する美女たちと盛大な歓楽にふけり出す。はては右衛門の企画による美女コンクールの第三位までを愛妾として悦にいるというていたらくになった。しかも、ではその道の蘊奥に至ったかというと、これが甚だおぼつかない。

「それは女人をあまりに御大切になされ過ぎるせいもあるように思う」

と、いみじくも右衛門は喝破したが、「翁物語」という本にも、

「氏真公、人の娘の美しさを聞き及びては、歌を詠じて遣り、よろずのしかた公卿の家風のごとく男らしきこと少なし」

とあるような、甚だ武門に縁遠い艶聞沙汰が、かえってその道を不徹底ならしめたものと思われる。——

そのことを思いやった寵臣三浦右衛門は、その「忠節」の極まるところ、三人の優秀な青年の肉体を以て、三人の愛妾を開眼させ、以て主君の快をいよいよ深めんとした。で、三人の若侍は愛妾たちと密通している。——

しかも、御本人の今川氏真は、父に似て足の短い、その分だけゆったりとした胴の上に、お鉄漿をつけ、どじょうひげを生やし、善良さと気品にみちた顔をのせて、依然として駿河の空に次第に早くなる雲のゆきを、われ関せず焉と眺めていた。

「吉野川ぜぜのしらなみ岩越えて梢にかかる五月雨の雲」

彼の歌である。凡庸といえば凡庸だが、しかしそののびやかさ、格調の高さは、こういう方面においては彼が他の武将以上の感性を持っていたことを証明している。

五

さて、文字通り、「姦臣」となりはてた手綱鷺丸、関ノ戸乗康、大塔掃部の三人はやつれ切った。が、それも一ト月二タ月のことである。

それはむろんこの道ならぬ快楽の苦悶のためであったが、やがてそれも痺れはてた。彼らはそれぞれ三人の女人との悦楽の世界へ無我の没入期に入った。それほど三人の若者にとって、三人の女の蠱惑は夢幻的であったのだ。彼女たちのたぐいない美しさ、彼女たちの越えてはならぬ身分、それから発する苦悶が、かえって彼らを酔わせる魔薬となった。三人は目立って頬

がこけ、眼に病的な光をたたえながらも、一つの道に憑かれた人間の精気を発するようになった。

が、それもまた一ト月二タ月のことである。やはり彼らも人間の心を持っている以上、時にはっとわれに返り、背徳の戦慄に全身を吹かれることがある。そしてそのことは次第に多くなった。——三人の心の経過はまず大同小異であったが、一応それを書き分ければ。

まず手綱鷺丸とお旗の方。——

彼は最も純粋で素朴な若者であった。そして男女交合のわざなどことさら知らなかったことはまえに述べた通りだが、その彼に対して目覚めるような反応を示したお旗の方に、彼の方がびっくりした。

鷺丸としては特別のことをしたおぼえはないのに——尤も相手が無比の美女だけに、彼の忘我ぶりもただごとでなかったことは争えないが——まさしく、お旗の方は開眼したのである。それがふつうの女性よりはるかに恥じらい、初々しい女人であっただけに、彼の眼を見ひらかせた。まさに、お旗の方の開眼によって、こんどは彼自身が開眼するところがあったのだ。

この相互反応は無限であった。

三人の女のうち、お旗の方がいちばんやつれたようであった。鷺丸は——べつにほかの二人にくらべる機会を持たなかったが——このことに気づいて、ぶるっと身ぶるいした。彼はおそるおそるきいた。

「拙者とかようなことをなされるのがお苦しゅうございますか？」

「苦しい……」

と、お旗の方は息たえだえにいった。

「殿さまのことを考えると」

鷺丸はのどに鉄丸でもつまったような思いがした。それこそは彼の最大の苦悩のもとであったからだ。

「殿さまは何もお気づきになりませぬか」

彼女は黙って、めっそうな、という表情をした。しばらくたって、彼女はあえぐようにいった。

「この果ては、どうなるのでしょう？」

相互反応のゆきつく果てこそ、鷺丸の最も恐れるところであった。それは想像もできなかった。いつしか彼は、その一歩手前の或る甘美な幻想を描くようになっていた。

城門の外に成敗されて横たわっている、糸のようにやつれた二人の屍骸。それに枯葉か、冷雨か、粉雪かがふりそそいでいる。……

いちど、その甘美な幻想の誘惑にたえ切れず、

「お方さま」

と、鷺丸はうわごとのようにささやいたことがある。

「心中つかまつろうか？」

お旗の方も夢みるようなまなざしをした。が、ややあって彼女はつぶやいた。

「それでは殿さまがあまりにもお可哀そう……」

それを偽善の言葉と彼はきかなかった。彼女のいたいたしいまでに素直で善良な性質は、いまや、だれよりも彼がよく知っていた。それだけに彼が苦しんだのであった。鷺丸は彼女を抱きしめてすすり泣いた。

「いや、われわれは罰としてもっと苦しまなければならぬ。この苦しみの果てに、あなたさまが御自害なされようと、灯の消えるがごとくお消えなされようと、どのようなことに相なっても鷺丸は運命を共にいたしまする……」

また、関ノ戸乗康とおこよの方。

おこよの方は、はじめ「おまえは今川でも物識りという点ではならぶ者もないときく。どうぞ教えてたもれ……」といった。その通り、彼女は恐ろしく肉感的なくせに、ほとんど何も知らなかった。いったい殿さまは何をなされていたのだ、と奇怪にたえなかったほどである。おこよの方は貪婪に熱中した。たちまちこの軍師的才能ある青年は、逆に女の方から教えられるような雲ゆきになった。

「と、殿は……」

呆れはてて、彼はきいたことがある。

「あなたさまの異変をお気づきになりませぬのか？」

彼の股間からたちのぼる白炎（びゃくえん）の中に官能の精のような顔をあげたおこよの方は、にこっと笑った。

「知られたら、一大事、一大事……」

まさに一大事であるが、しかしいつまでも知られずにいようとは思われない。少なくとも、そのようなことがいつまでもつづこうとは信じられない。――いかなるかたちにせよ、この世界が終る日のことを考えると、関ノ戸乗康はそれだけで全身がからになる思いがした。

弟子が熱心なだけに――いまやどちらが師でどちらが弟子かわからないていたらくであったが――彼の方も研究した。乗康は男女交合の道が軍法に劣らず極まりないことを知った。

極まりないこの道を、終る日なくつづける法があるだろうか？

関ノ戸乗康はいつしか夢みはじめた。……そのまなざしをおこよの方はのぞきこんで、ふいに顔をひき離した。

「……ま、恐ろしい顔を」

彼は夢想していたのであった。今川家滅亡の日を。その日が一日も早からんことを。

さらに大塔掃部と香月の方。――

三人の武士のうち、最も痩せて来たのはこの掃部であったかも知れない。それは元来彼が最も大兵肥満といった体格の持主であっただけに目立ったせいもあるが、事実無理をしたせいもあ

る。「世の中でいちばん魅力のある女になりたい！」という香月の方の悲願を叶えるために。

　もっとも女をいちばん魅力のある女にする法など、彼は知らない。ただ交合しまくるだけでその目的が達せられるなど、彼も考えない。ただ事実として、現在として最も魅力ある女だと思われる香月の方と、彼は狂ったように交合しまくっただけである。そしてまた事実として、香月の方はいよいよ恐ろしいほど魅力を加えて来たのである。

　もともと凄艶な香月の方は、それだけ痩せがたであったが、彼の猛威のもとに不思議にやや肥って来て、むしろ、妖艶と形容すべき女人となった。それを鏡で見て、彼女も自認したらしい。

「もっと、もっと！」

と、彼女はせがむ。

「男にとって、美味の極みにある女になりたい！」

　香月の方はたしかに虚栄心の強い女であった。他の二人の愛妾に対して最も自負を持ち、それでも足りず最も強烈なライヴァル意識を持っていた。

「もう弱ったのかえ？　今川でもいちばん立派なからだをしているおまえが？　いえ、いちばん強いと威張っているおまえが？」

　そしてまた大塔掃部が、たしかに強いが上にも強がる——よくいえば、勇猛無比の荒武者であった。

　が、肉欲の嵐のあと、虚脱状態になると、ときに気泡のようにふらふらと浮かんで来る顔がある。

「殿は、何もお感づきではござりませぬか？」

やはり、他の二人と同様、これだけは最大の気がかりだ。

「御存じのようじゃ」

とあるとき香月の方はいった。掃部はぎょっと息をひいた。

「わたしが魅力ある女になったことを」

と、彼女はニンマリと笑った。

「それで大悦しておられる」

「それだけでござるか」

「それ以上、何の頭をめぐらされる殿ではない——」

　そして彼女は、なまめかしいふくみ笑いとともに掃部の口を舌でなぶりはじめた。……

　主君がまだ何も知らないことはたしかであった。むろんはじめは胸撫で下ろしたことはいうまでもないが、そのうち掃部はその主君に対して怒りさえおぼえて来た。

　それが、これほど魅力ある女人の本来の所有者に対するやきもちからではない。彼の体験では、主君はこの女人の所有者ですらない。これほどやってもまだ気がつかないのかという、信じられないような鈍感さに対するいきどおろしさである。

気性の烈しい男だけに、だんだんたまらなくなって、或るときついに、

「と、殿に申し上げて下され……」

と、うめき出したことがある。これに対して、香月の方は、むろん、気でも狂ったか、というように首をかしげて彼の顔を眺めていたが、やがてまた例のなまめかしいふくみ笑いをもらしてつぶやいた。

「申しあげても、殿は御平気かも知れぬ」

次第に大塔掃部は破局を予想しはじめた。

常識的な破局ではない。破局の来ない破局である。正確にいえば、だからみずから呼ばずにはいられない破局である。彼は主君氏真に対し、殺意をおぼえ出した。そのあとでどうなるか天地晦冥（かいめい）であるが、遠からぬ未来、狂刃をふるって主君にとびかかる自分の姿をありありと思い描くようになった。それで結着をつけなければもうたまらない。……

主君の御愛妾と密通することが主君のおんためとなり、主君を暗愚たらしめることが今川家の安泰につながるという三浦右衛門の怪論理からはじめられたこの三組の密通は当然のことだが、三人の侍の心に安泰をもたらさなかった。どう考えてもこの密通の果てが永遠に安泰であるはずはなかった。

が、破局は意外な方から来た。或いは当然な方からといった方がよいかも知れない。

その年も終りにちかく、突如として北の武田と西の徳川がいっせいに駿遠に侵攻を開始したのだ。時に永禄十一年末。

六

しょせん、いつの日か来る、と心ある人々が怖れていた日がついに来た。そう思いつつ、いつしか泰平に馴れて歓楽にうつつをぬかしていた人々の眼には、突然の凶変と見えた。突然であるはずがない。八年にわたり、虎視たんたんと今川家をうかがっていた二人の「悪大将」は、時到れりとひそかに密約を交わし、武田は駿河を、徳川は遠江をと分割の計成って、時を合わせて北と西から雪崩れ込んで来たのである。

青天の霹靂のごとく驚愕した人々はもとより、予感していた人々もこれに対して何らなすすべのなかったことは同様であった。武田も徳川も、申しわけ程度の今川の守護兵を撃破し、潰乱（かいらん）させて、特に信玄の風林火山の旗は燎原（りょうげん）の火のごとく進撃して来た。

駿府は阿鼻叫喚の巷と化した。

十二月十二日のことである。手綱鷺丸、関ノ戸乗康、大塔掃部は髪を逆立てて城へ駈けつけた。

「殿は？」

「掛川へお落ちなされるとてお支度中でござる――」

「西からも徳川が入って来つつあるというではないか」

「ともあれ、明日にも武田が駿府に入って来るという今日では、西へ逃げるよりほかはない――」
「三浦右衛門どのは？」
「それが、二、三日前から姿が見えぬ。どうやらどこかへ逐電なされたらしい――」
城侍とあわただしくこんな問答を交わしたが、彼らは心も空であった。
両国侵攻の報で驚倒したことは事実だが、それでそのことをうかうか念頭からとり落して妖しき快楽に耽っていたことを、愕然として悔いたかというとそうではない。彼らの魂を魔神のごとく鷲づかみにした考えはほかにあった。
彼らは、すべてを解決する天来の機が到来したと直感したのである。すなわち、それぞれの女人をつれて逃げるという。――どこやらへ姿をくらましてしまったという三浦右衛門に怒る資格はない。彼らもまた右衛門以上の奸臣と化していたのであった。
しかし三人は、ことさらうしろ暗い罪の意識を感じていない。さすがに直接氏真の安否を問うほどの厚顔は持たなかったが、それより彼らをとらえているのは、それぞれ「あの方を救う」という虹のようにまぶしい意欲であった。
指揮者らしい指揮者がいず、ただ暴風のような混乱の中に、手綱鷺丸はお旗の方を探し出した。
「おう、お旗の方さま！」

渦の中みたいに動顛していたお旗の方は、すがりつくべき杖を見つけ出したような表情になった。
「鷺丸どの！」
「いざ、お供つかまつりましょう」
「殿は？」
「殿？」
「殿は掛川へゆくのではないのですか」
「いや……西ならず、北ならず、東の相模の方へ。いま、あなたさまと拙者だけなら、何とかして逃れる道もありましょう」
お旗の方はびっくりした顔をし、やがて首をふった。
「殿をお見捨てしてですか。それはあまりにお可哀そう……」
鷺丸は鞭で面上を一撃されたように棒立ちになって、涙をいっぱい浮かべたお旗の方の眼を凝視しているばかりであった。関ノ戸乗康もようやくおこよの方を見つけ出した。
「お方さま！」、ついにその日が参った！　待ち受けていたことではござらねど、万一今川家亡国の日も来たらんかと、以前より遊撃戦の根城として想定しておった土地が富士の樹海にござる――」
「……ま、殿は掛川へお落ちなされると申しておられるが」

「いや、われら両人だけ――」
　肉感的なおこよの方の顔が、火に映える牡丹のように染まった。彼女は凛然としていった。
「わたしは殿のお供をいたしまする。殿から離れてどこぞへ逃げようとは思うておりませぬ！」
　関ノ戸乗康は、これまた脳天にがんと痛棒をくらわされたような顔で立ちすくんだ。
　大塔掃部に至っては。――
「お方さま！　ついに待望の日が参りましたぞ！　われら両人の救われる時が到来してござるぞ！」
　と、われを忘れて本音を口走り、
「いざ、二人だけの世界へ――」
　と、強引に香月の方をさらいあげ、駈け出そうとしたところを、もがきぬく香月の方から実際に平手打ちを食ったのである。
「逃げるのですか、大塔掃部、今川家随一の勇士と誇ったおまえが、哀れな殿をお見捨てして逃げるというのですか！」
　平手打ちも繊手に似ぬ痛さであったが、それ以上の衝撃に掃部の全身は硬直してしまった。
「わたしは逃げぬ。わたしはどこまでも殿のお供をする。下ろしや、掃部！」
　――すでに乱民が掠奪をはじめ、放火さえした者があると見えて、駿府の町のあちこちから

黒煙があがり出した。それをすでに敵軍来ると恐怖して、騒ぎは手のつけられぬものとなる。
今川氏真一行は惨憺として落ちていった。
　馬が不得手で、氏真は輿に乗っている。それに従う女たちも徒歩はだしで、これを囲む侍たちも甲冑をつけている者は半ばに過ぎない。信玄が駿府に入って来たのがこの翌日の十三日だから、この狼狽ぶりもむりはないが、しかしこの混乱の最大の原因はちゃんとした指揮者のいなかったことによるものであったろう。
　この一団に、とめどもなく秩序もなく、侍や難民のむれがつづく。西へ。――
　その切れ切れの行列のしっぽちかく、手綱鷺丸と関ノ戸乗康と大塔掃部が歩いていた。狐につままれたような――いったい今自分は何をしているのか、さっぱりわからない人間の、まるで雲を踏んでいるような足どりであった。

七

　今川氏真はともかくも遠江掛川城に落ちのびたが、半月後、こんどは西方から幾つかの砦を撃破して殺到して来た徳川方に包囲された。掛川城は今川の一将朝比奈備中守泰能の守るところであった。主を迎えた朝比奈はさすがに死物狂いの勇をふるって攻撃に耐えたが、さればとてすでに本城駿府を失ってそのゆくすえは絶望的であった。
「右衛門はまだ来ぬか――」

しばしば氏真はこう周囲にきいた。
「右衛門はきっとわしのところへ帰って来ると申した――」
駿府落城の直前姿をくらませた三浦右衛門がどこへいったのか、誰も知らない。氏真は、母を求めるあかん坊みたいにウロウロと頼りなげに眼を空にさまよわせていう。
「あれは、掛川へゆけ、さすれば、必ずわしのいのちは助かると申していった――」
あの混乱の中で、なぜ氏真が掛川に落ちるなどといい出したのかよくわからなかったが、してみると、それは三浦右衛門の献策によるものであったらしい。その右衛門は、しかし無責任にどこかへ逃げてしまった。
三十一の男が二十過ぎの寵臣をかくも信じ切っているのを見ては、だれも苦々しげに舌打ちせずにはいられなかった。
「――なんの見込みあって？」
と、改めてきく者に、
「徳川どのなれば氏真に悪しくはなさるまい、と――」
と、人のよげな笑いを浮かべてつぶやく。
この期に及んで、氏真はまだ家康という人間に一縷（いちる）の望みを託しているらしい。しかし、これまでも徳川の戦闘ぶりに仮借はなかった。――
それでも氏真はまだ性懲りもなくいう。

「右衛門は来る。あれはきっとわしを助けに来る――」
ここに至っては、いかに三浦右衛門が神変の術を持っているとしても、駿遠に武田、徳川の兵が氾濫している今となってはもはや逃るべき道は万に一つもないことが、まだおわかりにならぬか――と、いいきかせる気力さえ失って思わず知らず涙をこぼす者もあった。
年を越えて早春。
掛川城を包囲する徳川の哨兵が、古薦（ふるごも）をまとった乞食を一人捕えた。むろんはじめは兵火に流浪する難民の男かと思っていたのだが、その垢だらけの顔立ちの美しさに、「はて？」と疑って幕屋に拘引して調べているうちに、これに加わった上官の一人が、
「や、これは三浦右衛門ではないか！」
と、眼をむき出してさけんだところから一騒動になった。
「おお、ではこれが今川家を誤ったという噂の高い奸物か――」
「それに、こやつの父は三河の検断職であった！」
このあとの方の事実こそ、徳川方にすれば天人ともに許さざる決定的な罪案であった。前にも述べたように、家康が駿府に人質となっていたころ、三浦右衛門の父小笠原肥前守は三河の占領軍司令官として、徳川の地侍たちを身の毛もよだつほど徹底的に弾圧した巨魁であったからだ。
家康までが見に来た。何しにここらをうろついておったのか、という訊問に、

「いったんは駿府より逃げ失せましたなれど、やはりいかにしても刑部大輔さまと御運を共にいたしたく、掛川城へ忍び入らんとしたのでござる」

と、右衛門はおののきながら答えたが、これを殊勝なりと褒める者はだれもいない。——

「斬れ」

家康が命じると、三浦右衛門はみながぎょっとするような反応を見せた。「武徳編年集成」には、このときの彼の態度を、「右衛門、天に仰ぎ地に伏して、劓（はなき）り耳切りてなりとも命を助くべきの旨を願う」とある。彼は家康に対し氏真の昔年の好意をさけびたて、はてはたとえ四肢を断って首と胴体だけでも氏真公のもとへ送ってもらいたいと口走った。

「願い通りにしてやれ」

と、家康は苦笑と軽蔑のひかりにみちた眼をそそいでいった。

「城からよく見える場所に坐らせて、一日に指一本ずつ、次には両耳、鼻、次には四肢を一本ずつ毎日斬ってゆけ。それで何日になる？」

家康には珍しく惨酷な行為であったが、小笠原肥前は三河にあって、徳川家の地侍たちの子供を人質にとっておき、反抗したり年貢を滞らせたりする者があると、その子をみせしめとして串刺しにしたというくらいの苛政をやった人間だから、無理もないともいえる。

「こやつ駿河にあって、まさに傾国の美童であったという。もとの通りのその姿にさせい。そして大俎（まないた）にのせて、劓（はなき）り、耳切り、刑部大輔に国を誤らせた奸賊の末路を見せてやれい。そ

れが氏真に対するわしの恩返しじゃ！」

「で、では、最後にはお殺しなされるのか」

右衛門は身もだえした。

「命だけはお助けを——手や足はようござるが——」

家康は吐気をもよおしたような表情をした。彼はこれほどおのれのいのちにみれんを持つあさましい人間を見たことがない。

「首と胴だけになってまだ生きておったら、城へとどけてやろうわい」

と、彼はいった。右衛門の顔色がぱっとかがやいた。

「すりゃ、お助け下さりますするか？」

家康は鎧を鳴らして立ちあがり、掛川城の方をにらんでいった。

「が、途中で氏真をはじめ今川方がこやつを奪いに出て来たら、もっけの倖せ討ち果たすぞ。いや、何より、敵ながら、今川の侍の侍らしいところが見たいわい！」

その翌日から、三浦右衛門惨刑のショーが開演された。

城からよく見える梅咲く小丘の上である。そこに大俎が置かれ、前髪に華やかな衣裳をつけた美童右衛門が坐らせられた。そして、一日に、指一本ずつ斬り落されていったのである。

「殿っ……殿っ……右衛門でござる。ここまで帰って参ってござる！」

と、彼はさけんだ。城といっても砦のようなものだが、こちらの異変に気づいたらしく、そ

こに並んだ武者たちがどよめいているのがよく見えた。

さて、生命にこれほど執着を持つ、三浦右衛門だが、助けを呼ぶことは味方を殺すことになる。そんなことは砦の方にもわかっているであろうが、右衛門はどうするか。

「出られてはなりませぬぞ。ただ、見ておって下され――」

はじめ、さすがに彼はそうさけんだ。指を一本ずつ切られてゆく期間、女のような悲鳴をあげつづけたが。――

十一日目、十二日目、彼は耳を切られた。たぐいない美童であるだけに、白蠟のような両頬に垂れる血潮はひとしお凄惨を極めた。

「出られてはなりませぬぞ。私が我慢すれば、いのちだけは助け給わるそうでござる。待っておって下され！」

十三日目、鼻を切られた。

「ぎゃふっ」

右衛門は怪声を発した。怪声とならざるを得ない。

それにしても駿遠一の美しさをうたわれた男が、スッパリ鼻を切り落され、そこに赤い断面を描き出した面貌は、もはや形容の言葉もない。

「ま、まだ生きられる。……右衛門は必ず生きぬいて、殿のおんもとに参る――」

しかし、何をいっているのか、徳川方の侍たちにはもうわからなかった。――砦の騒ぎはい

よいよ甚だしくなったが、しかし彼らはついに出撃しては来なかった。「出て来ぬな」と家康は大軽蔑の口吻を吐き出した。

十四日目、大俎の上に横たえられた魚みたいに、右足を斬られた。

「助けて――お助け下され、殿っ……」

たまらず、右衛門はいちどこう悲鳴をあげたようだ。が、すぐに。――

「いや、ま、待って下され。まだ辛抱できる。出られてはなりませぬぞ。きょう一日は――」

と、声をふりしぼった。

十五日目、左足。彼は足無しの人間と化した。

十六日目、右腕。――彼の悲鳴は一日ごとに耳を覆いたいほどのものになり、鼻のないせいばかりでなく、まったく絶叫の内容は意味不明であったが、とにかく、「右衛門はまだ死なぬ。生きぬいて、殿のおんもとへ」とさけびつづけていたようだ。

「こうなると、こやつ、いのち惜しさのみれん者か、それともこれなりに剛の者かわからぬな」

と、さすがの家康も長嘆した。

十七日目。

「きょうは何日でござる」

俎にのせられる前に、右衛門はふと尋ねた。むろんいちどではわからず、それでも足助（あすけ）長介

という侍の一人が、
「三月十七日じゃ。それがどうかしたか」
と、教え、かつきいた。右衛門はきかれたことには答えず。
「きょう、左腕を斬られたあと、たしかに城へとどけて下さるな？」——
と、すがりつくようにいった。もっとも、これもみなの耳には意味不明であった。だいいち徳川侍たちはもはやきく耳を持っていない。
　この今川の寵臣の生きる執念にほとほと愛想をつかし、恐怖すら起した家康は、その日、「腕を斬ったら、首も落してしまえ」と命じていたからである。
　刀を執ったのは足助長介であった。バサ！　と右衛門のただ一本残った左腕を斬り落したあと、従士たちに命じて、いったん前に転がった右衛門を——というより一団の肉塊を、また俎の上に置き直した。——ふたたび刀をふりかぶった長介の気配を感じて右衛門は、約束がちがう、ということを知ったのであろう、四肢がないのに、彼はもがき出した。つぶれた眼からまた血を流し、口から泡をふいて何やらさけびながら。——
「武徳編年集成」には「甚だ悶乱し、その斬るところをたしかにせざるゆえ、長介、うつぶしに踏み倒して首を斬る」とある。
　そのとき、すぐまわりの徳川侍たちには右衛門が何をわめいたのかよくききわけられなかったが、かえって距離をおいた掛川城の城兵たちは右衛門の最後のさけびをたしかにきいたので

ある。
「殿っ……殿っ、掛塚へ落ちなされ、そこに十五日から、北条の軍船がお迎えに参っておるはず。殿、掛塚へ——おさらばでござるっ」

八

——あれ救え、右衛門を殺すな。
　十七日間、むろん今川氏真は足ずりし、身もだえしつづけた。朝比奈備中はいちじは出撃の用意をしたが、——そして、それ以後もその態勢は崩さなかったが——しかし、結局はこれを抑えた。もとよりその出撃が敵の思うつぼにはまることを知ってのことだが、一方では備中その人が、駿府にあって主君を暗君と化した三浦右衛門に好意を持たない、むしろ憎悪を抱いていたせいもある。
　しかし、その半ばごろから、さすがに、——はて、これは何かあるぞ。
と、備中も首をかしげ出した。敵のやりかたもさることながら、三浦右衛門のようすにただごとでないものを感じはじめたのである。
　果然、十七日目、虐殺される寸前の三浦右衛門の口から「遠江灘に北条の船が待っている」という声をきいた。——これを備中守が荒唐無稽のこととききかなかったのは、それが充分あり得ることだったからであった。

北の信玄が駿河に兵を入れるや、東の北条がその武田軍に横槍を入れ、そのために信玄が氏真を追う余裕を失っている、という情報は備中も知っている。必ずしも北条が今川家との閨閥を重んじたわけでなく、かつて三浦右衛門が喝破したように――むろん彼が喝破したことを備中は知らなかったが――「まるで裸でころがった豊満の美女駿河に、だれかが飛びつけば、ほかのやつが飛びつく」という想定をほぼ地でいったものであろう。恐るべき信玄に駿河を合併させては、北条としても安閑としてはいられないからである。

では、三浦右衛門が駿河落城の前に姿を消したのは、何とかして北条と、氏真救出のことについて連絡にいっていたのか――と、はじめて納得がいった。あれなら、やりかねぬことだ、と備中にひざを叩かせたのは、奸臣右衛門をにくむ一方、ともかく一国を左右するほどの才物でもあることは、彼も以前から認めていたからだ。

いや――しからば彼は、奸臣どころではないではないか。それにしても、北条の軍船を以て海から主君を救い出そうとは考えたりな。氏真をこの掛川に落とさせたのはそのためであったか。十五日から掛塚に待っているというその船のことをきょう知らせたのは、この際に至ってもなお二日の余裕をとるという才覚をめぐらしたのであろう。鼻を切られた右衛門の声が、このことだけははっきりと聞えたのは彼の一念というしかない。――

「ゆくぞ、掛塚へ！」

はじめて朝比奈備中は起ち、号令した。

「わが君とおんな衆を囲み、一丸となって敵中を突破するのじゃ！」

彼は精強の兵ばかりを選んで一部隊を編成し、一刻もたたないうちに討って出た。しかも真一文字に敵に向うと見せかけて、突如鉾先をかわして西南への路を走った。

掛塚は掛川から六里足らず、天竜川の海に入るところにある河港である。そこへゆくとはまだ事態をつかめなかったが、徳川方は狼狽した。この日、掛川の城兵が出撃するとは思わず、さらに、それが徳川にとっては背後にあたる西方、しかも最も逃げる可能性の少ない海の方へ向うとは予想もしていなかったからだ。

しかし、むろん徳川方はもみにもんで追撃にかかった。元来の兵力がちがう。はじめ混乱していた徳川方も、途中で次第に黒雲のように厚みを増して来た。それに反比例して、逃走する今川軍はみるみるその集団を小さくしていった。

あと三里。――

「掃部どの！」

ちぎれるように、香月の方は呼んでいた。

大塔掃部は夢から醒めたように、その方へ顔をむけた。――彼はいかにして自分がこの一団に加わったのか知らない。そもそも駿府から掛川へ来たことさえ夢心地だ。それ以来、依然、狐につままれたような顔で、うすぼんやりと城に坐っていたのだが。――

「今川一の剛の者といわれたあなたは何をしているのです。打物とってはならぶ者なしと誇っ

たあなたの刀は何のためにあるのですか？」
香月の方は凄艶に叱咤して、彼の頬を平手打ちにした。
「いって、戦いなさい！」
「あっ」
と、さけんで、大塔掃部は槍を抱えたまま駈け出した。彼はようやく夢から醒めたのである。
そうだ、香月の方をお逃がしせねばならぬ。——
本街道でないだけに、路が狭いのがせめてものことであった。殺到する徳川軍を迎え撃って今川無双の大塔掃部の槍は荒れ狂った。彼は実に十数人を突き伏せた。血みどろに悪戦しながら、彼はいくども西南の方をふり返った。
——見られたか、見られておるか、香月の方さま、この大豪大塔掃部の強さを！
しかし、野末にもう今川の一団の影は薄れかかっていた。朱(あけ)に染まって倒れた掃部のしかばねを踏んで、徳川方は追撃した。
あと二里。
「乗康どの！」——
おこよの方は悲鳴をあげた。
「わたしを助けて！　敵を防いで！」
茫乎たる眼から霞がぬぐわれたような顔をしたのは、関ノ戸乗康も同じだ。

彼もまたあの駿府落ちの際、おこよの方から、「わたしは殿から離れてどこぞへ逃げようとは思っておりませぬ」と宣言されたときの衝撃から醒め切ってはいなかったのだ。軍師的才能のある彼は、三浦右衛門の姦忠の論理に最も懐疑を抱いた一人で、少なくともあれほど姦通に感情的であったおこよの方が、ほんとうに「その道の蘊奥(うんのう)を極めることが殿のおよろこびを深くする忠となる」と信じているとは信じ切れなかったのだ。
しかし、事実は事実だ。彼女はあくまで主君と運命を共にして、この掛川へ落ちて来、またいま主君と共に掛塚へ逃れようとしている。主君はともあれ。——
「いって、戦って、関ノ戸乗康！」
命じられて、醒めて、乗康は武者ぶるいした。そうだ。この女人のおいのちは助けなければならぬ。——
関ノ戸乗康は大剣を抜き払って馳せ戻った。もはや彼とともに反転してふせぐ味方の兵もない。街道にただ一人、仁王立ちになった乗康は死物狂いに戦った。彼は軍師的才能のみならず——ちらっと、おれはこんな捨てかまり的な死に方をするのはもったいないな、という考えが閃(ひらめ)いたのも事実だが——刀をとってもすばらしい勇者であった。
乗康もまた十人前後の敵を斃(たお)し、ついに倒れるまで、彼は徳川勢を一人も通さなかった。
あと一里。
「鷺丸どの！」

お旗の方がさけんだ。

「あなたにはお気の毒ですけれど――」

彼女の眼は涙でいっぱいであった。

「あのよいお方である殿さまに無惨な御最期はとげさせないで――お願い――」

その言葉を、手綱鷺丸は純粋に信じた。彼がこれまで逃げて来たのは、最後の防戦者となることを決意してのことであった。

「心得たりっ」

と、彼は絶叫した。

「お旗の方さま！　鷺丸はいつまでも天からお倖せなあなたを見ておりますぞ！　おさらばっ」

彼もまた大刀を抜き払って反転した。心中まで考えていた女を逃がすために、ただそれだけのために。――

鷺丸のみならず、掃部も乗康も、ひたすら女人のために戦った。その意味で、彼らは醒めたと思っていたが、依然として酔っていたのかも知れない。

恋と血潮に酔い、幸福げな笑みさえたたえて血戦し、ついに膾（なます）のようになりつつなお死闘する今川家の一兵の武者ぶりを遠望して、家康はどう感じたか。――

「もはや、追うな」

と、突如として命じた。そして、この意外な指令に波打つ徳川の将兵に、彼は感動的につぶやいた。

「さすがは二百数十年つづいた名家今川じゃ。もののふはおった！　たしかにおった！　氏真どのが持っておられたほどの忠節の侍が、果してわが徳川におるか？」

今川氏真は無事に掛塚から海を越えて伊豆に逃れ去った。今川家亡国の日が到来しても、氏真公のおいのちだけはつつがなきように采配する、と明言した奸臣三浦右衛門の誓いはみごとに果たされたのである。

のみならず、天はこの「善大将」に慈愛の眼をそそがれたのか。――それから五年後死んだ「悪大将」の一人信玄をはじめとし、なおつづく修羅の戦国の世に無数に斃れてゆく群雄をよそに、彼は近江に悠々と閑雲野鶴の人生を送ることを許された。生涯艶聞にも恵まれ、晩年入道して宗誾（そうぎん）と名乗ったが、家康の死に先立つことわずかに二年、その家康が大坂城に対して「悪大将」の極限を発揮しているのを横目で見つつ、慶長十九年十二月二十八日、七十七歳を以て安らかに往生した。

筒なし呆兵衛

一

大草履組（おおぞうりぐみ）の大鳥呆兵衛は、首を斬られることになった。——

取調べれば取調べるほど、これほど大胆で、凶暴で、怪奇で、何よりめちゃくちゃな悪党は前代未聞（みもん）である、と町奉行の朝倉石見守（いわみのかみ）は呆れ返った。

しかも、取調べれば取調べるほど——とはいうけれど、いくら取調べてもなおわからないことは限りなくあるのだ。そもそもその素性さえわからない。この男のやった犯罪、手段、意図などをすべて剔抉（てっけつ）しようと、いかに訊問しても、拷問（ごうもん）にかけても、彼はうす笑いして何もしゃべろうとはしないのだ。

例えば、石抱きにかける。一枚五十キロくらいの石をひざの上に三枚積み、五枚積み、六枚積む。ふつうの人間なら血泡をふいて苦鳴をあげるところを、

「どうだ、もう一枚ふやしてみねえか」

と、嘲笑的にいう。

役人が、かっとしてまた石を持ち出すと、

「その前に、それほどおれの話がききてえなら、少し馬鹿話をしてやるか」

と、いうので、それ白状だと色めきたつのに向って、

「まあ、明日（あした）まで待ってくれ」

と、いう。さて、その明日になると、

「気が変って、しゃべるのが億劫（おっくう）になった。やっぱり石を抱かしてくれ」

「えい、石抱きはまだるい。駿河（するが）問いにかけろ」

役人が怒り狂って、慶長年代駿府奉行彦坂九兵衛が発明したといわれる駿河問い——四肢をうしろでたばねて天井から吊し、重石（おもし）を背中にのせて急回転させる拷問にかけると、さすがに嘔吐して失神する。ところが、その失神から醒めると、

「ああ、ちときつかったなあ」

と、吐息はつくが、依然として白状しようとはしない。——まるで役人をからかっているようだ。

与力にきいてみると、この大盗大鳥呆兵衛は——実のところ盗賊と定義していいのかどうかわからない。大草履組の首領にはちがいないが、とにかくこの世のありとあらゆる悪行をやってのけるのを生甲斐としたかにみえる——この悪党は、以前にも前の町奉行酒井因幡守（いなば）の手でいちど捕えられたことがあるらしい。それがなぜまた世に出てあばれていたかというと、その

当時彼を調べた因幡守も与力も死んでいるのでよくわからないが、とにかくこんな風に奉行所を翻弄しているうちにどこからか——上層部から因幡守に話があって、彼を釈放することになったらしい、ということであったが、そう聞くといよいよこの悪党の素性が妖気を帯びて来る。

「ふむ、きゃつ、またこうして粘っておって助かることを狙っておるな」

と、朝倉石見守は口をへの字にした。

彼は、その昔、江州姉川で浅井長政と連合して織田と戦い、やがて居城越前一乗谷で滅ぼされた戦国の勇将朝倉義景の裔で、彼自身も壮年のころ大坂の役に参陣して敵の兜首をあげたことがある。ことし六十三になるが、名奉行といわれる機略とともに、豪毅の血も一向に衰えてはいなかった。

「斬ってしまえ」

と、彼は決断して、与力に命じた。

「まだきゃつ、おのれの素性も犯した罪のすべても白状しておりませぬが」

「どうせ成敗せずにはおけぬやつ、今さらそんなことを明らかにしたところでどうということもない。——また妙な邪魔が入らぬうちに斬ってしまえ」

果せるかな、明日牢内で斬首するという宣告が伝えられたとき、大鳥呆兵衛は少なからず狼狽したということであった。

その翌日、伝馬町の牢内での斬首の場に、石見守みずから立ち会った。

数十日の牢舎住まいに髪や髯は蓬々とのび、さまざまな拷問にやつれてはいるが、しかし大鳥呆兵衛は男前であった。苦みばしった彫りのふかい顔だちで、さぞ女が放っておくまいと思われた。もっとも彼の方で女を放っておかなかったのが彼の罪の重大部分を占めてはいたのだが。

ただし、そういう印象は前日までのことだ。その日、呆兵衛の額、頰、鼻のあたままで、何やらみみずのごとき糸のごとき赤い筋が這いまわって、ために顔いちめん赤くさえ見えるのに、石見守は首をかしげ、

「これは何じゃ」

と、きいた。

「わかりませぬ。……昨日まで、こんなものは見当りませなんだが」

と、与力もけげんな表情をしている。

そんな問答にそ知らぬ顔で、呆兵衛は——前日、死刑の宣告を受けたときあわてたというが、その日も何やら落着かず、身もだえして、しかしやけになったのか観念したのか、

「き、斬りそこねねえように、肌ぬぎにして下せえ」

と、せりふだけは立派なことをいった。

いう通り、ともあれ獄衣をぐいと下ろすと、憔悴しても隆々たる筋肉の上半身が現われた。が、その肌いちめんにこれまた何やら赤い模様が浮んでいる。はじめ、拷問の傷の痕かと思っ

たが――いや、もうそんな見まちがえはすべくもなく、斬首の役人も朝倉石見守もあっと眼を剝いた。

「東照大権現」

その文字が鮮やかに浮びあがっていたのだ。

一行だけではない。腹にも背中にも両腕にも――大文字、小文字、縦に、横に、ななめに――たしかにそう読める文字が、無数に浮んでいるのであった。よく見れば、顔にみみずみたいに這っている赤い痕も、まさにその文字だ！

「どうもね、手前の顔や背中に書くのは、馴れてても難かしいものでね。読みにくいかも知れねえが、どうぞ気をつけてたどって下せえ、この字を」

と、呆兵衛は変にからだをくねらせながらいった。

「うぬは、朱墨でこれを書いたのか？」

と、石見守は眼をむいたままうめいた。

「これが朱墨かね？」

と、呆兵衛はいった。

「まさか、朱墨や筆が牢内にあるわけはありますめえ」

その通りだ。すぐに石見守たちは、それが決して肌に書いたものでなく、いまみみずみたいにと形容したように、皮膚からふくれあがっていることに気がついた。では、爪でひっかいた

のか――というと、奇怪なことに、たしかに筆で書いたとしか思われない感じもある。

「斬るなら、早く斬って下せえよ、痒くってたまらねえ」

と、呆兵衛は要求した。さてこそ先刻から彼がしきりに身もだえしているのは、全身に疼く痒みのせいであるらしい。

蕁麻疹――という言葉はなかったが、虫や植物や食物のためにこんな現象が起ることは、石見守も知っていた。しかし、むろん、こんな鮮やかな潮紅浮腫、しかもあきらかに人工的な細工による蕁麻疹を彼は見たことがない。

「も、もったいなきおん名を……ぶ、無礼なやつ」

石見守はふるえ声でいった。

「斬れ」

「よく見て、語り草にせい」

と、大鳥呆兵衛は周囲に立ち合っている牢役人たちにさけんで、頸すじをピシャリとたたいた。

「東照大権現さまが斬られるのを」

むろん、頸のそこにもその文字があった！

斬首の役人は刀をふりかぶったまま次第に蒼ざめ、ワナワナとふるえ出した。

「き、斬れませぬ！」

「いったい、ぜんたい」
と、呆兵衛はまわりを見まわした。
「この、護符を貼りつけたようなからだを見ていて、おまえら平気で立っておるつもりか？」
まっさきにのどの奥で妙な声を出して、ガクリと地に膝をついたのは朝倉石見守であった。連動式に役人たちもみなヘタヘタとひざまずいてしまった。
——まことにばかげたことのようであるが、一概に笑うことは出来ない。例えば戦前に頸に天照大神と書いた囚人が出た場合、平気でそこに縄をかける絞頸吏があったか、どうか、いまの中国でも毛沢東と書かれた死刑囚が出たらどうするか。——かたちをかえても、このたぐいの呪文（じゅもん）は現代にだっていっぱいある。
東照大権現この世を去り給いてよりほぼ三十年、その偉風に接した者がみな老いて、みずからこれを神的に伝説化し、かつその伝説に迫真力のあったこと、年代的にまず最高度の時代といっていい。とくにこの朝倉石見守など、いったんはむろん殺さるべき亡家の子であったものを、御神君のおかげで助けられ、世に出で、いま十一代江戸町奉行の要職にある身である。
「——こやつ！」と思いつつも、罪囚呆兵衛に叱咤されたとたん、理性を超えた恐怖で、反射的にそういう姿勢になってしまった。
「前のお奉行にもこんなことがあったから、こう来るはずだと思ったよ」
大鳥呆兵衛はうす笑いして、大あぐらをかいた。もも、ふくらはぎはもとより、足の裏まで

例のみみず腫（ば）れが見えた。
「酒井さんはおれを牢から追い出してくれたが、さて朝倉さんはどうするね？　なに、斬ってもいいんだよ、おれはそれほど生きたいとも思っていねえんだから」
「ま、待ってくれ」
と、朝倉石見守はあぶら汗をながしながら、手をふった。彼はこの罪囚が内部に東照大権現さまとなんらかつながりのある血を持っていて、それが肌に泌（し）み出して来たような惧（おそ）れにとらえられた。
「いや、しばし、お待ち下され！」

二

……さて、おれ、大鳥呆兵衛の夜物語を聴かせよう。
おれの身の上話をするなんてはじめてだが、どうしてそんな気になったのか、自分でもよくわからねえ。むろん、助けられるとたかをくくって横着（おうちゃく）に自慢話をはじめるわけでもなければ、うれしがっておしゃべりをやるわけでもねえ。強いていえば、こう掻（か）いてくれる御苦労に対してのお礼のためでござるかな。
痒い。まったく痒い。この字ぶくれ野郎が消えるまでの痒みといったらたまらねえ。もっと掻いてくれ。休まねえでくれ、お役人。

うれしがっておしゃべりするわけじゃねえといったが、空威張りじゃなくって、ほんとにおれは命が助かったとしても、それほどうれしいとは思っていねえのだよ。自慢話どころか——いや、話のはずみによっては、ふとそんな気味になるかも知れねえが、ほんとうは懺悔話だ。どんな拷問にかけられてもする気のなかったこんな話を、いまふとやる気になったのも、実は死にどきが近づいた虫の知らせというやつかも知れねえぜ。

さて、おれの素性だがな。

今の名は大鳥呆兵衛といっているが、むろん仮の名だ。本名は服部——ま、それは何だっていい。

や、服部ときいて、もしや、という顔をなすったな。そうよ、実は忍び組の服部の一族だ。……といったら、驚くか。それともおれのやったことを思い出して腑に落ちるか。いや、調べたって無駄でござる。わかったところで、おれのおやじは服部の中じゃあ傍流で、しかも忍びの御用が不首尾に終ったというお咎めを受けて、おやじも二人の兄貴もみんな腹を切って死に絶えている。

それでおれがお上に弓ひく男になったといいなさるか。それもあろうが……おれも、どうしてこんな人間になったかと何度か考えたことがあるんだが、そればかりじゃないねえ。そんな末路をとげた家を数え出したら、ほかに限りのねえことは御承知の通りだ。一方じゃあ、昔権現さまに弓ひいたお家の子孫が江戸町奉行になっている例もある。ま、世の中はそういうこと

で成り立ってゆくもんだ。それくらいのことはおれにもわかっている。

どうもこれは、おやじから精魂こめて教え込まれた忍びの術がもとらしい。

その忍びの術が、妙なわざだ。……つまり、先日お見せしたあの肌の字の術でござるがな。どうしてあんなことが出来たかと不思議に思われるだろうが、あれは服部でも、おれの家だけ——おやじが心血ならぬ精血をそそいでしぼり出した術だ。今じゃあ、天下におれ一人しか体得しているやつはいねえでしょう。

自在に、肌に文字を書く、こんなことが忍びに何の役に立つとお考えでござろうか。

はじめおれもそう思ったが、おやじの意向は、つまり人間密書でござった。どこやらに密書をとどける。これはむろん忍びの者にあり得べき重大の御用でござる。それが途中でとっつかまると、たいていは探り出される。衣服、道具、髪から耳、口の中、歯、肛門、女なら女陰にいたるまで、およそ、なみの人間の考え得るところはことごとく調べあげられるのは、これは当然。

そこで、肌に文字なり、図なりを書く。——それではいよいよ見つかってしまうではないかと申されるかも知れぬが、まあおきき下され。……とにかくおやじは、それを墨の筆で書かず、女の津液で書くと、それによって肌に文字が浮びあがるということを考えた。

むろん、だれでも女の愛液によってそんなことが出来るわけはない。それをおやじは、子のおれのからだを実験台にして、そうなるように工夫を重ねたのでござる。

そのころおれはまだ少年であったからよくわからなんだが、何十回女陰を舐めさせられたり、壺にためられた、とろりとした妙な匂いのある汁を呑まされたり、吐気のするような真似をやらされたかわからねえ。

いや、あれは何歳のときであったか、突然、それが「女」だ、「女」のものだ、とわかった時があった。そのとき、はじめておれは吐きに吐き、すると奇なるかな、怪なるかな、そのときからおれのからだに愛液を以て文字を書けば、そのあとがみみずのごとくふくれあがるという現象が発現しはじめた。……つまり、おやじの実験はついに成功したというわけよ。

なに、書く材料が何であろうと、そもそも肌に書く文字が、なんで密書になるというのか。そこが服部組の服部組たるゆえんでな。……おやじははじめからおれの肌に字を書くのではない。それをおれの陰茎に書く。そして女と交合させる。――

その交合のしかたにまた口伝があるが、とにかくその文字が女の中に移るのさ。

え、どんな文字が移っていると思う？　ひらべったい紙にひらべったい判コを押したって、判コが鏡文字になっていなけりゃ紙の方に鏡文字が移ることになる。ましてや女のからだの中だ。のぞいて見たって、切りひらいて見たって誰にも読めるわけはねえが、どんな具合になっているか、このおれさえ何度もそれを見てみたいという欲にとり憑かれたものさ。

さて、その女に、別の男が交合する。すると、こんどはその文字がその男にちゃんとまともになってまた移る。……つまり、女に――服部組なら伊賀のくノ一を使者として何とか敵の中

を抜けさせれば、みごとにめざす目的地で、必要な密書なり報告なりを手渡せる、というわけだなあ。これを称して、おやじは筒飛脚といってたっけ。

ところが、これほどの術をひらいたおやじはどうなったか。いや、その術は何の役に立ったか。そこが、悲劇の第一だなあ。そのころから、それっきり、もうそんなに苦労して密書を届ける用件などない泰平の御代が到来したではないか。そのおやじは、まったくそれを使う機会のないうちに別の失策で、切腹という目に逢ったではござらぬか。……

それはまあよろしい。悲劇の第二にしてかつ張本人は、このおれでござった。どうもおれがぐれたのは、おやじが死んだとか、筒飛脚のわざが無用のものになったとかいうことより、その修行のためにおれが女に対して妙ちきりんな癖がついてしまったからではなかったか、とこのごろ切に切に思う次第でござる。

つまり、交合のしかたでござるがな。

まず、女の津液を以て陰茎に文字を書く。愛液はそれ以前に採る法もござるし、また壺に溜めてもござる。これを挿し入れるのは世の常として、さて文字を移すのには摩擦しては相ならんのじゃ。ただ、じっとして、陰茎の縮むを待つ。押したら、じっとしていなくては――こすれば字もかすれてしまうこと判コを押すと同様さ。また精汁を混ぜては効き目がなくなるのだが、こういうわけだから、もともと精汁など放出するわけもない。……むろん、その字を受ける第二の男も、同じようにしなくてはならねえ。

とにかく、これは辛(つら)いことでござるなあ。この空漠さは何にたとえるべきでござろうかなあ。なに、いつの交合にも筒飛脚を送るわけではあるまいが、といわれるかも知れぬ。その通りじゃが、そこが悲劇と申すゆえんで、それはおれの若いころおやじにさせられた恐ろしい修行を知らぬ者のせりふでござる。何も文字など書かなくても、とにかく、おれはそうなってしまったのだ。

では、そうまでして空漠たる交合をしなくてもよいではないか、という意見に対しては、ごもっとも、と答えるしかねえ。まったくおれもそう思う。だいいち女に対しては、あの少年時代はじめて吐気をおぼえたときの感じがまだ尾をひいているところがある。だから、いまでも、手ぶらで女に向うと、飛脚の足の方もぶらぶらなんだ。それでいて、美しい女を見ると、やっぱり交合してえのだから、人間わけがわからねえものだなあ。

それじゃあ、どうしてやるのかって？

そのときは飛脚に文(ふみ)を持たせるのさ。つまり例によって字を書くのさ。するとそこが恐ろしく熱くなって痒くなって、隆々とふくれあがりふしくれ立つ。すなわち飛脚は用もないのに猛然と駆け出すのでござるよ。が、ゆきつく途中で、火の中ですくんで、足が萎えてしまうのは今申した通り。――もっとも、字を移しおえたとたん、こちらの文字といっしょに痒みも消えてくれるのではござるが。

しかし、これじゃあ、しょせん女は持てないねえ。

ぐれる前に、惚れた女が三人ある。自分でいうのも可笑(おか)しいが、しゃッ面(つら)だけは女を吸い寄せる何かがあるとみえて、右の法でいたした女は数え切れねえが、みんな一度こっきりだ。こっちが惚れた女は、三人しかいねえ。

その三人の女に、結句、みんな振られた。……当りめえよねえ。

とは、そのころは思わなかった。歯ぎしりして、血の涙をながしてもがいたというのも大袈裟(げさ)じゃあねえが、それでもそのとき腰が石臼みてえになって動かねえんだ。……惚れた女に振られて、それで盗賊になるなんて可笑しいようだが、やっぱり今でも可笑しくねえ。こっちの方も当りめえと思う。

家もねえ、出世の見込みもねえ、女も持てねえ。要するにこの世に何の愉(たの)しみもねえ。これじゃぐれねえ方が可笑しい。おれを盗賊にした元凶は筒飛脚よ。そいつがおれ自身に祟(たた)ってしまった。人間は自分の能に祟られるってえことがあるんだなあ。……

三

ところで、おれはいま世の中に何の愉しみもねえといったが、一つ愉しみを見つけ出した。

それは、いちどでもおれと交合した女が、だな。痒がることよ、その文字が消えるまで。

むろん放っておいても、日さえたちゃあだんだん消えてはゆくが、それまでの痒みといったらたまらねえらしい。らしいじゃあねえ。おれもその通りなんだから、その痒みの大変なこと

はよくわかる。やがて、交合すればそれはとれてしまうのだが、それを知る前に、とにかく痒くて、疼いて、掻きむしってもらわなくっちゃ、我慢が出来ねえ、つまり誰でもいいからせめて交合してもらいたいというありさまになることは、これまたおれとおんなじだ。

さ、そこが面白くなったのよ。女がそのありさまになり果てるのが。

おれが最初に——名をいえばみんな知っている朱子学の大学者の家に忍び込んだのは、盗賊をやるためではなく、そこの——なんでも安公卿の家から嫁に来たという、おすましの、しかし面は人形みてえにととのった女房を犯すためでござった。その前におれがおのれに筒飛脚をほどこしたことはいうまでもねえ。

ああ、あの晩、おれの耳におやじの遺言がぶつぶつと聞えていたことを思い出すなあ。……

「そもそも忍法は、正心を第一に置かざればほぼ盗賊の術にちかし。もし天道の恐るべきを知らず、無道の者の手並のみ熟して悪逆をなさば、ひっきょう盗賊の術を開くことにもなりなん。ゆえに忠義の道を先とし……」

しかし、それでも、この面白さにおれは勝てなかった。

その奥方さまが腰をうねらせ出したのはいうまでもねえが——そんな姿を天井裏から眺めているのはおれのお手のものだ——そのうち、おれはいよいよ面白いことを見つけ出した。

その翌日、こんどはそこの主人が腰をふり出したのさ。字といっしょに痒みが移ったのだ。もっとも主人は密書を受取る忍者ではねえから、もう文字のかたちをなしてはいねえ。だいい

ち最初のおれの飛脚が文字じゃあなくってみみずの踊りみてえなものだったから、学者のそれはいよいよわけのわからねえものになったのは当りめえだが、痒みだけは変りはねえ。

面白えというのはね、そのまた翌日、こんどは河豚みてえな面をした下女が腰をふり出したことよ。これでおれはその大学者先生が、そんなにお澄ましの女房を京から迎えながら、一方でその下女とも通じていることを知った。……

ここで断わっておくが、その字や痒みは、無限に同じようにつながってゆくものではねえ。それはだんだん、どちらも薄れてゆくが、二代目、三代目くらいじゃあ、まだなかなかのものだ。とくに女のほうの痒み、こいつァからだの内側のことだからその悩ましいこと、思いやられるでござる喃。

あっちこっち、これをやって回っていると、とんでもねえ人がとんでもねえ方向へ飛火させてゆくのがわかって、おれはげらげら笑ったが、一方じゃあ腹も立った。まったく世の中のやつら、澄ました顔で往来を歩いていたり、道を説いたり、大紋烏帽子でしかつめらしく江戸城へ登城したりしながら、人の見ていねえところじゃあ何をやっているのかわからねえ。ああ、むろん大名にも筒飛脚を飛ばせたさ。

さて、この面白さに釣られてあちこち忍び込んで回っているうち、毒食わば皿までと物を盗ってゆくようになる。見つかって人を殺したこともある。——つまり、おやじのいちばん戒めた本物の盗賊にまんまとなってしまったのよ。

そのうちに手下が出来、それがふえ、とうとう世に大草履組といわれる盗賊組が出来上ってしまったわけさ。いまは御奉行所の方でも知っていなさるように、仲間のしるしにみな足から一寸もはみ出す大草履をはかせたからだが、それというのも首領のおれにもつかめねえほど手下がふえたからでござる。

盗賊、火付、強姦、殺戮（さつりく）——ありとあらゆる悪行をやったのは大草履組の総勢だが、むろん、その点おれも手下に劣りはしねえから、罪はぜんぶおれが引受ける。

と、いったところで、どっちにしたってとどのつまり、首を斬ることしか罰はねえのだから気楽なものでござるがな。しかし、おれのような強盗強姦の悪党も、例えばその昔権現さまに一泡吹かせた石田三成のような大将も、同じ斬首の刑なんだから、人間、知恵がねえというか、世の中は不公平だと思うねえ。あはは。

ともあれ、手下のことだけは金輪際しゃべれねえ。首を斬られるのはいいが、いくら拷問にかけたって、そいつだけは白状はしねえから、そのつもりでおって下せえよ。

ただね、手下と同じことをやった、とはいったが、おれが手下と紙一重ちがっていたところは、弱いものいじめはしなかったつもりでいたことよ。むろんやったことの飛ばっちりはどこへ飛ぶか見当もつかねえし、だいいち手下の悪行はやりたい放題にさせていたのだから同じことだが、しかし気持としては、この世で威張っているやつ、強がっているやつ、学のありげなもったいぶった面をしているやつばかりをからかってやるつもりでいた。

あんなことをやって、あれでからかうつもりかといわれるか。うん、いかにも騎虎の勢いでえらい騒ぎをひき起した数々は御承知の通りだが、おれとしてはただいやがらせのつもりであったのでござる。

いやがらせ。

強いやつ、または強いやつの虎の威をかりているやつが相手だ、という条件さえつければ、世の中にこれほど面白えことはねえ。

ふむ、これをやってこそ、おれが盗賊に身を堕（おと）した甲斐（かい）がある、と思ったくらいでござるがな。しかし、いまつらつら考えてみると、こりゃああとでつけた理屈で、やっぱり例の空漠たる交合しか出来ねえ物足りなさから発した癇癪（かんしゃく）ないしへそ曲りであったような気もするが、そのあたり自分でもよくわからなくって、もどかしいや。

おれは、大名どころか、御公儀のおえら方の首根ッこを何人か押えている、といったらさぞ眼をむきなさるでござろうが、いつぞや前のお奉行につかまったとき、おれを放（はな）すように依頼があったのはその筋だといったら、少しはお信じ下さるか。むろん、例の筒飛脚の余徳でござるな。

しかし、その方の白状も、まあよそう。まだ、その時でない。

それより別の——もうさしさわりのねえ、お上も手の出されようのねえ向きの、おれのいやがらせ物語をしようと思うんだが、あ、痒い、痒い。そこの尻のわれめあたりの東照大権現が

いちばん痒がらせなさる。どうぞ血の出るほど掻いて下され。……

いや、もうさしさわりがねえ物語といったって、これから先さしさわりが出来て来るかも知れねえ。そもそもおれが、さしさわりのねえことをするわけがねえ。しかし、手のつけようがねえだろうというのはほんとうだ。どっちへ聞き合せても、知らぬ存ぜぬとつっぱねられて、町奉行など、鼻であしらわれる相手だ。

四

どっちへもといったのは、それが御老中の松平伊豆守さまと牛込榎坂に道場を構える由比張孔堂正雪先生にまつわる話だからだが、どうだ、名をきいて驚いたろう。ちょっと手がつけられねえだろう。

それにおれが手をつけて、からかったことがある。

何をしたって？　その話をしても、信じねえかも知れねえ。そいつは二、三年前のことだが、どっちも伏せて、世間じゃあ何も知らず、それ、いまいったように御両家とも知らぬ存ぜぬでとぼけるにきまっている。だから、この話を信じるか信じねえかはそっちの勝手だが、まあ、こっちはしゃべるつもりでしゃべり出したんだから、聞く気があったら聞いてくれ。

榎坂の張孔堂の大道場、門弟三千とか称し、へたな大名も及ばねえ御威勢だなあ。一介の浪人者から成り上って、大した凄腕だ。

世間じゃあ山師といっているようだな。なるほど門前に「天文地理十能六芸武芸十八般指南」という大看板をかかげたところ、そう見えるふしもござる。が、一般では、それもいまとなっては万能人の声価をいよいよ高めているようだが、問題は彼がここまで成り上るまでで。――はじめから山師的人物と見られておる瘦浪人に、ああまで人が師礼をとって集まるわけはねえ。

やっぱり、正雪先生には何か力があるのだな。といって、十能六芸十八般など、これは法螺にきまっている。

その力は、何かってえとね。――正義でござるよ。正雪先生の鼓吹する正義に浪人たちが集まって来たのがはじまりでござるよ。

ほんのおやじのころまでは、百姓の子から天下取りにまでなった太閤さまのような例があるんだが、このごろは百姓はおろか侍でも、いったん扶持を離れたらもう金輪際仕官の口はねえ。その百姓だって、百姓に生れたら一生百姓の鋳型にはめられて身動きもつかねえ。そういう世の中の仕組みがだんだんかたまりつつあるのに気づいて、これじゃ未来永劫浮ばれん、と居ても立ってもいられなくなった浪人どもがよ。

封建はいかん、世襲はいかん。ほんとうに能のある人間が支配する世の中にしろ。――あとは、士農工商みな平等だ。これこそまことの正義である。

正雪先生はこう説法をはじめられたのでござるよ。なに、いまでは大名や旗本の門弟に囲ま

れて、何くわぬ顔をして、悠然と坐ってござるから、だれも知らねえが、正雪先生の最初の説はこの通りで、いまでも正雪先生をめぐる十人余の高弟は、ないしょでこの考えを、これはと思う門弟に当りをつけて吹き込みつつある。——

こういう内情を少々探り出したものだから、おれのいやがらせ魂がむずむずと動いた。

山師の噂だけきいているうちは、おれも正雪先生が好きだったんだが。——本来なら、おれなんかもいまの世の仕組みからはね出された口で、そうきくとこっちも大いに共鳴しそうなものだが、それよりとにかく正義の旗ってやつが大きらいでござってね。

正義ってのはまずヤキモチの変形か、よくいって無意識的な損得勘定が大半なものでござるよ。——と、えらそうにいうが、おれのいやがらせも、もとはといえばヤキモチの一種に過ぎねえかも知れねえってことは先刻申した通り。

で、おれは浪人に化けて、半年ほど張孔堂に弟子入りしたことがござる。そして、案の定、正雪先生はこのごろの道場の繁栄にかつての正義の論がどこやら緩慢になって、もう世の中はいまの仕組みのままでいいような心境になりかけ、それを金井半兵衛とか金井善兵衛とかいう若手の硬派が、

「先生、ぬるま湯にいつまでも浸って満足しておるわけには参りませんぞ」

と、しょっちゅう気合をいれておることを知り申した。これに対して正雪先生がいちばんよく口にするのは、

「急（せ）いてはならぬ。松平豆州（ずしゅう）の眼の玉の黒いうちは」

と、いう言葉でござった。

一方でおれは、大草履組の頭（かしら）として、手下をつれて夜な夜な稼ぎに出かけておった。おれみずから率（ひき）いているときは、必ず大身（たいしん）の侍か、金持か、美人のいる家で。——美人というのは、この世で強者の部類に入る、というのがおれの信条でござってな。

さてその中に、松平伊豆守どのの御家来にて——いや、名はまだ申すまい。かりに伊呂波匂（にお）右衛門（えもん）どのと申しておこう。この方が近来湯女（ゆな）あがりの美女を身請けしてひそかに妾宅を構えられたという情報が入り、おかたい伊豆守どのの御家中では珍しい。はて、これを犯したらあとどういうことになるかと、一夜押入って、おれが犯してみた。例の筒飛脚を使ってな。

すると、実に仰天すべきことが発生いたした。

痒（かゆ）くなり出したのは匂右衛門どのではなく、それから十日もたたぬうちに七人の若侍衆が——おかたいはずの伊豆守どのの御家中がいっせいに痒くなり出したのでござる。あとで知ったところによると、まことに迂闊な話で、その当時伊呂波匂右衛門どのは国元の川越へ御出張中であったそうで、匂右衛門どのより先に文（ふみ）をいただいてしまっただれかがあることはたしかでござるが、それが七人に上るとは。——

筒飛脚の原理によれば字ぶくれも痒みも男から女へ、女から男へと一筋の糸のごとくにつながるのが本来のかたちでござるが、それは女からの受け手がじっと動かない忍びの者であって

のこと、何も心得のない素人衆がむやみやたらにこすり回せばむろんこの通りには参らない。おそらく痒みをもらった最初の男が友人でもつれて来て、女に詰問しているうちにまた交合する破目になり、ふたたび痒みにもだえる女に挑発されて複数の友人がこれと交合しているうちに、文字も痒みもめちゃめちゃに飛びちがい、拡散し、定着してしまったものに相違ねえ。

　その中に張孔堂出入りの一人がおり申した。これは伊豆守さまからいれられた密偵ともいうべき侍であるとおれは見ぬいた。

　この男におれは近づいて、

「あなたさまは……まことにぶしつけでござりまするが、下の病を患っておられるのではござりませぬか？」

　と、いった。

「下の病？」

「このごろ江戸でも、一物が痒いはおろか、やがてからだじゅうにぶつぶつや赤銅色の環が出来て膿み腐れ、ついには発狂する病がはやっておるそうで——何でもその発生源は湯女の由でござるが」

　相手は真っ蒼になりやがった。

「倖いに先生がおられます」

　と、おれはもっともらしくささやいた。

「看板の十能六芸の中には医学も入っております。特に先生は下の病には御造詣深いと承る。——」

　そのすぐあとでおれは張孔堂先生のところへゆき、松平伊豆守さま御家来のなにがしが陰部掻痒症に悩んでおり、これを癒してやるのを機として、その家来を薬籠中のものになされては如何、といった。

「あれはただの弟子ではなく、伊豆どのから命ぜられて当道場を探りに入って来ておるものでござりまするぞ」

「なに？」

「この際、虎児をとらえた方が虎穴を得る法ではござりますまいか」

「……う、うぬはなぜ、そんなことを。——」

「実は、金井半兵衛どのでありましたか、善兵衛どのでありましたか、いつぞやちらと承ったことがありまして」

　このごろ半兵衛、善兵衛が自分にも計らず運動していることを知っている正雪先生は、しばしものものしく考え込み、

「わしは、下の病の治療法など知らぬぞ。……」

　と、申された。

　そこでおれは、それなら自分が知っている。それは一人の女人にその男を交合させその病を

移させることである。ただし、自分の見るところではただ痒いだけの病で、放っておいても漸次治癒するものと思われるが、機会はうまくつかんだ方がよいだろう。右のごとき次第ゆえ、何とぞ先生の最も御信用篤き御女性をこの人柱に捧げられたい。もしそれにて効果がなかったら、拙者この首を進呈いたす——と、いった。

これに対して正雪先生が数語あったことはいうまでもないが、結果はついにうなずいて、おれのいう通りになったとだけいっておこう。正雪先生がいちばんこわがっていたのが、松平伊豆守さまであるとは先刻申した通りでござる。

なんと正雪先生は——と、驚くことはない。はじめからそうなるであろうとおれは見込んでいたのだが、当時抱えていた三人の御愛妾のうちの一人をこの役に当てたではないか！　もう一つ、これも予期していた通り、問題の弟子はあと六人の仲間も治療につれてやって来た！

これを機会に、松平伊豆守の七人の若い家臣は、心身ともに張孔堂の腹心に参入してしまうことに相成ったが、気の毒なのはその御愛妾で、七人にちらかっていた痒みをまた一人に集めてしまったことになる。と思っていたら、可笑しいことに——そういう役に当てられるくらいだから、いちばん寵の薄いお妾さまであったろうに——しばらくすると、正雪先生がむやみやたらに痒がり出した。何しろ痒がっているときの女人の魅力は、鬼神もとろけるくらいだからなあ。

「これ、何とかならぬか、この痒み。……」

「それは、御交合のとき、じいっと動かれず、ただ萎えられるのをお待ち下され。それっきり当分はその御女性とのおん交わりを断たれるように。……」

答えながらおれは、総髪、紫の羽織紐、でっぷりと重々しい正雪先生が、おれとおんなじ恰好でじっと女に海鼠みたいに乗っかって動かねえ裸の姿を想像して、あやうく吹き出すところであったよ。

このときに至って、正雪先生は改めておれを変な眼で見た。

「その方は、しかし何者じゃ？　かかる病にそれほど詳しいとは。——」

「あはは」

と、おれははじめて笑った。

「おれは、巷にいう大草履組の頭、大鳥呆兵衛というもんだ！」

「な、なんじゃと？」

「しかし、心配しなさるな、正雪先生、これ以上おまえさんが何をやろうとおれの知ったことじゃあねえ。ただ、からかってみただけだよ。——」

それっきり、今に至るまでおれは張孔堂に足踏みしたことはねえ。

五

榎坂の道場を去るちょっと前にね、正雪先生がへんに深刻な顔で妙なことをつぶやいたこと

がある。

「わしは、ついに後世の知己を待つよりほかはないか？」

どういう意味でそんなことを述懐したのかわからねえ。ただ世間で山師といわれているのを気に病んだのか、それとも何やら、やっぱり大変なことを企んでいて、しかもそれがうまくゆきそうにないことを案じてのことか、それともえらそうな顔をしたがる男によくあるもったいぶりか。

これに対して、おれがけろりとして、

「人生、やりそこねた馬鹿のせりふはいつもそれだが、これはしたり、張孔堂先生ともあろうお方がその仲間でおわそうとは。……なに、後世も、今も、人の世は同じでござるよ」

と、いったら、暗い火の燃えるような眼でぎろっとにらんだっけが、おれのいやがらせが思いの外に応えたらしいね。さあ、奴さん、何をやるつもりか。まだ御盛業中らしいが、御健闘を祈る。

さて、松平伊豆守どのの方の話でござるが喃。

さすがは炯眼、伊豆守どのは右の話をどこまでお知りなされたか、その後一年もたたぬうちに、右の七人の若侍を国元の川越にお返しなされた。七人のみならず、例の伊呂波匂右衛門どのも。

ただし、はじめは身分はそのまま、匂右衛門どのは藩の重役になされての。――匂右衛門ど

のは内心大いに怖れて、例の湯女あがりの妾は江戸でおひまをつかわされた。これはまず大過なかったが、七人の若侍の方は変った。――

「世襲はいかん」

「百姓町人からの生かさず殺さずの収奪はいかん」

「忠節の論理は、奴隷の道徳である」

と、国元に追い返されても意気軒昂、これはおそらく張孔堂で金井らに吹き込まれたのでござろう。金井らは、支配者の論理と被支配者の論理はちがう。何も被支配者が支配者の論理に従う必要はない、と難しいことを申しておったからの。

そこにお奉行さまも、おれを穴のあくほどにらんでおいでなさるが、支配者の論理ってえのはよく御存知でがしょう。しかし被支配者の論理ってのは御存知ねえでしょう。それをしゃべったら、それもきいて下さるか。なに、そんなものはききたくねえ？　それがすなわち支配者の論理でござるて。いや、おれもしゃべる気はねえ。しゃべったって、無駄だ。だからおれは大草履組を率いて、いやがらせの限りをつくして、あばれたんだ。これがすなわち被支配者の論理でござる。

金井らは何か下心あって吹き込んだのかも知れねえが、それをどう受止めたか、七人の若侍は存外本気でござってな、そのうち伊呂波匂右衛門どのの旧悪をあげ、弾劾運動をはじめた。

――

これに対して伊豆守さまは、ふつう被支配者の論理に一番通じているお方のように見えるんだが、やっぱり大支配者だなあ。断乎、七人を追放なされた。

ところが、七人は川越藩を出てゆかねえ。それ以来、蓆旗をかかげてあちらの村、こちらの村に出没して騒ぎたてる。彼らの論理を百姓たちに説いておるのでござる。これを匂右衛門どのが大将となって追いまわしたわけだが、きゃつら、なかなかつかまらねえ。逃げまわっておるのに、たっぷり軍資金を持っているらしい。

——実は、その軍資金をやっていたのはおれだ。そいつを川越領のあちこちに埋めさせて、ときどきその埋め場所を知らせてやっておったのでござる。その知らせ役がだれだとおぼしめす。……例の匂右衛門の姿を以てする筒飛脚。

え、何、本気で七人をひいきにしていたのじゃあねえぜ。ただ、大秀才で大官僚たる松平伊豆守どのへのいやがらせだよ。——

この分じゃ、万一天下に何か起っても、かんじんの名君伊豆どのが心おきなく鎮圧の兵を出すこともおぼつかねえことになりゃしねえか——と、いちじはなりゆきを愉しみにしていたが、そのおれがつかまってしまったのだから、万事休すだ。

川越の七人はどうなったか。牢に入ってからきいた噂によると、これもつかまったとか斬られたとかきいたが、さてどうなったことでござるか喃。……

さて、おれがつかまったいきさつについても筒飛脚の因縁話があるんだが、それをしゃべる

前に、まず水を——いや、酒を一杯のませてくれ。それから、痒い。もっと掻け。一人じゃ足りねえ、五、六人で掻いてくれ。……

六

どこまでが、うそか、まことか。——どっちにしても人を食っているにちがいない。

無頼の言葉とも侍の言葉ともつかぬ長広舌をやって、大鳥呆兵衛は両足をひろげて寝そべった。その威風に——必ずしもその全身を彩る東照大権現の御威光ばかりでなく——この不敵怪異な大凶賊自身の持つ迫力に打たれて、五、六人の役人たちが奴隷のごとくそのからだにとりついて、あちこち掻きはじめた。

「うう。……」

呆兵衛は眼を半眼にして心地よげなうなり声をたてた。

そのとたん、彼の股間から、ぽろりと何やら落ちた。毛を数十本たばねた小さな筆の穂先のようなものであった。

「それは何じゃ？」

という町奉行朝倉石見守の声に、呆兵衛は眼をあけて、ふいにはね起きようとした。

「とり押えろ、手足を動かすな！」

と、石見守は叱咤し、役人たちはあわててそのからだにしがみついた。もっとも手は縛られ

たままだ。

石見守は、いま落ちたものを拾いあげようとした。

「よしなされ、手が腫れる——かも知れねえ」

と、呆兵衛はいった。

「それがおれの大権現さまを書いた筆だ。……女の津液をしみこませた筆——それも女の陰毛よ。唾でしめして書けば、肌に字が浮びあがる。……はて、取れぬはずじゃったが」

と、彼はうす笑いしていった。

それも彼の凄まじい陰毛の中にそれを混ぜて貼りつけてあったのである。彼の話はいつわりではなかったのだ！

じいっと、その股間に落ちた妖物に視線を落していた朝倉石見守が、ふいにまた近寄り、しゃがみこんだ。

小さな光がひらめくと、血しぶきが立った。

「うわっ」

大鳥呆兵衛はそり返った。石見守は小刀を以て呆兵衛の肉体の一部を断り落していたのである。

「き、斬ったな、東照大権現を。——」

「さすが背徳無残のうぬも、護符にするだけあって、陰茎だけは肌文字を書いておらなん

だ！」

と、石見守はさけんだ。

大鳥呆兵衛は無念のはがみと苦悶にのたうちまわったが、このとき怪異がおこった。彼の全身を彩る無数の東照大権現の文字が、紅が流れ溶けて薄れるように、みるみるすうっと消えてしまったのである。アレルギー現象の根源が流失してしまったからであろうか。

「負けた！」

と、彼はうめいた。

それから、股間からなお血を流しながら、仰向けになったまま、微笑していった。

「最後の頼みがある、その筒飛脚の筆をおれの口に入れてくれ。これだけは本人といっしょに冥土へ道づれにしてやろう」

七

大盗大鳥呆兵衛は、しかし男根を断られただけでは死ななかった。手当を受け、数日後、裸馬に乗せられて、鈴ケ森へ曳かれていった。

沿道は見物の人の波であった。それを不敵な眼で馬上から見下ろしていた呆兵衛は、ふいに、

「冥途への土産を頂戴いたしとうござる」

と、大声でさけんだ。そして或るところに眼をそそいでいった。

「末期(まつご)の水を一杯飲まして下せえ。——あのお女中に」
刑場へ曳かれてゆく囚人は、途中で一度は馬をとめて、最後の願いをきいてもらえる。もっとも最後の願いといっても、水を飲みたいとか、顔をふいてもらいたいとか、あの店の団子(だんご)を一串食わせてもらいたいとかいったたぐいのことだ。その要求は役人に対してだけでなく、沿道の見物人に対してなされることもあったが、それもたいていのことはきいてやる不文律があった。
が、呆兵衛が名指したのは——そこの茶屋の前に立っている美しい娘であった。実にこの世のものとも思われない美しさに加えて、どうやら身分は低いが大奥にでも仕える少女であるらしく思われて、役人たちは首を横にふった。
しかし、そのとき少女は茶屋に入って、水を柄杓(ひしゃく)にいれてすぐに出て来た。
「お飲み」
馬上と地上と——柄杓でつながろうとした二つの顔のうち、呆兵衛の顔がぐうっと下に化物じみてのびた。その口に筆の穂のようなものがつき出していた。あっというまもなく、その尖端が少女の額にふれ、彼女は悲鳴をあげてとびずさった。
「わははははは!」
と、呆兵衛は、はじめてその筆をのみこんで哄笑した。
「おれの呪いによって、その美しい額には赤い痣(あざ)が残るだろう。——おれの最後のいやがらせ

だ! 木ッ端役人、馬を曳け!」
この日、ついに磔刑(はりつけ)に処せられた大盗大鳥呆兵衛は、自分が生涯の最後に、その路傍の少女に大変な功徳(くどく)を施したことを——その出身は八百屋の娘でいまは大奥に婢(はしため)として仕えるお玉という少女が、雪のような額にポッチリと浮んで消えぬ赤いほくろのために、まもなく将軍家のお眼にとまり、そのたぐいない蠱惑(こわく)によって、翌年、のちの五代将軍を生むことになろうとは、夢にも知らなかった。

紅閨（こうけい）の神方医（しんぽうい）

一

のちになって万久里小路馬竿斎(まくりこうじばかんさい)のその事件をきいたとき、彼の幼時を知る者は、「なるほど梅檀(せんだん)は双葉より芳し(かんばし)、というが。——」と長嘆したが、さらに、

「いや、やっぱりあの父親の子だ」と嘆息した者もあったというから、まずその父親の話からはじめよう。

彼の父親は高橋玄秀といって、八丁堀に住んでいた元御番医師であった。御番医師というのは江戸城お出入りの医者のことだが、のちにこの役は御免こうむって、町医者になった。

あるとき、ある町で、一人の娘が欝病にかかって、いろいろ医者にかけたが癒(なお)らない。そこにこの玄秀が何回か呼ばれて診察するうち、娘が笑い出した。彼がいってしまうとまた憂鬱そうになるけれど、とにかく玄秀が来るとくっくっと笑う。べつに玄秀は若くもないし、特にユーモラスな容貌をしているわけでもない。でっぷり肥って、むしろこわい顔をした初老の男である。何にせよ、家族には、まるで梅雨(つゆ)どきに太陽を見るような思いがし、彼の往診は欠かせ

ないものになった。

とうとうある日、娘の父親がその秘法をきいた。玄秀は大いにもったいぶってしぶったが、あまり執拗(しつよう)にきかれるのでついにその術をもらした。

「それはでござるな。わしが娘御の脈をとるとき、片膝を立てて寄ります。そうして、わざとふんどしまでのぞかせる。ときには、ちょいちょい、はみ出させて見せる。それを見て噴き出さぬ娘御はまあ世の中にない」

娘の父親は唖然とするとともに、そんなことなら何もわざわざ医者を呼ぶことはない、自分で充分つとまる、と考えて、ある日、その通りにやった。すると娘は「あれ、父(とう)さまが……」とさけんだきり、気絶してしまった。あわててまた玄秀先生を呼びにやり、手当を受けたのち、父親が頭をかきかき騒動の原因を白状した。

「先生の御処方通り……しかも、もっと効き目があるように、ふんどしもつけないでやって見たところ娘は目をまわしてしまいました」

玄秀はにがり切っていった。

「薬には分量というものがござるでな」

三田村鳶魚(えんぎょ)は「江戸生活のうらおもて」という著書で、「これはのちに落語に取入れられたが、実際にあった話で嘘ではない」といっているが、作者は落語に明るくないので、何という落語になっているのか、そのうちどなたかにお教え願いたいと思っている。

この通りまるで落語のような実話だが、高橋玄秀という医者が人をくった医者であったことにまちがいはない。

この玄秀が、自分の伜の馬之助だけには匙(さじ)を投げた。

つまり、不良少年なのだ。それは父親の玄秀も、ふりかえれば幼年時餓鬼大将だったおぼえもあるから、おとなしくないのはかまわない。しかし、おれは、と玄秀は何度も説教した。十五、六になったころは医者の門人になって、ともかく修行だけは熱心にした。……ところが馬之助は、町の手習い師匠のところへもろくにゆかない。折檻して無理に通わせても、そのうち向うから、ほかの子に悪影響があると断わられて来る始末だ。

それでは全然馬鹿かというと、親の欲目かも知れないが、そうとも思えない。それどころか、頭のよくまわること、第三者から見ると可愛気もないほどで、馬之助が仲間を――ずっと年上の洟垂(はなた)れどもをあごで使っているのはその智慧のためらしい。それがいわゆる悪智慧としかいいようのないものだから、甚(はなは)だこまる。

例えば、駄菓子屋の菓子に鼠のくそが入っていたと文句をつけて、そのつぐないに何十個かまきあげる。あとでこのからくりがばれてとっちめられると、近所の子供ぜんぶに不買同盟を命令して、店の婆さんに悲鳴をあげさせる。独楽(こま)回し、凧揚げ、何でも賭(かけ)にして、その賭にはほとんどすべて子供らしくないイカサマを使う、といったたぐいだ。

「ああ、その智慧をほかのことに回してくれたらのう」

父親は嘆いた。

「どこに回す」

伜は鼻くそをほじりながらきく。

「学問にじゃ」

「学問にもインチキがきくかい」

そして、馬之助はニヤニヤ笑った。

「昔、おやじが魔羅を見せて、ふさぎの虫にとりつかれたお嬢さんをなおしたっていうのは、どうもインチキくさいな」

「馬鹿、あれは特別だ。ほかのことにはきかん。馬之助、いったいおまえは何になるつもりじゃ。世の中をあまりなめておると、それ相応のしっぺ返しをくって首でも吊るよりほかはなくなるぞ」

「いや、おれはこの流儀でゆくつもりなんだ」

「なに？」

「おやじ、心配するな。前途は洋々たるものだよ」

名前みたいに長い顔で――まさか、そんなつもりでつけたのではなかったが――人を小馬鹿にしたように笑っている馬之助を見ると、わが伜ながら玄秀はうす気味悪くなった。

二

まあ、右のたぐいの話にとどまるならよろしい。そのほかにこの馬之助に、何とも困る悪癖があった。女性に対する異常な興味だが、それが十以前からだというのだから悪癖といってよかろう。

そのころから、近所の可愛い女の子を呼んで、裸にしていろいろ調べるということをよくやった。いわゆる、「お医者さまごっこ」だが——それはのちに明治になって大々的に西洋医学が伝わってから名づけられた子供の遊びで——ろくに打診も聴診もやらないこの当時、これを「お医者さまごっこ」と呼んだかどうかは疑問だが、もともと医者のまねというより子供の本能的好奇心に発するいたずらだから、このような行為をする悪童は、いつの世にも少なくなかったであろう。

しかし、それにしても馬之助のこんな行為は頻繁過ぎた。のみならず——十を過ぎたころから、さらにたちが悪くなった。

往来をゆく女性のうしろに、ト、ト、トと走ってゆくと、いきなりうしろからその裾をまくって、一目散に逃げ去るのである。子供だからまくり易く、しかもまくるとちょうどお尻が眼の前に来る。当時、女性はむろんパンティなどはかず、腰巻ごめにまくるとお尻はまる出しになるのだから、これは見物(みもの)にちがいない。

「この餓鬼、何しくさる」

いくどかとっつかまって、ひっぱたかれると、こんどはほかの子供を買収してこの冒険を行わせるようになった。自分は見物しているだけで、決死隊がつかまっても決して煽動の張本人を白状させせない掟を作っているところがにくい。

とはいえ、子供の親たちにはこのことがわからないではない。その方からの苦情はいよいよ烈しくなるし——そもそも、十六になっても、十七になっても、この癖だけはやまないのだから、父の玄秀も、やはりこの息子の異常さはほんものではないかと怖れをなしはじめた。

殴る、蹴る、縛りつける、はては座敷牢にいれる、などという騒ぎを数年繰返したのち。

——ついに、

「長崎へゆけ」

と、玄秀はいい出した。

「長崎のどこへ？」

「伊東玄朴どのに紹介状を書いてもらい、長崎へいって然るべき医者の門弟となれ」

「医者？　オランダ医者ですか」

オランダ医者とは、オランダ医学をやる医者のことだ。——まだおやじは、おれを医者にすることにみれんを持っているのか、しかも、お上から白い眼で見られているオランダ医者に？

と馬之助は面くらった顔をしたが、すぐに父親のウンザリした表情に、

——ははあ、おやじの狙いは、おれを長崎くんだりまで追っ払うことにあるな。

と、看破すると、

「いや、どうしてもゆけとおっしゃるならゆきますがね。しかし、長崎へいったって、おれは医者なんか修行しない。抜荷(ぬけに)でもやるか、それとも切支丹伴天連(キリシタンバテレン)の妖術でも習う」

といって、そっぽをむいた。

「ふふっ、それでもよござんすかい？」

まったく手のつけようがない。

ところが、それから半月もたたないうちに、玄秀にもわけのわからない異変が起った。

そのころのある日、珍しく正装し、しかもただならぬ顔色で出かけようとする玄秀を、これまた珍しく家にいた馬之助が、どこへおいでなさるときいた。

「御徒(おかち)町の伊東玄朴どののところで、番町の綱坂さまのお嬢さまが御手術なされる。それに立ち会わねばならんのじゃ」

さきに一人でいってしまった父のあとで、身支度して追おうとしている薬箱持ちの玄安をつかまえて、さらに詳しく尋ねた。その昔御番医師をやっていたこともあって、玄秀にはいまも旗本に少なからぬひいきがある。番町で二千石取りの綱坂図書(ずしょ)もその一人だ。本来なら、その家の病人なら玄秀が呼ばれるところで、それをほかの医者にまかせるというので、立ち会いにいったものであろう。

「しゅ、手術とは？」

馬之助はせき込んだ。

「へへ、それが、出べそで」

よほど玄安もこの件が面白かったのであろう、ふだんあまり信頼していない馬之助に、さらに重大なことをささやいた。

「なに、大したことでなく、なみの女性(にょしょう)ならかまわぬほどということでござりますが、あのお嬢さまはな、ちかく公方さまおつきの御中臈になりなされるとかで、それならちょっとした出べそも困る。——それをなおすのは、いまのところ玄朴先生よりほかにないという次第でござってな」

公方さまおつきの御中臈とは将軍の愛妾となることだ。長い顔をのびちぢみさせている馬之助の感動ぶりを見て、玄安はいささか不安をおぼえたらしく、

「ただし、この話、口外すれば首が飛びまするぞ」

と、いまにも飛ばんばかりに首をちぢめた。

出べその件は別として、綱坂図書の娘で上様の御愛妾に上るという話は、だれがきいても二度驚きはしないだろう。それは、まだ年は十七歳だが、旗本の息女どころか、江戸でもならぶものもないのではないかと噂される美女であったからだ。

「お、おいっ」

と、馬之助は、次に甚だ馬之助らしい問いを――馬之助らしくもなく息はずませて投げた。
「出べその手術とは、へそばかりでなく、そこら一帯をあらわにするものだろうな」
「さ、その手術が出来るのは玄朴先生ばかりということでござるから、こちらには皆目見当もつきませんが」
――十年ほど前、長崎から江戸にやって来て開業した蘭医伊東玄朴の医院「象先堂（しょうせん）」は、下谷和泉橋通り御徒町にあった。
そこに、ひそかに駕籠でやって来た武家娘の素姓を知る者はほんの少数であったが、一目見た連中は、その夢幻のような美しさに、これは地上の女人かと眼を疑った。
その象先堂の一室で――寝台に横たわった美女の白臘のような腹部がうやうやしくひらかれ、問題の臍ヘルニアが、まわりに立つ人々の眼に入ろうとする刹那。――その一人、きょうの手術の紹介者たる高橋玄秀が、何気なくヒョイと眼をあげて、入口あたりにひとかたまりになった象先堂の高弟たちの中に、伜の馬之助の何くわぬ長い顔がまじっているのを見て、眼をぱちくりとさせた。
彼はその方へつかつかと歩いていって、恐ろしい顔であごをしゃくった。追われて、馬之助は手術室の外へ出る。
「み……見せて下され」
と、彼は手を合わせた。

「いかん、部外者はわしだけということになっておる。いわんや、医術に何の縁もないおまえが」
前に立ちはだかった玄秀は、馬鹿息子のあまりに大胆なふるまいに唇をふるわせて、
「命惜しくば、帰れ！」
と、低声で叱りつけた。
――さて、玄秀にも意外な異変というのは、その夜馬之助が長崎へ医学の勉強にゆくといい出したことだ。
どうしてそんな心境になったのか、詳しく父親はきかなかった。伜に長崎へゆけといったのは、馬之助が見ぬいた通り、玄秀はこの素質甚だよろしからざる息子の処置にほとほと窮して、ともかくも江戸から遠ざけねばという焦燥にかられていたのだ。それは厄払いのためではなく、息子のためであった。お天気の変らぬうちにと、玄秀は膝をたたいていった。
「ゆく気になってくれたか。おお、それではすぐにも玄朴どのに紹介状を書いてもらおう」
江戸から遠ざけるのが息子のため――と、玄秀が気をもんだのもむりはない。それは膿ただれた世相に町奉行鳥居甲斐守の手によって粛清の鞭がふるわれようとする前夜、天保十二年の秋のことであり、高橋馬之助は二十二歳であった。

三

さて、それから五、六年。
玄秀は死ぬまで、この息子と相見えることはなかった。——
長崎の方からは、何の便りもない。——いちど、それでも心配になって御徒町の伊東玄朴の方にきき合わせたことがある。
「いや、それはこちらの頼んだ楢林の方にいちどきいてやったのでござるがな。オランダ医学ではもの足りぬと申して、唐人医者のところに出入りしておるらしい。これぞ、まことの漢方でござるて。——ま、それだけ意欲があるとすれば御心配はいりますまい」
洒脱な玄朴はそんなことをいって玄秀を安心させたが、そのうち長崎から帰った商人から、馬之助が本庄茂平次なる人物の乾分みたいになって長崎を横行しているという話をきいた。玄秀はふさぎこんだ。
本庄茂平次という男は、ここのところ江戸で噂をきかないが、町奉行鳥居甲斐守の爪牙として江戸の庶民をふるえあがらせた恐ろしい男だ。そういえば茂平次は元来長崎の出身だともきいたことがある。それではそちらに帰っているのだろうが、伜がその乾分みたいになっているとすれば、さては同臭相呼んだものか。——
その茂平次が、ふらりと出府して来た。それときいて玄秀は、そのころ病みがちではあった

が、手蔓を求めて息子の話をたしかめにいった。すると、茂平次は——だれが見ても悪党らしい能面みたいな顔を、別人のように崩してゲラゲラ笑った。
「わっはっはっ、馬はオランダ医学ではない、オイラン医学を学んでおるわい」
「オイラン医学？」
「丸山にいりびたって、女郎ばかり見ておるが」
丸山が長崎で有名な遊廓であることを知らない者はない。——茂平次はしかしふと真顔になって、
「いや、女郎を見るといってもな、なみの客として見るのではない。左様、指圧師、もみ療治師として診ているのだから、ま、医者の同類として診ておるといってよかろうが、あれは漢方かな、オランダ流かな？　とにかく女を裸にせねば効き目がないと申し、事実、女郎どもがふつうの按摩どころか、客と寝るより気持よがって、馬がゆくと争って呼ぶのだから、馬鹿にならぬ。玄秀老、あれは心配いらぬよ」
と、これまた承合ってくれたのはまあよかったが、すぐにつづけて、
「——とは、いうが、それはやっとこのごろのことだ。あれが丸山をそこまで商売の縄張りとするには、おれも相当元手を貸してやった。いくらと勘定したこともないが、ま、相当な額だ」
と、上眼づかいに玄秀を見て、煙草の煙を吹きつけた。

むろん玄秀は、あとでこの男に相当な額の金子を贈った。

そんなことがあってから一年ほどたって玄秀はこの世を去ったが、どうやら終始えたいの知れぬことをやっているらしい息子のさきざきについて、あいつのことだ、何とか世を渡るだろう、と自分にいいきかせたり、またうなされるほど心配したり――まあ、七割方案じつつ息をひきとったといっていい。

長崎へその知らせがいったが、返事はなかった。馬之助はいつのまにか長崎から姿を消していたのである。

それからさらに二年ほどたって、馬之助は江戸に帰って来た。江戸を出てから八年目。――世は嘉永元年となり、彼は三十になっていた。

馬之助を知る人々は、八年ぶりに見て唖然とした。

二十二歳から三十歳へ――八年間の歳月が肉体に及ぼす影響はだれだって同じだが、馬之助の場合は、たんにでっぷりと肉づきがよくなったばかりでなく、その顔面筋肉の動かしかた、動作、口調に至るまで、別人のように堂々たる壮重の気をたたえていたからだ。

「おやじさまは亡くなられましたぞ」

と、伝えても、

「存じておる。噂はきいたが、京で大事の修行中でござってな」

と、落着きはらっている。

「ほ？　京で、何を？」

「愚かなる問いや、むろん医術でござるよ」

「へえ、京にオランダ流がありますか？」

「愚かなる問いや、拙者は蘭医にも漢方にもあきたらず、京の典薬頭半井家にあって研鑽しておったのだ」

半井家とは、平安朝以来京の朝廷お抱えの医師の宗家だ。

――若いころの女の尻まくりはどこへいったのだ？　と、みながあっけにとられていると、果然、馬之助は大看板をかかげた。

「神方・女人科・万久里小路馬竿斎」

その顔のように、長い長い名前である。神方、が漢方蘭方に対する医術であるらしいことをすぐにみな知ったが、女人科、というのは、わかったようでわからなかった。

いまでいう産婦人科らしいとは理解したが、さて産婦がゆくと、重々しくかぶりをふって

「お産は病気ではござらぬ。犬にも馬にもある通常の生理でござる。左様な現象は世のつね産婆におまかせあれ」という。女の病人がいっても、数問あったのち、「左様な通俗の病は、神方にかかるまでもない。ありきたりの漢方蘭方で充分間に合うでござろう。甚だお気の毒じゃが拙者には医学的興味がござらぬ」と、さもさも軽蔑したようにいう。

それではみんな断わるのかというと、むろんそれでは何のために大看板をかかげたのかわか

らないから、引受ける患者もある。その選定は何によるのか第三者には不明だが、とにかく病気で苦しんでいた女たちが――ほかの医者ではどうもはかばかしくない病気まで――その治療によって快癒することは事実なのである。

療法は主として指圧ともみ療治であった。ただその治療代は、町の按摩などと天地の差があり、眼の玉の飛び出るほど高かった。

患者はしかし、それも当然だと思う。何しろ万久里小路馬竿斎は、それを和気清麻呂公か菅原道真公みたいな衣冠束帯の装束でやるのである。病気は選ばれ、しかも途方もない治療代はとられるのに、以上の話題が話題をよんで、患者が争ってその門前に雲集しはじめたから世の中は変なものだ。――いや、世の中はそんなものだといおうか。

しかし、冷静に見れば何やらインチキくさく、とくに専門の同業者からは何かと批判を受けそうなものなのに、それがふしぎにあまり評判は悪くなかった。

万久里小路馬竿斎は「政治的」にも精力的に動いた。そのおかげだ。

彼はまず江戸城奥御医師多紀楽秋院のところへ挨拶にいった。いわゆる御典医の総師である。父親が御番医師を勤めていたことがあったから、縁はあったのだ。

ここで馬竿斎は、さんざん蘭方の悪口をいった。

「あれは鬼面人を驚かす道具が、新しいものにはすぐに飛びつく日本人の弱味につけ込んだだけのことで……拙者、長崎でその正体を知れば知るほど、いにしえの切支丹伴天連の術と相通

ずるものがあると確信いたしました」

以下縷々として、その妖術性を具体的に述べる。長崎でオランダ医学を実際に学び、あえてそれを捨てたと称する人間の結論だから、多紀楽秋院はよろこんだ。

それからまた彼は、御徒町でますます盛業中の蘭医伊東玄朴のところへもいった。

「いや、長崎へいって蘭方を学び、はじめてまことの医術というものを知りました。あの精到の学理、心胆を奪う手術――あれにくらべれば、日本古来の漢方などはまじないに過ぎぬ」

と賞揚し、

「拙者、御紹介いただきました楢林先生のところで修行をつづけたい志切なるものがありましたが、何たる不運か、例の本庄茂平次に脅され、涙をのんでやむなく蘭方を離れましたが。――」

と、痛嘆した。本庄茂平次は主人の鳥居甲斐守とともに蘭学迫害の張本人であったからそういう可能性もないではあるまいが、とにかくその天保の悪党茂平次は、すでに数年前、護持院ケ原で殺されてしまっている。

馬竿斎はつづけた。

「しかし、蘭方の合理的精神は、しかと拙者の魂にはいっておる。諸般の事情から、漢方ならざる神方などという看板をかかげましたが、いずれ日本の医学はすべて蘭方たるべきが庶民のためと信じておることにまちがいはござらぬ。日本国のため、今後、その方向にていろいろ努力

して見るつもりでござりますから――そのための便法としてしばらく一見異なるふるまいを見せるかも知れませぬが――何ぶんともにお目こぼしました御援助のほどを願いあげまする」

闊達な玄朴は、もとよりこの意見に大賛成だから、膝をたたかんばかりにしてよろこんだ。

ところで万久里小路馬竿斎の医術はむろん大インチキであった。

四

――ともかくも少なからざる婦人患者を相手に、指圧もみ療治に類する行為をやり、結果として癒る者も多いのだから、頭から尻までインチキというわけではあるまい。しかし、その精神において彼はインチキであった。

はじめから承知の上なのである。

長崎へゆくといい出して父親をびっくりさせたときから、実は、人生この手でいってやろうと誓いを立てたのである。

いったいこの世でやりたい放題のことをやっている金と権力のある者に、金も権力もないやつがいい勝負をしようと思えば、インチキよりほかに法があるか。それはインチキなどというものでなく、やむを得ぬ正当な対抗手段というべきだ。

いや、そもそも金と権力のあるやつというのが、どうもインチキくさい。インチキをせずに金と権力をつかむことがあり得ようとは、いくら考えても考えられない。それも本人にそれな

りの能があればべつ、大半は生まれながらの家柄や身分でそれを持っているが、これこそこの世の大インチキとしか思われない。

ようし、おれはそのやりかたでおし通す。勉強や努力など、意地でもやらない。そんなものはくそくらえだ。これが、このばかばかしい世の中に対し、人生に対する最大の抵抗だ。

――というのは、しかし相当あとになってからつけた三分の理であって、ほんとうのところは、当人が全然勉強したくなかったのである。努力したくなかったのである。しかも、世の中に対し、人生に対し、大いにやりたいことがあったのである。

なかんずく、こころゆくまで女の尻をまくりたい。特に、身分高い、美しい女人の尻を。

ふつうの人間では、それは到底不可能だ。そうだ、医者なら、出来る。――彼ははじめてそのことに思い当ったのだ。あの日の綱坂さまのお嬢さまの一件以来である。あのお嬢さまは、彼もいちど遠目に見て、彼らしくもないロマンチックな忘我の思いにとらえられたくらいだから、あれは相当なショックであった。

それで、彼は長崎へやって来た。ちょっとした立志伝である。

ところが、さて、天性の勉強ぎらい、努力ぎらいである。蘭学の方はたちまち飛び出し、唐人医師とつき合い――そのうち、長崎の闇の顔役本庄茂平次の乾分みたいになって遊び歩いた。が、ただ逃避的に、また耽溺的に遊び歩いたわけでなく、かつて立てた志は忘れず、時至らばいつの日かと遠大の計をめぐらしていたところは彼らしくもないあっぱれさ、いや彼らしいと

いおうか。

かくて、その時節到来せりと見て、江戸へ捲土重来し、万久里小路馬竿斎というものものしい、実は人を食った名で登場したのだが、それにしてもこれほど人をたぶらかすに足る素養は、死んだ父親がえたいの知れぬ暮しをしていると案じたその八年のあいだに仕入れたのだから、必ずしも頭からの勉強ぎらい、努力ぎらいとはいえないかも知れない。

例えば。——

彼は機会があれば漢方医、蘭医双方の実力者のところへ出入し、大いに敵側の悪口を吹き立てたが、双方に出入しているという事実そのもので、双方から疑問視される存在になったのはいうまでもない。これに対して彼は、

「いや、あれは向うの蒙をひらき、こちらの学理の正しきことを論じておるのでござる」

と、ぬけぬけと弁明したが、それでも猜疑を解かぬ人々から、「では、貴公の学理は？」と探りをいれられたとき、ともかくもそれらの問いの内容を大体において了解し、

「そのお尋ねについては、でござるな。あちらではこういうことになっております。……」

と、漢方医の前ではでたらめのオランダ語をまじえながらオランダ医学を説き来り、蘭医の前では——蘭医はもともと漢方医だった人が多いから、この場合は新来の唐人医者や京の典薬頭より伝授され、それを折衷して新たに自分が工夫開発したと称する神方なるもので説き去ってしまう。

ともかくこれで一応相手を煙に巻いてしまうところがなみの腕ではない。

彼がそれぞれの門をいろいろかじって歩いたおかげといいたいところで、事実その通りで頭から勉強ぎらい努力ぎらいとはいえないというゆえんだが——さらにそれよりは、これらの怪腕は、彼の天性のごまかしのカンによるものであったのだ。

今でいえばカンニングの天才といってよかろう。——小学校から大学まで絶対に見つからないカンニングの天才があったとしたらどうなるか。極めて優秀な成績で学校を出て、社会の有力なポストに就く可能性のあることは疑えない。この世の生存競争にはいつまでもそれでは通らないといわれる向きがあるかも知れないが、案外それなりにすべてカンニング一点張りの処世法でらくらくと渡り、めでたく極楽往生をとげる可能性もあるような気がする。現実にそんな人間も少なからず存在しているような気がする——と、作者がいうのではない。万久里小路馬竿斎が信じているのである。

馬竿斎は、その信念の通りに自分の人生の方針を打ち立てたのであった。

そして彼の人生は、彼の計画通りに進行しはじめた。

江戸に帰ってから一年をちょっと過ぎたばかりで馬竿斎は、御番医師として江戸城出入りを許されている。これは亡父が元御番医師であったから、べつに未曽有の抜擢ではないといえるが、その父親が死んでから三年、まして父玄秀は早くから御番医師を辞していたのだから、このことに至るまでには奥御医師多紀楽秋院へのたゆまぬ馬竿斎の運動があったことはいうまで

もない。

　しかも彼は「御広敷見廻り」といって、江戸城大奥の御女中の係り医師を命じられた。――

　実はこれこそ馬竿斎の人生の大悲願であって、それがあまりにあっけなく叶ったので、かえって彼は拍子ぬけしたり、少々うす気味悪くなったりした。

　ただし、彼がそういう役目を与えられたのも、あながち右にあげたような家柄や運動のせいばかりではない。斡旋した多紀楽秋院の責任もあるから、現実的にそれ相応の理由もあったのである。

　すなわち、この「神方医」の手にかかると、ふつうの医者ではどうしてもはかばかしくない婦人の病気が癒るという。

　今や万久里小路馬竿斎は大奥に入って、盛大に女たちを裸にしはじめた。

　治療法は例の指圧、もみ療治である。――これが、やはり奇効を奏した。

　ほんとうの指圧、もみ療治にはそれなりの技術を必要とし、またそれなりの理論もあるのだろう。しかし彼の場合は、まるっきりでたらめ、よくいって馬竿斎自得の独特のものであった。強いて根本原理をいえば、いかに女人に対して怪しき快楽を与えるかという。――

「ほう、偏頭痛とや。それは何でもないこと」

　ニコヤカにその褥をさして、軽やかに裸にしてしまって、かたちだけの裲襠を羽織らせて横たわらせる。

「なに、月のものが不順とな。よしよし、相わかった」

　頭痛でさえ裸にしてしまうのだから、軀幹部の愁訴のごとき、かけてある裲襠などははぎとって、女身の上に馬乗りになって、あちこちと撫でまわし、もみたてることはいうまでもない。

　これについて彼は解説した。

「漢方で経絡と申すものあり、蘭方でネルベンジステムと申すものがござってな。小便がおかしうなって盲になることもあり、胃が悪うて偏頭痛を起すこともある。人間のからだは微妙な相関関係があって、どこがどうつながるか、全体として診て治療せねば病巣は退治出来ませぬのじゃ」

　これはまことにこの通りで、こんなことを述べるから、漢方医も蘭医もしてやられる。それにしても、風邪心地というのに、練絹のような内股に両手をさし入れて、赤味を帯びるまで擦りたてたり、肩が凝ってこまるというのに、白桃のようなお尻の円球のわれめに息を吹きつけたりするのはどうかと思われるが――それが、たいていあとでほんとうに、もとの病症が軽快してしまうのだから奇態千万だ。

　女中たちは病気になると、ほかの御広敷身廻りの医者を呼ばず、争って馬竿斎を呼んだ。

――

　しかし、馬竿斎の「治療法」にも一応の理由はあるのである。いったい人間の病気の七割方は、放っておいても自力で自然治癒するものだ。しかもその過程に精神作用のばかにならぬこ

とはいうまでもない。心に苦しみあれば食欲もなくなるのと逆の現象が起るのだ。特に女性はこの傾向が甚だしい。なかんずく大奥の女性は――不自然な性生活を送っているだけに、性感覚の欲求不満の寛解は、ヒステリーの薄紙を剝いで、面白いほどの好影響を与える。

馬竿斎はそれを本能的に看破していたが、その効き目に意味のあることは彼の本能的な智慧を超えるものがあった。――それでも彼が、これまた本能的なカンで、とうてい自分のモミモミ術の手に負えない病気ははじめから敬遠したのは前に書いた通りだが、それは少々用心ぶか過ぎたのではないかと思われるほどであった。

とにかく長崎の丸山で花魁相手に修行した按摩術を、熱誠こめてふるうのだ。大奥の女たちが悩殺されたのは是非もない。

どんなに自分の指で撫でてもこうやさしくは撫でられない、トロトロと流れる飴のような甘美さで、十本の芋虫みたいな馬竿斎の指が撫でまわす。それが、気づかないほどの変化で強くなっていって、いつのまにか白い肉を餅のようにわんぐりつまんではこねあげる。病人はあえぎ出さずにはいられないが、それは痛さのためというより、名状しがたい快感のためだ。それがまた気づかないほどの変化で弱くなっていって、この感覚の波動に、いつしかそれに合わせて彼女たちは、声のみか、腰さえも上下させている。――

それどころか、この大奥医者はだんだん大胆になって、いつしかもっときわどいあたりを撫でていたり、はてはペチャペチャと尻をたたいていたりする。――それも、幾ときか、忘我恍

惚の陶酔境から、女がはっとわれに返って、

「これ、何をしやる」

と、赤くなった顔をあげると、自分のからだの上に厳然たる馬面がふさと眼を閉じたまま、技神に入るといった表情で応えない。――ややあって、

「おしずかに。――御治療中でござる。……」

錆をふくんだ声が重々しくながれて、彼女たちをいっそう赤面させてしまう。

万久里小路馬竿斎の指はどんな風にも動いた。どんな無礼なふるまいもした。それどころか、数度ならず彼は、父のやったという「治療法」を再現させて見たことがある。立膝になって、ふんどしのふくらみを見せるというやつである。さすがに大奥に入ってからは、例の衣冠束帯はつけていなかった。すると、いつのまにか女たちの眼がじいっとそこに吸いつけられているのを彼は見た。中には、偶然の身動きのように見せかけて――その実ふるえる指で、そっとそれにさわった女さえある。そして大袈裟にぎょっとして上眼づかいに本体を眺めやると――そんなとき馬竿斎その人は、いちどもニコリともせず、まるで見えない衣冠束帯をつけているように、厳粛そのものであった。

ついに女たちはこの医者を、その点でも信頼するようになった。少くとも仲間同士では信頼したふりを見せるようになった。馴れ合い、偽善の分子をあいまいにふくんだ奇怪な、しかしぼうっとするような信頼である。彼女たちは、病気でなくとも、馬竿斎を呼ぶようになった。

実は馬竿斎は、むろん腹の中で哄笑していたのだ。おれは大奥の女どもを征服した。少くともその尻を！

五

まさか、これ以後万久里小路馬竿斎のやったことを、最初からはっきり野望していたわけではあるまい。あまり本願が簡単に達せられたので、この世を甘く見たのではないかと思われる。もっとも人間の望むことで、これで満足ということはない。一が叶えられれば二を願う。三を叶えられれば五を願うのが常だが、それにしても馬竿斎の望みは大それたものであり過ぎた。彼は江戸城奥御医師の総帥の多紀家にとって代ろうという野心を起したのである。

奥御医師というのは、幕閣関係に勤務する百五十人から二百人に及ぶ各科各級の医者のうちの最高クラスであって二十人内外、その中で将軍及び御台所ならびに御側妾を拝診するのはさらに数人であって、これを「お匙」と称する。そして多紀家は、御神君以来代々連綿としてその総首席の医家であった。

現代の考え方からすると、代々連綿として第一等の医家であるということがおかしい。子は必ずしも父の才分や学識を伝えるものではないからである。

余談だが、いつぞや大阪の大金を取って医科大学の裏口入学の斡旋をしていた医者があって、むろん自分の息子も裏口から某医大に入れていた。そして発覚してから、その医者がひらき直

っていった。「医者にするには医者の息子にかぎると信じての行為だ。医者の息子なら、中学のころまでに見よう見まねで一応医者のやることは知っているものだ」云々。素人の新聞記者相手だから、知らないと思って口から出まかせの法螺を吹くものだと私は失笑したが、考えて見ると徳川時代、多紀家はこの通りのことをやっていたわけである。

「そんなはずはない。これはインチキだ」

と、馬竿斎が思ったのが彼の壮図の一原因でもあったが、しかしこういうことも徳川時代なればこそあり得たことで、彼自身多紀家の推挽によって御広敷見廻りの医者になれたのだ。

彼はそのおかげで望外の収入を得るようになり、大奥の身分高い女性たちをはだかにしてもみたて、かつ——むろん、自宅では数人の妾をおいた。妻帯をすすめる向きはもとよりあって、いくどか彼も心が動いたが、ついに正式には妻を迎えなかったのは、すなわち新しい野心にとらえられたからだ。ただの御広敷出入りの医者と江戸城奥御医師とは格が懸絶し、それによって迎える妻の格もちがう。

とにかく馬竿斎は、自分の出世の路をひらいてくれた多紀楽秋院をひっくり返してやろうと思い立ったのだが、その手段としてはむろん医術のほかにはない。ところが馬竿斎の医術が怪しげなものであることは、ほかのだれよりも御当人が承知の上だ。だいいち医術といっても、楽秋院は彼とは雲を隔てた場所でやっているのだから、いちゃもんをつける機会がない。ただかげで悪口をいいふらしている程度では、へたをするとこちらが吹き飛ばされてしまう。

当時奥医師というものがいかに権威を持っていたかというと、江戸市中往来のときは長棒の駕籠に乗り、駕籠かきの陸尺四人、駕籠侍二人、薬箱持ち一人、傘持ち、挟箱持ち、袋杖持ち、草履取りなど、すべて十一人の供方で、旗本など途中でゆき逢うと小腰をかがめて道をゆずる習いであったといわれる。

また奥医師の一人であった桂川家の娘今泉みねの著わした「名ごりの夢」にも。――

『いったい奥医は手足をみがいて、香など焚きしめたいい着物をぞろっと着て駕籠に乗って歩いていましたから、まるで婦人のようでした。公方さまのお手をとるからというので、自分の身はきよめにきよめて、あらぶれないようにしていました。ほかの人はまず診ないということになっていまして、百万のお金をつんでも奥医に脈をとってもらうことは出来なかったそうです。大名あたりから申し込みがあってさえ、公儀にまずうかがってお許しがなければ脈はとれないというむずかしいものでした』

と、ある。

万久里小路馬竿斎のようなタイプの人間にとっては、夢想の極のような生活だ。その位置につけば、公方さまやほかの奥医師などごまかすのは朝飯前だと思うのだが。――

さて、その手段として馬竿斎が思いついたのは、自分ではなく蘭医伊東玄朴を矢面に立てることであった。

出島のオランダ医者の流れを汲む医者は、元禄時代から御典医の中に加えられている。桂川

家などもその一つだ。が、これも先祖代々で――しかも日本独特の感心しない習性で、医学にかぎらずあらゆる学問、技術など、すべて門外不出の口伝として、まったく他の学派とのつながりを絶ち、進歩どころか逆行して、えたいの知れぬ秘術と化してしまう。で、幕府お抱えの蘭医もただ名目だけで、実態は右にひいた桂川の娘の記録のごとく、一般の御典医と変らぬ身構えのものに堕していた。

そこへ新鋭の洋医シーボルトから教えを受けた蘭医の権化伊東玄朴を押し立てたのだ。玄朴の妙技は、民間でこそ万客市をなす盛業を招いていたが、この時点ではまだ幕府からは完全に異端視されていた。現代での普通の医者が、鍼灸に対する態度とちょうど逆の現象であった。

この玄朴にフットライトを浴びせる――といっても、公然推挙する力が馬竿斎にあるわけでなく、また危険でもある。彼はそれを大奥の女中を介してやった。

どうしてやったのかというと――。

右に述べたような奥医師は、将軍及びその周囲の高貴な人々を拝診治療するのが勤めだが、むろん、それだけやっているわけではない。その人々が絶えず病気しているわけではないし、それだけなら毎日ひまで、かつ本人の腕も落ちる。そこで実際は公儀のお許しを得て、もったいぶって閣老や大名及びその家族の診療もやっていたのだが、そのうち多紀楽秋院関係の情報を大奥の女中を介して馬竿斎は入手したのである。

その中でなかなか治癒しない難症の例を、彼は玄朴のところへいって雑談まじりにしゃべっ

た。すると、しばしば玄朴は眼をひからせて、髀肉の嘆をもらした。

「わしなら、癒して見せるが」

それを馬竿斎はまた大奥で、女中にそれとなく宣伝してやった。

事が事だけに、こういうことは確実に患家に伝わる。そして噂をきいた患家では、まるで闇夜に曙光を見たように——いままで評判をききながら思いつかなかった自分たちの迂闊を悔いて、ひそかにその巷の蘭医を呼んだ。

かくて、当然、多紀楽秋院と伊東玄朴との対決となる。

実際上、玄朴の方の医術がすぐれている上に、彼自身、おのれの立身のためのみならず学問的信念から、やる気充分であった。楽秋院はしばしば徹底的敗北の苦杯をのまされた。

こんな話がいくつか将軍の耳に入る。そして——やがて某大名に嫁した将軍の姫君のお産がはからずも大難産となって、母子ともに危く、楽秋院も立往生の始末となったところへ、至急呼ばれた玄朴が、シーボルトから譲られた鉗子を以てみごとに分娩させ、母子を救ったという事実で、ことは決定的となった。

多紀楽秋院は閉門を命じられ、伊東玄朴は奥詰医師に召し出された。奥御医師よりランクは一つ下だが、実に当時の一異例であった。

「拙者苦心の甲斐あって、近来の快事これに過ぎたるはござらぬ。しかし、玄朴どの、これはまさに敵中に入るようなものでござるぞ」

お祝いにやって来た馬竿斎はものものしくささやいた。

「玄朴どの、これは根もない風評ではない、とお信じ下さい。お城での飲食には、よくお気をおつけ下されよ」

「？」

「拙者さえ殿中でお身の廻りにおれば、必ずあなたをお護りいたすが」

玄朴は馬竿斎を見つめた。彼は自分を押し出してくれたのがこの男であることも、この男が妙に城中の秘事に通じていることも、もう知っていた。

「万久里小路さん。……わしはお前さんと相役であることをお願いしよう。その条件でなければこのたびのお役御辞退いたさねばならぬと申しあげよう」

と、玄朴は快笑といった笑顔でいった。

相手の言葉の半分を信じていいかどうかわからないようなことだが、少くとも相手の真意は正確につかんだのだ。彼はこの怪医へ謝意を表する必要と、自分のための存在意義を認めた。

玄朴は笑った顔をひきしめて、黒い坊主頭に精悍な眼をぴかりとひからせていった。

「ただし、貴公、お城では按摩以外はおやりなさるなよ」

万久里小路馬竿斎は、顔を小田原提灯みたいにのびちぢみさせた。

六

馬竿斎は江戸城奥詰医師となった。嘉永三年のことである。

それから彼は、こんどは伊東玄朴退治にとりかかる。

思えば右の多紀楽秋院失脚までことを運んだやりかたは、彼が少年時代、ほかの子供をそそのかして女の尻をまくらせたのにそっくりだが、さて、こんどはどうするか。

玄朴は彼にとって、多紀楽秋院を打ち倒すための道具であって、その用がすめばもう要らないものであったが、どうやら玄朴が彼のインチキぶりを看破しているらしいことを知って、これは不要などころか邪魔ッ気な存在になった。

馬竿斎が玄朴を追放したやりくちの根本原理は、考えてみると彼が幼時、駄菓子屋をやっつけるのに菓子に鼠の糞をいれたりしたのと相通ずるものだが――この幼稚な手段がうまくいったのは、やはり彼の新しく得た「地位」の重みのおかげに相違なかった。

彼が次に述べるような幼稚な法をとったのは、彼の智慧がその程度のものであったせいともいえるが、また江戸城奥詰医師となり、総髪に金ピカの衣裳をまとい、薬箱持ちから草履取りまで従えて歩く身分となってから、かえって智慧のまわりがインチキ宗教みたいに奇怪なものに変質していったせいともいえる。

実際に馬竿斎は、鼠の糞を使ったこともある。

玄朴殿中に入って一年余、どうやら柳営にもその信奉者が少なからず出はじめたあるころ。

伊東栄著「伊東玄朴伝」にいう。

『或る時のことである。伊東先生の殿中の詰所へ御殿女中が来て、今、上様へお薬を参らせようとしたら、その中にかようなものが入っていたが、如何いたしたものであろうと申すので、見ると丸薬に混って鼠の糞が入っていた。玄朴先生は腹の中で、これは漢方医の侍医どもが、蘭医をおとしいれるために企んだことであるなと思ったが、泰然として色も動かさず、

「これは実にけしからぬことである。調薬所の者が粗忽千万をしたものと見える」

といいながら、いきなりその糞をとって口中に投げこむとともに、ぐっと呑んでしまった。

みなの者がさすがにその大胆な行動に驚いているのを見ながら、

「これはよろしうござる。あとはこのまま上様にさしあげても一向さしつかえはござらぬ」

と、平然としていった。――』

玄朴としてはそのときそれが鼠の糞であるという確信はなかった。前に万久里小路馬竿斎から警告を受けていたこともあるし、鼠の糞と見せかけた毒薬かも知れないという疑いは充分あったが、このことによって将軍家に万一のことがあって『若し蘭医が将軍家からしりぞけられたとなれば、たんに自分一人の問題ではなく、ひろく天下の蘭医の没落となる』と信じて、この危険な行動をあえてしたのであった。

玄朴はてっきりこれは多紀楽秋院一派の悪あがきであると思っていた。まさか、自分に警告

した馬竿斎のやったことだとは思わなかった。馬竿斎はただ分外の出世に眼のくらんだ変なやつであって、それだけのことであって、ほかのだれより自分を退治しようと気をもんで軍略をめぐらしている男だとまで想像しなかった。

このたぐいの、玄朴から見れば、多紀一派の悪辣ないたずらと迫害が繰返され、彼はこれを沈着と信念によって切りぬけたが、一年ばかりたってついにひっかかった。そのときはじめて、自分の敵が何者かを知ったのである。

嘉永四年の秋、将軍家慶は病んだ。——奥医師たちが拝診したが、病名がわからない。ただ食欲がなく、日々痩せてゆくばかりである。そこでついに玄朴の診察にゆだねようということになった。

玄朴が城に上ってから、いくどか命じられて薬を調進したことはあったが、直接拝診のことに至ったのは実にはじめてのことである。

その当日。

「恐れながら。——」

と、いい出したのは、奥詰医師の万久里小路馬竿斎であった。

「調べによりますると、伊東玄朴儀、三日前よりからだがけがれておりまする」

聞いてみると、玄朴は三日前に、ある歌舞伎役者に往診したことがあるという。現代の俳優の栄耀栄華を思うとおかしいようだが、当時は何といっても社会的には河原乞食の身分をまぬ

がれなかった。

「ふうむ。で、どうする？」

という老中阿部伊勢守の反問に、

「承わりまするに、上様ならびに御台さま御拝診の節は、奥御医師衆はじかにおん肌にふれ参らせず、お肌付きの上から按診し、お脈をとるにもおん手首に袱紗をかけていたしまするとやら。いわんや——というわけで、その昔、四代さま御台さまおかくれあそばした際、長崎より唐人医者軋龍子なるものを呼ぶという異例のことに逢って、御台所たとえ落命するとも簾外の者に逢うべからずと仰せられ、やむなく唐人医は糸脈を以て御拝診申しあげたとやら」

と、伊勢守も知らないような、えたいの知れぬ故事を披露した。

糸脈とは、病人の手くびに糸を巻いて遠くのばし、医者は別室にあってその糸の伝える脈搏を検するという法だ。

「簾外の者たるは唐医も蘭医もひとし。いわんやきょう病みたまうは上様、一方医者は三日前いやしき身分の者を診てけがれたる伊東玄朴でござりまする。それに彼、平生よりオランダ医術の神技奇効を吹聴いたしおりますれば、何とてそれくらいのことが出来ぬはずがござりましょうや」

こういわれて、左様であるか、ではそのように玄朴に命じようということになったのは何といっても時代だ。

玄朴は召し出されてこのことを告げられ、口をぽかんとあけていたが、たちまち、
「そんなばかげたことは出来ぬ」
と、吐き出すようにいった。
相手になってこれを下命したのは、万久里小路馬竿斎だ。このときに至って、はじめて彼は直接玄朴の前にあらわれた。むろん阿部閣老も同座だ。
「なに、それがばかげたこととや」
と、馬竿斎は大仰な表情でいい、また「かつて四代さま御台所――」云々とやりはじめたとき、伊勢守が、
「だめか。ならば特別を以て、やはりお脈をとらせてはいかがじゃ」と、とりなしかけた。すると馬竿斎は語調を改めて、
「これ玄朴どの、さるにても貴公にこのたびの大事の御内示があったのは五日前と承わるに、三日前に河原乞食を診るという大不敬の軽挙をなされたはいかなる御所存か」
と、たたみかけた。
玄朴は慨然と肩をそびやかしていった。
「医者の相手に身分はござらぬ。病者があれば行路にても診る。これシーボルト先生のお教えでござる。オランダ医学を学んだ者にとっては、将軍家であろうが乞食であろうが、病者とあれば同じでござるわ」

彼はこんどのばかげた難題を出して自分を邪魔しようとしている張本人がこの馬竿斎であることを知り、この男をインチキ野郎と看破して軽蔑していただけに、憤然としてやり返したのだが、何としてもこれは一言多かった。
「何と仰せられる。将軍さまも乞食も同じとは、あの、ここな。――」
と、のけぞり返ってどもる馬竿斎のあとの言葉を待つまでもなく、伊東玄朴は追放された。その日の江戸城からも、奥詰医師の栄職からも。
――伊東玄朴がゆるされて、改めてまた本格的な奥御医師に任ぜられるのは、これから七年後、将軍も変り時勢転変した安政五年夏、彼五十九歳のときのこととなる。
その前に、この事件の翌年、万久里小路馬竿斎はなんと奥御医師に列し、法眼（ほうげん）を名乗るようになった。

七

急速に万久里小路法眼はカリスマ的相貌を帯びるようになった。――
彼が奥医師に昇進したのは、玄朴追放後どういう風の吹きまわしか、狐憑きの落ちたように将軍が快方に向ったという柳営のお祝い気分と、大奥女中たちのひいきのせいであったが、奥医師になってからさらに重きをなしたのは、大ライヴァル伊東玄朴を追っぱらってくれたということで、ほかの御典医たちが有頂天になって彼を持ちあげたからだ。

いずれゆくゆくは、彼が最高位の法印に就くだろうという噂さえながれた。

彼はすでに法印になったような重々しい威儀を保っていた。そして、彼独特の「神方」をさらに開発させ、進歩させた。——というと聞えはいいが、実はその遵奉するところますます奇々怪々なものになったのである。

自邸の宏壮な大広間に、修験道の護摩壇のごときものをしつらえて護摩を焚く。まわりに数十人の陰陽師風の弟子をずらっとならべ、笙ひちりきに法螺まで吹きたてさせて、香煙朦々たる中に裸にした女人を横たえてもみたてる。すると——道具だてが大がかりになるに比例して効験もあらたかになったから妙である。

また以前には自信のなかった病人、専門外の男性すらも——その切なる願いと大枚の金子に動かされて、薬を与える。要するにそれはいもりの黒焼式の、もっとひどいものであったが、それで癒る者が十人に二人くらいあったからふしぎだ。彼は病人が癒ると一人について千両の薬礼をとった。そして、十人に八人くらいは治癒したと吹きたてた。

後にある学者が調べて見たら、万久里法眼の治療法なるものは、よくいって民間療法の博物館、ほんとうのところはありとあらゆる迷信の一大交響楽ともいうべきものであったが、天下の「神方」奥医師としての存在意義を保つための彼の苦肉の策とはいえ、ひょっとしたら彼は、自分の徹底したインチキ性を極限まできわめて、愚夫愚婦をたぶらかす——病魔すらもたぶらかす——ということに無上の法悦を味わっていたのではないかと思われるほどであった。

そして、ついに彼にとって夢想の日が訪れた。嘉永五年夏のことである。

このとし、疱瘡が流行した。——

すでに天保九年、伊東玄朴はオランダ医書「牛痘種法篇」を訳し、十二年にはじめて人痘を友人大槻磐渓の幼女に植えて成功し、さらに三年前の嘉永二年には、蘭船から得た牛痘の痘苗をおのれの娘春に植えて善感させている。しかし、むろん世人にはひろく認められなかった。それどころか、「オランダ狂、ついに狂って娘を死なせるか」と誹られた。牛痘を植えられたものは角が生え、モーモーと鳴き出すだろうなどといわれたことはいうまでもない。そして世は、ただ疱瘡の猛威の蹂躪するままになった。

疱瘡は現代の文明国にこそその跡を絶ったが、種痘の法が流布される前は、もっとも恐ろしい病気の一つであった。病毒は患者との接触、患者の呼気によってさえ伝染し、はじめ悪寒戦慄とともにはじまり、頭痛、腰痛、嘔吐に四十度前後の高熱を発し、やがて全身紅色の発疹に覆われる。その死亡率はたちの悪いときは四十％になんなんとし、たとえ軽快してもあとにいわゆるあばたを残すという結果をもたらす。

いったん発病したとなると、玄朴の種痘といえども処置がない。

この恐怖すべき流行病が江戸の一角にあらわれはじめ、市民が恐慌状態におちいったとき——万久里小路法眼はふしぎな療法を鼓吹した。

それは、痘鬼は赤い魔神である。かるがゆえに、患者はもとより、それをふせぐためにも、

人々はすべて赤い着物を着、赤い夜具に寝て、赤い蚊帳の中にいるべきであるというのだ。何が、かるがゆえに、か、わからないが、人々は争って赤い衣服、赤い反物、赤い蚊帳を求めた。

——そんな療法の噂がながれる前夜、江戸の大きな呉服商や反物屋、蚊帳商などの番頭が、相ついで万久里小路家を訪ねて何やら密談していたことはだれも知らない。

——将軍寵姫病みたまう。

その急使が馬竿斎のところへ駈けつけて来たのは、その夏の終りであった。

——まだべつに御発疹なされたというのではないが、御側妾お眉のお方さま、頭痛をお訴えあそばされ、またお熱も出されておるようにお見受けしたてまつる。いそぎ登城して拝診するように。なおもし万久里小路の治療により病いが去るようならば、ただちに法印に上すようにとの御諚でござる。

「お眉のお方さま！」

彼はさけんだ。眼の球が吊りあがって、一瞬白眼をむき出したように見えた。

彼はもう何百人という大奥の女性たちの裸身を見たが、まだ御側妾の一人も拝診したことはない。お眉のお方さまは、御側妾の中でも最も将軍家御寵愛のふかい方ときいているお方であった。そして彼が眼を吊りあげたのは、そのお眉のお方さまこそ、十二年前のあの綱坂図書さまの出べそのお嬢さまなのであった。——出べそだって、何だっていい。彼はその女人が手術を受けるのを見られなかったという残念さで、志を立てて長崎へいったくらいなのだ。自分が

発憤の原動力、自分の今日あるのはそのひとのおかげなのだ。

いや、見られなかったのではない。自分はあのとき手術台の上に横たわっているそのお方の雪のような腹をちらっと見た。その残像は眼華のごとく残っているが、それっきり、そのお姿をすらお見受けしたことはない。あれほど大奥に入っても。——

十二年たってもまだおん年二十九歳。いやそのおん美しさは爛熟の極致に達し、数年前すでに御台所を失われたことし五十九にならせられる上様には、まるで掌中の珠のように御寵愛あそばされてなお足りぬほどのお方であるときく。

そのお方を、おれが診るのだ！

馬竿斎は、ほんとうのところ今まで自分には人生目的がなかったことを知った。いや、それに気づかなかったことを知った。おれはこの日のために長崎以来魔に憑かれたような人生を送って来たのではないか。

万久里小路馬竿斎は武者ぶるいした。そして、例の供ぞろいものものしく、まるで出陣のごとく砂ほこりをまいて江戸城に上った。

大奥に入る。いままで彼もそれ以上の進入を許されなかった秘宮の奥へ、彼はしずしずと導かれてゆく。

「上様、御同座でござりまする」

老女がいって、病室の唐紙をあけた。

一歩入って、馬竿斎の視野は真っ赤になった。――それが、自分の宣伝した紅色ずくめの一室になっていることに気がついたのは数分ののちである。壁も真紅、天井も真紅、唐紙の内側も真紅、そして蚊帳が吊られて、それも真紅の蚊帳であった。

その蚊帳をまくって入る。入ると夜具も真っ赤、その中にうずくまる数人の侍女の衣服も真っ赤、置いてある雪洞（ぼんぼり）、諸道具もまた真っ赤であった。

「万久里法眼馬竿斎推参いたしました」

と、その侍女の一人がいった。

どこに将軍家とお眉の方がおわすのか、馬竿斎はさだかにも見えず、ただ平蜘蛛のごとく平伏した。――なぜならやがておぼろげにわかったことだが、そのお二人とも、真っ赤な世界に紅衣を着、紅い頭巾をかぶり、のぞいた眼のあいだも紅い紗で覆っていたからだ。

「眉はこれにおる」

将軍はいった。

「何はともあれ、これが疱瘡かどうか、法眼、早う診てくれい」

「へへっ」

馬竿斎は顔をあげた。それから、必死のしゃがれ声をしぼり出した。

「恐れながら――まず、おん腹部の御拝診をおゆるし下されまするよう。……疱瘡なりや否や、その第一の徴候がそこに現われますれば。――」

「眉の腹――腹には、何もないぞや」

「いえ、常人の眼には何も見えずとも、神方眼を以てすれば――」

「左様か。……では、眉、立って、ひらいて見せてやれ」

まだ姿はよく見えず、将軍の何やら不興気な声が聞え、数分間のためらいののち、馬竿斎の前に真紅のとばりがひらいて、かがやくような白いものが現われた。

たしかに腹だ。たしかに女人の腹だ。――とは見たが、そこにはむろん何の紅疹もない。第一徴候などむろんでたらめで、ただこの女人の腹を見るのが馬竿斎の夢想であったからそれはどうでもいいが、問題の出べそが癒っていたかどうかさえ見わける力が失われていたのは――そもそもへそなどあったかどうかさえわからなかったのは、よほど逆上していたせいに相違ない。

「何か、あったか」

「ご、ござりませぬ。……」

それにもかかわらず、図太い馬竿斎は、一つの執念にとり憑かれた夢遊病者みたいにまたいった。

「恐れながらいま一個所。――第二の徴候の現わるるところを拝診いたしたく。――」

「どこじゃ」

「ご、御臀部でござりまする。――」

「痴(し)れ者め！」

裂帛(れっぱく)の声がかかった。

「万久里小路なる珍らしき奥医師あり、これを呼べと申すものがあるゆえ呼んで見たが、うぬの眼つきただごとでない。血走っておるぞよ。……」

「あいや。――」

「少くとも、それは医師たるものの眼ではない。うぬはわれらをなぶりに来たか」

「あ……いや！」

馬竿斎は狼狽した。これは少し、図々し過ぎたか、という悔いに戦慄の波がかぶさって、彼はがばと赤い褥(しとね)に額を埋めてしまった。長い顔ぜんぶがめりこむかと思われた。

「それまでして診てもらおうとは思わぬ……。退りおろう」

彼は坐ったままキリキリ舞いして、腰でいざって、逃げようとした。眼前に、入って来た赤い蚊帳があった。それを彼はガサガサとまくりあげた。

眼の前に真っ白なひかるような肉が立ちふさがった。

「……あのここな性懲りのない無礼者め、手討ちにいたす」

将軍の絶叫が聞えた。

蚊帳の代りに、まくったのは、うしろをむいたお眉のお方さまの赤いお裾(すそ)であった！　と気がついたとき、万久里小路馬竿斎は、真紅の閨(ねや)の中で、彼自身真っ赤になって臀を二つに斬り

分けられていた。

陰萎将軍伝

一

徳川家十五代のうち、第十三代家定を最低のランクとする史的評価は動かないところだ。なにしろ、凡庸を過ぎて、病的な異常人というのだから。

同時代の松平春嶽にいわせると、

「家定公は凡庸中の極三等なり」

と、あり、同じころ水戸藩士であった後年の史家内藤恥叟の評によると、

「家定は昏闇の主なり。実は世上にも伝えたるごとく、お芋の煮えたも御存知なき愚人」

と、ある。

いずれも明治になってからの評語だが、何といっても旧主筋にあたる元将軍に対してこうまでいい切るのはよくよくのことだ。

それどころか、右の内藤恥叟の書いたものによると、ペルリが再来してその威嚇のもとに開国の条約を結ぶの余儀なきに至り、老中首席の阿部伊勢守正弘が沈痛の面もちで登城して報告

にいったとき、将軍は座になく、庭で大声がするのでそのほうを見ると、そのとき三十一歳の家定は、放し飼いにしてある数羽の鵞鳥を追いかけて庭じゅう駈けまわっていたという。

またその翌年のいわゆる安政の大地震に際して、蒼惶としてお見舞いに駈けつけた群臣に対し、この将軍さまがやったことは、庭に土鍋を持ち出して、自分で小豆を煮て一箸ずつふるまうという行為であったという。

これが事実だとすると、まったくの白痴としかいいようがない。

こういう家定が将軍となった年に、右に述べたように黒船が渡来し、その翌年に大地震が起った。一年おいて、近世の名宰相とうたわれた阿部正弘が内外の難局に消耗しつくしたのごとく死去し、その翌年、江戸をおののかせるコロリの大流行中に、彼自身もこの世を去っていったのである。

在職わずかに五年に足らず。――

日本はじまって以来といっていいこの大国難期にぶつかったのは、彼にしても悲劇であったろうが、日本にとっても災難であった――と、いいたいところだが、倖いなことに、全責任をひき受けてその難局の前半に立ち向ったのは阿部正弘であった。阿部が徳川全期切っての名宰相とうたわれるほどの手腕をふるったとすれば、その上に立つ彼も将軍として、まず大過はなかったということになる。

そしてまた阿部伊勢守は、死んだときでも数え年三十九歳という若さであったが、それより

五つ年下の将軍を、弟のように守護した。

いちど正弘は、その外交方針に反対する向きの陰謀を知って、辞職を願い出たことがある。

家定は、もしお前のやりかたがまちがっていたとしても、それはお前だけのあやまちではない、時勢やむを得ないところの結果だ、決して辞職などしてはいけない、といった。これはまずまともな反応だが、次に彼は伊勢守にすがりつき、

「お前にやめられては、余が困る、余が困るわい」

と、泣きじゃくったという。こういうところを内藤耻叟は、「何とか難しき件を申しあげればただ泣き出したまうばかり」と嘲っている。

しかし、阿部伊勢守に将軍を見下す気配は、毛ほどもなかった。この年に似合わず、ゆったりとして、優雅で、万人ひとしく讃仰の眼で仰がざるを得ない若き大老中は、将軍に対してあくまで恭虔であった。——後年、天皇の前を退ると舌を出したといわれる杉山参謀総長などとは、人品がちがう。

みな改めて、将軍さまとはこういうものかと粛然としたが——それでも、粛然とし切れないものがある。この家定公に対してだけは、である。口さがないお城坊主どもは、よく私語した。

「それにしても、あのなえまらさまになあ」

それであった。おそらく阿部老中も、この将軍家についての悩みは、外交や政局にからまるよりその点に関してではなかったか。

将軍家定、年三十にして男女の道を知らず、と史書にある。——いくら馬鹿でも、これだけは知らないはずがない。いくら教えても、この将軍は不能なのだ、という噂であった。

といって、かりにも将軍さまが或る年齢に達して御台所を迎えないわけにはゆかない。

家定は天保十二年、十八歳、父将軍の世子と決定して西丸にはいった年、京から鷹司家の姫君有君を迎えている。そして嘉永元年、家定が二十五歳のときに夫人はみまかっている。この夫婦生活は約七年であった。

翌嘉永二年、こんどはやはり京から一条家の姫君秀子を迎えたが、これはその翌年に亡くなっている。

それから六年間は独身だ。その間いよいよ将軍を襲職したこともあって、何もないというのも変だろうというので、お志賀の方という側妾がただ一人いれられた。

そして、かくてはならじということで、安政三年、近衛家の養女篤姫を御台所としたが、これは実は島津斉彬の娘敬子で、当時急速に政治的影響力を増大しつつあった薩摩の勢力との和合という典型的な政略結婚だ。ところが、こんどは一年半ほどたつと、当人の家定のほうがあっけなく死んでしまった。この未亡人となった人が、漱石の猫にも名の出て来る天璋院さまである。

十八歳での最初の結婚から三十五歳で死ぬまでの、いわば男盛りの十七年間に、妻が存在し

ていたのは約その半分の期間、そのあいだたとえ一人の側妾があったとしても、当時の将軍として驚くべき淡白さだ。あとでほかの将軍や大名の例で述べるが、まったく隠蔽する必要のない正真正銘の員数の記録がこの通りなのである。

この三人の妻と一人の側妾とのあいだに、ついに一人の子もない。

子供が生まれないどころか、いまいったように、そもそもこの将軍はなえまらであったというのだ。

男性におけるこの肉体的機能の異変ほど悲喜劇的なものはない。それも器官そのもの、または神経系統の欠陥、ホルモンの異常、あるいは全身衰弱などの原因にもとづくものなら、悲惨ないし滑稽にとどまるけれど、それが精神的心理的なものに発することも多いとなると、この現象は怪奇味をおびる。

二

家定はこの中のどれによるものであったか。——

巷間では、見ていたような噂が、笑いとともにささやかれた。お城坊主からの話だというのだが、実際にこんな話の発生地は茶坊主どもであったかも知れない。男子禁制の西丸大奥の秘事を、しかも側妾は知らず、世子夫妻の閨房など、坊主だってのぞくことなど出来る道理はないのだが。——

「奥方さまはよ」

と、民衆はささやいた。初代夫人のことである。

「なにしろ鷹司家のお姫さまだから、何にも御存知ねえ。それで御世子さまとごいっしょに寝ても、ただ何年間もならんで寝てるだけ。——」

「御世子さまには、だれも教える人はねえのか」

「そりゃ教えるだろうさ。教えても、はじめから何だか少しおかしかったようだが、それでもほんものの花嫁さまといっしょに寝てりゃ何とかなるだろうと思ってたところが。——」

などと、話はまことしやかだ。

「何年たっても御世子さまは、枕からキョトンとした首を動かさねえ」

「首振り公子ってえ異名だが」

家定は、だれかと会うと必ず首をぐらぐら動かしている癖があるという評判であった。

「女と寝てて、首なんか振っててもしようがねえよ。振りたててもらいたいのは首じゃあねえんだが、それが思うようにならねえ——というより、御当人にてんでその気がねえということだ」

「いってえ、どうしたんだ。だれに教えてもらわなくったって、犬でも知ってることだが。女と一つ蒲団に寝てて、手がさわってても、変な気にならねえっていうのか」

「さあ、それだ。奥方さまもはじめは夫婦ってそんなものかと、おとなしく寝ていたが、二年

たち、三年たち、天然自然に女のからだが熟れて来る。――」

「そりゃ、そうだろう」

「それでも御世子さまは、アッケラカンと知らん顔の半べエだ。そこで、とうとう奥方は気が変におなんなすった。――」

「へへえ、それじゃあ、こんどの御不幸は」

「つまり、色きちがいの悶え死」

有君御簾中が亡くなったと伝えられたころに交された噂である。

堂上の出で、将軍御世子奥方となった女性を、庶民は、十二単衣を着た源氏物語の中の女性のように空想する。それが色きちがいになったら、どういうことになるか。

源氏物語といえば、いまの御世子の祖父にあたる十一代将軍家斉公の大奥生活を、それとなく書いたといわれる「田舎源氏」の作者柳亭種彦が、以前不意に死んだのはそのタブーに触れたためだという噂であった。だから、岡っ引などに聞かれては一大事だが、それだけにこういう雲上の女性の色情狂ぶりは、金ピカの張形まで乱舞する、庶民の空想の極をつくして怪奇的にささやかれた。

「……とにかくこちとらのおやじみてえに、伜が年ごろになると、若い衆に金をやって頼んで、吉原へつれてゆかせるってなわけにゃゆかねえのだから、困ったものさ」

と、いってから、気がついて、

「しかし、御世子さまのお祖父さまは大変なおひとじゃあなかったのか」

「そういえば、おやじさまの公方さまもその道にかけてだけは、相当なお方のはずだが」

十一代将軍家斉と十二代将軍家慶のことだ。

「というと、あまり使いかたがはげしいと、金とおんなじで子や孫にたたるってえことか」

「桑原桑原」

それが、二代目夫人のお輿入れ以来半年ばかりでの急死ということになると、話はいよいよ凄味を帯びる。

「こんども御発狂だそうだぜ」

「やっぱり、あれか。……そんなことアわかってるのに、なぜ、また――」

「二十代の御世子をお独り身で置いとくのは世間態が悪い。また、あとつぎを作らなきゃ、どうにもならねえ」

「あとつぎったって、それがだめだってんだから。――」

「それよ、それが苦労のたねなんだ。今作らなきゃ、あとになるほど難しくなる。御世子も、それじゃあってんで気をふるい起して、また次をおもらいなすったんだ。ところが、やっぱりいけねえ。……なめくじだ」

「へえ？」

「毎夜毎夜、ただなめくじが這ってるようなものだったってよ。そいつを半年つづけられてる

うち、じれったくて、むず痒くって、うす気味悪くって、奥方はとうとう幽霊みたいにおなんなすったそうだ。腰がふやけたようになって歩いていなさるのを見ても、足がないように見えたという。——」

三人目の話は、これはもう家定公がこの世を去ってからのことである。

「さあ、こんどは公方さまの狂い死と来た」

「ど、どういうわけでさ？」

「今回はとにかく薩摩からの御台さまだろう。お嫁入りの前から、いのちをかけて子を生めという御下知を受けて乗り込んでおいでなすったそうだ。それだから、最初の晩から公方さまをむんずと組敷き、おしつける、尻をたたく、追いまわす——」

「なあるほど、薩摩からのお嫁さまじゃあ。——」

「とうとう公方さまは、御台さまを御覧になると腰をぬかし、はては蛤の吸物にもゲーゲーと妙な声を出され、亡くなられる前半年ばかりはお城の表御座所の柱にしがみついたっきり動かねえというありさまだったというぜ」

みんなゲラゲラ笑ったが、しかしこの話にかぎって、みな必ずしも冗談とは思わないような真実味があった。将軍立たず、という噂は長いものであったからだ。

相当に知識あり、身分ある向きでも、深刻に歎く人々が少くなかった。

「ああ、国始まって以来の大難という時に当り、幕府始まって以来の出来損いの将軍家をいた

だくとは、これ天命じゃなあ。……」

三

安政三年夏の或る夕。大奥の老女飛鳥井の老中阿部伊勢守正弘への物語。

このたび薩摩との御婚儀、上様はただあなたさまに委せると仰せられましたものの、なお釈然とされぬものあり、その件についてわたくしの意見を聞きたいとのお言葉でございますか。

左様なお尋ねを受けましても、わたくしは上様がそのように仰せられますならば、同じお答えをいたすよりほかはございませぬ。それでは上様御誕生以来、おそばにお仕えして参りましたわたくしに、あなたさまほどのお方がわざわざお聞き下された甲斐がございますまい。

実は、その件については、お話がはじまって以来、わたくしもいろいろ考え、まんじりともせぬ夜々を明かしたこともたびたびなのでございます。——上様がお気の毒で、そしてまたお輿入れあそばす薩摩のお姫さまがお可哀想で。

はい、ありていに申しますれば、わたくしはこの御婚儀はおとりやめになっていただきたいのでございます。

それはなぜか——それこそあなたさまのお聞きになりたいことでございましょう。いつのまにやら世にも伝えられている噂はまことか、とお尋ねになりたいのでございましょう。おそら

く巷間の風評は、上様にどうしても御世子がお生まれあそばさぬので、以前奥医師が往診した際、上様御自身がけろりとしてそのようなことを口になされましたことから、尾鰭をつけて拡まったものと存じます。

尾鰭をつけて——と申しますが、伊勢守どの、それは半ばはもとより荒唐無稽のことでございますが、半ばはほんとうのことでございます。上様はたしかに、前のお二人の奥方さまと、いちどとして御夫婦の契りを結ばれたことはございません。

やはり、と、おっしゃいますか。そうは思っていても、まさか、とお考えでございましたか。こればかりは、もう十年以上も御老中としてお城におわすあなたさまも、しかとおたしかめようのない——さればこそ、きょうわたくしにお訊ねなされたのでありましょうが——上様と、お亡くなり遊ばしたお二人の奥さまと、そしてこのわたくしの四人のほかは、天下にだれもしかとは知らないおん秘事でございます。

いえ、御夫婦のお交わりのないことではございません。なぜ、そういうことになったか、というわけのことでございます。

そのことを申せば、上様のお父上さま、御祖父さま、つまり十二代さま十一代さまに申しわけのないことに相成り、また申したところでだれも納得しないだろうから、いっても無駄だ、と上様は仰せられたことがございます。それでわたくしもいままで黙っておりました。それをいまあなたさまに申しあげたことがわかりますと、あとで上様からいたくお叱りを受けるにま

ちがいはないと存じますけれど、せっかくのお訊ねゆえ——それにまた、お訊ねになったかたが、上様のだれよりお信じあそばす伊勢守どのゆえ、いまはじめて申しあげるのでございます。だれも納得しないだろう、と申しましたが、ほんとうのところはわたくしも実は腑におちかねる上様のお気持なのでございます。

御存知のように上様は、御幼少のころから御蒲柳のたちでおわしました。けれど、戦国の世なら知らず、当代の将軍家として御日常のことにおさしつかえのあるほどではございません。御思慮のほうも——御自分では、おれは馬鹿だ馬鹿だと笑いながら仰せられますけれど——恐れながら、決して世にいわれるような、それほど暗愚の君ではございますまい。むしろ、お二十歳前は、通常の少年にくらべて冴えたところがおわし、ものに感じられることがおやさしくて、おいたわしいほどでございました。

——え、正直なところを申して、上様が御普通の方でおわすか、どうか、わからなくなったことがある、と仰せられますか。

いかにもあなたさまがお国の大事の件で言上あそばすとき、お庭で鵞鳥を追ったりなされておりましては、左様にお考えになって御嘆息なさるのも御無理ではございますまい。

むろん、あれはとぼけておいでなさるのでございます。あのような御行状に、伊勢、国の大事は信ずるおまえに委せたぞ、というお心をお見せになっているのでございます——と、わたくしは見ておりました。

けれど、このごろまたわたくしも不安に思いはじめたのは、ただとぼけてあのようなふるまいが、将軍家としてお出来になるであろうか、やはりもともと御普通ではないのではないか——と、いうことでございます。あなたさまがお疑いになるのも当り前のことかも知れませぬ。いや、やはり上様はおとぼけになっていらっしゃるのです。……そのことは、どうか次にお話し申しあげることから、どうぞお汲みとり下されませ。そして、それこそ当上様が奥方さまと、男女としての縁を断たれるに至った深い秘密につながることでございますから。

いま申しあげたように、上様は二十歳前はたしかに普通人以上でございました。それが、その前後から急にお変りなされたのでございます。家来とのお調子が何やらくいちがい、ときどき一同が嘆息のほかはない突飛なおふるまいをあそばす。あの当時、この君果して御世子となし参らせるべきや、と、とかくの物議の陰謀のあったことは御承知の通りでございます。けれど、御四男とは申せ、御三男までが御夭折なされました以上、征夷大将軍のお位をおつぎあそばすのは、家定公よりほかにあろうはずがございませぬ。そしてまた、御世子と決まり、二十歳前後と相成られて、奥方さまをお迎えにならないという道理がございませぬ。

こうして京から鷹司の姫君がお下りになりました。

御夫婦のお交わりのないことに気づきましたのは、間もなくのことでございます。上様はそのとき十八のおんとしで——そのころはまだ御世子でございましたが——それ以前に、むろん御側妾はございませぬ。けれど、その道のことは、恐れながらわたくしが、一応お教え申しあ

げたつもりでございます。そして上様も、隣室に控えておるのはそちだけにしてくれと仰せられて、わたくしだけが夜々侍っていたのでございます。

一般のお手付きの御中﨟のように、そばにお添寝などおりませぬ奥方さまとのお閨ながら、隣のわたくしも、あまりにおしずかなのに首をかしげました。……一ト月たっても、二タ月たっても、同じことでございます。

そこでわたくしは、思い余って、勇気を鼓して奥方さまにおうかがいして事をたしかめ、吐胸をつかれ、それから上様にお訊ね申しあげた次第でございます。

「いや、それは、そんなことはせぬことにきめたのだ」

上様は平気なお顔で、頭をかきながら仰せられました。

わたくしは改めて、息もとまるような思いになりました。そして、そのわけを承わらせて下さりませ、と、膝詰めでおうかがいいたしました。

上様はだんだんお気弱げなお顔になりましたが、ただお笑いあそばすだけで、なかなかその途方もない御決心のわけを仰せられませんでしたが、わたくしが泣きながらお訊ねいたしますのに困惑なされ、やがて——では、余を育ててくれたおまえに免じて、おまえだけに言おうと、うなずかれて、

「飛鳥井、実は余は、次の将軍になるような子を作る自信がないのだ」

と、お打明けになったのでございます。

「なにゆえでございます？」
「余が、その地位にふさわしからぬ人間であることを自分で承知しておるから」
「まあ、何ということを仰せられます」
わたくしは、決してそんなことはないと申しあげ、またかりにそうであったとしても将軍家のお家柄はそういったものではないことを申しあげました。将軍家の御世子にお生まれになったお方は、必ず将軍さまにおなりにならねば相ならぬことは御神君以来のくろがねの御定法だと申しあげました。
「それはわかっておる。それだから、そうするのだ」
と、上様は仰せられました。また、
「それにしても御神君は、どういうおつもりでそういう辛い御定法をたてられたのか喃。権現さまは、子々孫々にいたるまで、御自分と同じような人間がまちがいなく生まれて来るものと思われておったのか」
と、溜息をおつきになりました。また、恐ろしいことをおっしゃいます。
「こういうしくみをお考えになった権現さまはつくづく馬鹿だと思う」
それにしても、このような理由で奥さまとお交わりにならないというお方が世にございましょうか。わたくしは驚き呆れながら、父将軍さま、また十一代さまはおえらい方であり、そのお子たるあなたさまが常人にお劣りなされているとは考えられませぬ上に、ましてや次にお生

まれあそばすお子さまがお劣りなされているとは、ゆめゆめ限りませぬ、いえ、そんなはずはありませぬ、そんな途方もないお考えをお生みなされるとは、徳川十二代までのおん祖霊のみならず、日本国中の神仏のお心にそむくことでございますと泣きくどきました。
すると、上様はおっしゃるのでございます。
「そちは、父上やお祖父さまをほんとうにおえらいと思うか？　いや、余もそう思うておる」
それまでどこかお笑いになっていた上様のおん眼が、このときキラリとひかったようでございました。おん唇はまだ笑みをお浮かべになっておりましたが、どこやら皮肉にも拝されました。
「それは、お二人のお子の作られようを見ればわかる。――いかにもそれだけは、へどをつくほどおえらい」
わたくしは二の句もつげませんでした。けれど、そのときの上様のお顔から、これこそ御本音だということがありありとわかりました。
伊勢守どの、あなたも、十一代さまと十二代さまのお作りになったお子の数のおびただしさは御存知でございましょう。いえ、お二方さまはほんとうにたくさんのお子さまをお作りになりましたけれど、その正しい数はあなたさまもいまちょっとお口に出来ないであろうと存じます。実はこのわたくしでさえ、いつどれほどお生みになったのか、備忘の書きものでも見なければわからないほどでございます。

……しばらくお待ち下さいませ。それを取って参ります。

……お待たせ申しあげました。よろしゅうございますか。

まず十一代家斉（いえなり）公のお子さまのほうから始めます。

寛政元年、家斉公十七歳のおんとし、おん女子一人。十八歳のときおん女子一人。

二十歳のとき御男子。二十一歳のとき御男子、これがいうまでもなく十二代家慶（いえよし）公でございます。二十二歳のとき、女。二十三歳のとき男。二十四歳のとき、男、女、男と三人お生まれあそばしました。二十六歳のとき、男。そのほか男女もわからぬ御流産二つ。二十七歳、女。

二十八歳、女、御流産一つ。二十九歳、女。それから御男子。

三十歳、女。御流産一つ。三十一歳、男、女、女。ほかに御流産一つ。三十三歳、女。三十四歳、男、女。三十五歳、女。三十六歳、女。三十七歳、男、女、男。三十八歳、男。三十九歳、女、女。

四十歳、男。——さてこの文化九年、十二代家慶公がおんとし二十歳で、御流産二回のことがございました。以下、御父子そろって御子孫の御誕生合戦でございます。

家斉公四十一歳、女、女、女、男。——家慶公二十一歳、男。

家斉公四十二歳、男。——家慶公二十二歳、女。

おん父四十三歳、女、男、女。——おん子二十三歳、女。

おん父四十四歳、女、男、女。——おん子二十四歳、女。

家斉公四十五歳、男、女。

家斉公四十六歳、男、女。

おん父四十七歳、女、男、男。——おん子二十七歳、男。

おん父四十八歳、男。

おん父四十九歳、男。

おん父五十歳、男。——おん子三十歳、男。

おん父五十一歳、男。

家慶公三十二歳、このとし家定公御誕生、そのほかおん女子。

おん父五十三歳、男。——おん子、男。

家慶公三十四歳、男、女。

おん父五十五歳、女。——これをもって、ようやく家斉公のお子作りはとまりました。合計五十七人でございますが。

三十六歳、男。三十七歳、男。四十歳、男。四十一歳、女。四十三歳、女。四十四歳、女。四十六歳、男。四十八歳、女。——

この翌年すなわち天保十二年に家定公が御祝言をあそばしたのでございますが、それまでに父君の家慶公がお作りになったのが二十一人でございます。

……さて、これ以後も家慶公は六十歳までに五人をお作りあそばし合計二十六人でございま

す。おん父子合わせて、実に八十三人。

　御先代には及ばぬとは申せ、家慶公もなかなかのおんことで、お子の多い大名方とて、そうざらにはありますまい。家斉公に至っては古今無双と申したいほどでございます。——そのことを、家定公はおさけびになったのでございます。

「まるで余は、厠(かわや)に蛆虫(うじむし)がウジャウジャ湧き出して来る中に湧き出した、一匹の蛆のような気がするのだ！」

　そのお言葉をおとめする勇気の出ないほど、まるで身の毛もよだつような土気色のお顔でございました。

「生まれたばかりでとろけてしまったものも多いが、生き残った何十四かの虫はおる。この始末に、どれほど往生したか、余はまざまざと眺めて来た。押付婿(おしつけむこ)、押付嫁の白羽の矢をたてられた諸大名の困りかげんは、こちらの苦労どころではなかったろう。……それどころか、飛鳥井、余が世子となる前後、お祖父さまの第三十四番目の溶姫どの、すなわち加賀へ嫁入られた叔母だが、そのお子を徳川本家の世子に送り込むべく陰謀がめぐらされ、いちじは余の膳にも毒が入れられるとか何とかいう騒ぎがあったではないか。……余のみならずこのようなもつれ合いは、大なり小なりそれら数十四の虫のあいだにあったろう」

　だれが、これを世評のような上様のお言葉と思えましょう。

「余自身は、毒殺もいとわぬ。むしろ、早いところこの生きながらの地獄から消えたかった。

……それより、吐気のしたのは、その地獄そのものじゃ。まわりを見まわせば、これはまったく徳川という虫の繁殖地獄ではないか。この怖ろしさを、飛鳥井、おまえにわかるか。いや、余の気持をわかってくれ。余はもうその二の舞いをして、子を作りとうはない。余は、とうてい生めぬ。よいか、余は、断じて子は生まぬぞ！」

　わたくしは、お答えすべき言葉を失いました。

　……それでもわたくしは、奥方さまとごいっしょに御寝(ぎょしん)あそばしているうちには、と、一縷(いちる)の望みをいだいておりましたが、それから七年、ついにお子はお生れになりませなんだ。

　奥方さまにいちど、それとなくこの消息についてお訊ねいたしたことがございますが、奥方さまはおうなだれになったまま、

「……承知しております。そのことについては、何もきかないでおくれ」

　と、消えいるようにお答えになりました。

　いちどか二度、奥方さまの御様子に、おいたわしや、御乱心気味のことがございましたが、お亡くなりあそばしたのは、あなたさまも御承知のように、御風邪(ふうじゃ)がこじれての果てに相違ございません。それにしても、ほんとうにお可哀想なお方ではございました。

　お可哀想なのは、二度目の一条家からのお方さまも御同様でございます。上様はあの奥方さまにも、同じことを申しわたされたようでございます。そして、半年ばかりであの奥方さまのお亡くなりましたことに、妖しき風説の流れたことは存じておりますけれど、その実御疱瘡(ほうそう)に

よるものであったこともあなたさまの御存知の通りでございます。
それからきょうまでまた六年。……上様は、また御台所をお迎えになることを強くお拒みあそばされました。世間に対する女の案山子として、お志賀のお方さまを立てられただけでございます。
また大名旗本への仮面として、もはやこれ以上御妻帯のことは叶わぬということを納得させるための、あのおたわけぶりだ——と、わたしは拝察しているのでございます。あの御狂態については、またべつに考えるところもございますけれど、とにかくいまの御身分では、なみたいていのことでは、みなが御独身のままではおきませぬ。
……それほど拒否しておられる上様御婚儀のことを、あなたさまはまた持ち出されました。
御聡明な伊勢守どの、いろいろとお考えの上のことでございましょう。なにゆえ上様が御台を拒否あそばすか、そのまことのわけはいまはじめてお聞きになったでありましょうが、それはともかくあなたさまなら、これには深い仔細のあることとすでにお見通しのことと存じます。それでもなお薩摩との御婚儀をお持ち出しなさる。——そのわけは——お国のために左様にいたさねばならぬというわけは、この飛鳥井にもわからないことはございませぬ。
されば、わたくしは、ほんとうはそうしていただきたくないのでございますけれど、上様が委せると仰せられた上は、わたくしがなおおとめすることは出来ませぬ。上様もおそらく、お国のために左様いたさねばならぬことをお覚悟なされたのでございましょう。上様ははじめか

ら御自分を虚しゅうなされて来たお方でございます。
ただ、——島津家には右のこと——いまお打明けいたしたことまでもお洩らししてよいか悪いかは、あなたさまの御配慮にお委せするよりほかはございませんが——とにかく、御夫婦のお交わりのないことだけは、あらかじめよう聞かせて、そのお覚悟あって輿入れなされますよう、しかとお伝え下されませ。以前のお二方は、上様がまだ御世子のころの奥方さまでございましたが、こんどはまぎれもなく将軍の御台所とおなりあそばすおん方でございますから。……

——その年の十二月、薩摩から輿入れがあって、家定は三番目の御台所を持つことになった。そして、その翌安政四年六月、阿部伊勢守は、宰相としての肝脳を消磨しつくして、この世を去った。

四

一枚の木の葉を隠すなら森の中に隠せ。
一個の異常な行為を認めさせるためには、全人格を異常なものと認めさせよ。
江戸城大奥の老女飛鳥井の言によると、暗将軍家定の愚かぶりは、交合拒否の信念を通すためのカモフラージュであったという。
それは事実であったろうか。そんなことを思いついて、実行する人間がほんとうにあったの

であろうか。

それを解く鍵の一つと見える事件がある。そのことを、アメリカ公使ハリスが書いている。

ペルリとの条約により、安政三年夏下田にやって来たタウンゼンド・ハリスは、何はともあれ江戸に出て、将軍と会見することを要求した。幕府側は強くこれを拒んだ。これについての長い、執拗な交渉が繰返された。そして一年近くたって老中阿部正弘は死去し、それから四カ月ほどたってまたもやって来たアメリカ砲艦の威力を背に、ハリスはついに江戸に出て将軍に謁見する約束をとりつけるのに成功した。

その日、安政四年十月二十一日。――ハリスは通訳ヒュースケンをつれて、江戸城に上った。ハリスは書く。

……私は、大広間に彫像のように静座している大名たちのそばを通った。そして彼らの前列まで来たとき、その前を通って右へ進み、そこで立ちどまった。井上信濃守はその場に平伏した。

単独の謁見室は、大勢の謁見の行われる大広間と同じ外見をしている。しかし大広間からは襖で隔離されているので、大名たちは私たちを見ることが出来なかった。

やがて合図があると、信濃守は両手をついたまま、膝行しはじめた。私は謁見室へ入っていった。そのとき、一人の侍従が高い声で、

「アメリカ使節！」

と、さけんだ。

私は入口から六フィートばかりのところで立ちどまって、頭を下げた。それから室の中央まで進み、ふたたび立ちどまって頭を下げ、また進んで、右手の堀田備中守とちょうど相対するところで停止した。そこには備中守と他の五人の閣僚が、顔をこちらに向けて、両手をついていた。

数秒ののち、私は大君に次のような挨拶の言葉を述べた。

「陛下よ、合衆国大統領よりの信任状を上呈するに当り、私は陛下の健康と幸福を、また陛下の領土の繁栄を大統領が切に希望していることを述べるように命じられました。私は陛下の宮廷において、高くかつ重い合衆国全権使節に選ばれたことを大いなる光栄と考えております。そして私の熱烈な願いは、永続的な友誼の紐でより親密に両国を結ぼうとすることにあります。その目的の達成のために、私は不断の努力をそそぐでありましょう」

ここで私は言葉をとめて、頭を下げた。

短い沈黙ののち、大君は自分の頭を、その左肩を越えて後方へぐいとそらし、同時に右足を踏み鳴らした。これが三、四回繰り返された。

それから、よく聞える、気持のよい、しっかりした声で、次のような意味のことをいった。

「遠方の国から、使節をもって送られた書簡に満足する。同じく使節の口上に満足する。両国

の交際は、永久に続くであろう。……」

——これが、群臣の前で鸚鵡を追いまわしたり、土鍋で小豆を煮て一箸ずつ与える白痴的人物といわれる十三代将軍が、はじめての紅毛碧眼の使者に対してやってのけた応対ぶりであった。

もし飛鳥井のいうことがまこととすれば、さすがに彼は、日本の名誉にかけて、このときばかりはその阿呆の仮面をぬぎ去ったというしかない。

もっとも首を左肩のうしろへ投げ、三、四回も足を踏み鳴らしたというところが少し気にかかるけれど、それさえ、勧進帳の富樫左衛門尉か何かがみえを切ったように華々しく見えないこともない。少くともハリスは、一種の威厳として感じたようである。

果然、家定を暗将軍としてきめつけた松平春嶽、内藤耻叟らは、いずれも水戸派あるいは水戸家そのものの人間である。

幕臣方——たとえばその一人、幕末函館奉行をやっていた杉浦兵庫頭の評によると、

「家定公は暗愚の君ならず、すこぶる聡明にわたらせられぬ。水野越前を斥けたもうにも、断然彼を斥けたまえり。代りて阿部伊勢守を挙げ用い給いしところを見ても、決して平凡の君主のなし能うところにあらず」

と、いうことになり、かつこれを紹介した「旧幕府」の記者は、

「海舟翁もまた家定公のひととなりを評して杉浦翁と所見を同じゅうせり」

と、述べているが、次に妙な記述がある。

「かの御養君の儀も、みずから平岡丹波守に命じ給いしなり。水戸はなにゆえかいたく嫌わせ給いしなり」

御養君の儀とは、子なき家定が、第十四代の将軍として、水戸を斥け、紀州から家茂を迎えることを決定したというのだ。

水戸派が、彼の悪口をたたくのは、このことから発しているのかも知れない。

五

安政五年初夏の或る夕。大奥の老女飛鳥井の大老井伊掃部頭直弼への物語。

このたびの御大老御就任、おめでとうございます。まずもってお祝い申しあげるとともに、このお国の未曾有の大変にあたり、心から御苦労に存じます。

それについても、——前々から首をかしげてはいたが、ただ御簾越しに拝していた大名のころと異り、大老の職に就いて、改めて上様がまともなお方であるか、どうか、狐につままれたような思いになって来た。ふだんの御様子を見ていると、まったく御虚脱のていで、ときには恐れながら白痴としか思われぬ御行状を拝するが、一方でひょいと、常人であらせられるところ

もお見受けする。ほんとうのところは如何？　と、いう仰せでございますか。

そのことについては、いつぞや、去年お亡くなりあそばした阿部伊勢守どのからも同様のお訊ねがあり、そのときわたくしは、上様は必死でおとぼけになっているのです、と申した次第でございますが。……

そうでなくして、どうしてアメリカの使者に、あのように堂々とした御応接が叶いましょうか。それに、あとで申しましょうが、べつにびっくりするような一つの証拠があるのでございます。それは、井伊どの、あなたさまの御登場にもつながることなのでございます。

どうして上様がおとぼけになっているのか、天下の将軍として、なぜそんな必要があるのか、とだれしも考えるでございましょう。その仔細は、わたくしの推量によればこうでございます。

上様は、十一代さまがお子さまを五十七人、十二代さまが二十六人、お作りあそばしたことに対し、心の底からウンザリなされたのでございます。そのことを、徳川という名の虫の繁殖地獄だ、と仰せられました。そこで、もう御自分はそんな虫を一匹も作りたくない、というお気持になられたのでございます。その結果上様は、三人の御台所といちども御夫婦のおんちぎりを交されてはおりませぬ。……

とはいえ、そんなことで？　と、お疑いになるでありましょう。わたくしもそう思いますけれど、お若いうちから、この濃い御血縁の大群に囲まれておいでなされた上様としてみれば、しかもその方々のありよう、なりゆきの御悶着を御覧になり——特に、御自身さえ毒殺とか

何とか妖しげな噂につつまれてお育ちになってみれば、ものに感じ易い御性質として、そういうお考えにおなりなされたのも、わたくしには御無理もない、と思われて来たのでございます。で、なるべく奥方さまをもらいたくない。もらっても、子は生まない——こう御決心になっても、さてそのような御決心が通ることでありましょうか。みなが認めましょうか。通りませぬ。認めませぬ。——こうして上様は、たわけをお粧おいになりはじめたものでございましょう。そして、そうお粧おいになっても、それでも御台所をお迎えにならぬということは許されなかったのでございます。

もう一つ、上様がたわけをお粧おいになった理由が推量されます。

それは上様が、将軍家としての御自信をお持ちにならなかったことでございます。恐れながら上様は、お若いころから自分は馬鹿だ馬鹿だと、しきりに仰せられました。決してそうではない、と、いくら申しあげても、そのほうの御自信だけは動かないものを持っておいであそばしました。

外に異国の船、内に一揆の嵐、何やら天下が騒然として来た天保時代に、いちばん感じ易い少年期をお過しになったお方でございます。上様は、国を護り、民を統べるのは大変なことだ、と、おびえあそばしたに相違ございません。

上様はお洩らしになりました。

「馬鹿が最高位についているほど、国にとって恐ろしいことはない」

で、自分は将軍としての力量がない、と思い込んでおわすお方が将軍にならねばならぬ運命にお立ちになったとき、そのお方はどうなさればよいのでありましょうか。

それは御自分が最もお信じになる者をもって民を統べさせ、お国を護らせることでございましょう。その者に、すべてを委せ切ることでございましょう。

ただ、その者をえらぶ眼が大事でございます。

それを、上様はまちがいなくおやりになりました。みごとな御眼力でございました。いままでのところ、天下のだれが阿部伊勢守どの以上の仕置をなされたでございましょうか？　思えば、暗君どころか、世にもまれなる御名君とは、上様のことではございますまいか。すでに、そのような――将軍にふさわしからぬ者は、将軍の仕事をやるべきではない、将軍とはそれほど重いものだとお考えになるだけでも、暗君どころではございません。

しかし、それならそれだけでよいではないか。何も御当人までがそれ以上に愚人を粧われる必要はなかろう、とあなたさまはおっしゃるかも知れません。わたくしも実はそう思うのでございます。

そこが当上様の上様でおわすところなのでございます。なまじさかしら顔をしていては、全権を委された者がかえってやりにくかろう、いっそ自分が相談のしようもない馬鹿だと天下に周知させておけば、実際にやる者が欲するままにやっても、だれも異議をとなえまい――上様は、こう考えられたのかも知れませぬ。あるいは、こうまで考えられなかったのかも知れませ

ぬ。

将軍の御地位につかれるまでに、さきほど申しあげた御子孫を断ちたい御理由から、すでに長い間、十年以上も上様は白痴同然のふるまいをしておいでになりました。わたくしは、そこで上様は、将軍さまとなられましても、これは面白いではないか、今さらこれをやめるわけにはゆかないではないか、えい、このままでゆこうか――と、ひとりうなずかれて、その仮面をかぶりつづけておいでであそばすような気がしてなりませぬ。

ただ、本来はまともなお方がそのような仮面をかぶりつづけておりますと、ときにひびが入るように苦しさにたえかねることがあるにきまっております。上様が群臣の前で、鵞鳥を追いまわされたり小豆を煮られたり、ときたまみながあっけにとられるような極端に突飛な御行状をあそばしたのは、その上にも御自分をからかい、またあっけにとられている周囲の眼をからかって、心の寛解を求められたものではありますまいか。

その証拠に――井伊どの、実はわたくしには、水を浴びせられたような思い出が一つあるのでございます。あなたさまに関係があるとは、その話なのでございます。

去年六月、阿部伊勢守どのの病は篤くなりました。その春ごろより、腹中右方にしこりのようなものが出来てみるみる憔悴なされ、ついにお斃れになって万事休す、御死去なされたのは六月十七日でございますが、その前日――上様は、龍の口なる阿部邸へ、最後のお別れにお成りに相成りました。

ほんのこのあいだまで悠揚として、絵のような美丈夫であった伊勢守どのは、その面影もありませなんだ。死床に横たわって伊勢守どのは、もはや起きなおることも叶わず、ただわずかに両掌を白衣の胸に組んで、眼で上様を礼拝なされました。

「上様、伊勢守最後にあたって、おうかがいいたしたきことがございます。……何とぞ、お人払いを」

伊勢守どのは、弱々しい声で申されました。その前に、自分の家臣たちを退かせていたことは申すまでもございません。

そこで、こちらの小姓たちも出てゆこうといたしますと、

「あいや、飛鳥井どのだけはよろしかろう」

と、伊勢守どのはとめられました。上様におつきしていた然るべき身分の女が、御台所御名代のわたくしだけであったためか、それともほかに何かわけがあったのか、わたくしにはわかりませぬ。とにかく、そういう次第で、わたくしだけが、上様と伊勢守どのの最後のお話を承わることになったのでございます。

私のあと、だれをお使いになるおつもりでござりまするか、と伊勢守どのはおききなされました。思いがけず、しっかりとしたお声でございました。

上様はしばらく考えておられましたが、やがて、

「井伊を使おうと思う」

と、仰せられました。

伊勢守どのは、じっと天井を眺めていたのち、

「井伊掃部頭（かもんのかみ）。——あれは、嵐を起す男でござりまするが、よろしゅうござりまするか」

と、呟かれました。上様は、ふとおん笑みを浮かべられました。

「あの男のほかに、水戸を抑えることの出来る者はあるまい」

わたくしは茫然としてお二方を眺めておりました。いつもウスボンヤリとなされ、キョトンとなされている上様のおん面影は、そこに影ほどもないではございませんか。それをまた伊勢守どのは当然のことのようにお話し申しあげていたではございませんか。

水戸を抑える——とは、いうまでもなく御養君のおんことでございます。お子さまなき当上様に御世子を定めておかなければ叶わず、そこで二候補——御英才のほまれお高い二十一歳の一橋刑部卿慶喜（ひとつばしぎょうぶきょうよしのぶ）さまを十四代さまといたすべきか、十一代家斉公のおん孫にあたらせられる十二歳の紀州の慶福君（よしとみぎみ）をお迎えすべきか——現在ただいまも大もめにもめておりますこのことは、むろんそれ以前から、何びとも容易に決められないほどの重大事となっていたのでございます。

「余は、水戸はきらいじゃ」

と、上様は仰せられました。

「慶喜さまが、でござりますか」

「いや、その親父どのがよ」

いうまでもなく水戸の御老公斉昭さまのことでございます。

「実は、日本のためを思えば、慶喜のほうがよいかも知れぬ、とは思っているのだ。その父親がきらいで息子もきらうのはどうかと思うがな、しかし、余の最後のわがままを許してくれい」

「最後のわがまま？　最後の、と仰せられますのは？」

「伊勢、余もあまり長くはないぞや。お前のあとを、間もなく追うぞよ」

伊勢守どのは上様を見まもりました。お国の内外の苦難が急迫して来るにつけて、伊勢守どのもおやつれになりましたが、上様もまたそれと歩みを合わせるように、一日ごとにおやつれになって来ていたのでございます。

「水戸の御老公を、なぜそれほどおいといになりますか」

伊勢守どのは、そうお訊ねになりました。

「慶喜はたしか幼名を七郎麿と申したな」

上様はお呟きになりました。

「斉昭どのは、一郎麿から十郎麿まで生み、あと余一麿（よいちまろ）、余二麿（よにまろ）と生みつづけて二十麿（はたち）に達し、それでもとまらず現在までに二十二麿（はたふた）までいっておる。そのほかに、たしか女子が十五人、合わせて三十七人のお子を作ったことになるが、ひょっとするとまだ生むかも知れん」

上様のお顔は、ぞっとするばかりの嫌悪のお色に彩られておりました。

「これもまた徳川の繁殖地獄の中のふとっちょ虫じゃ。余は、御免蒙る」

「し、しかし、左様なことで」

こういいかけた伊勢守どのに、上様は厳然と申されたのでございます。

「伊勢、将軍は余であるぞ！」

伊勢守どのは、眼をとじて横たわったままでございました。胸はしずかに起伏しておりましたが、もはや何も申されませなんだ。ただ、その唇に、にいっとふしぎな笑いが刻まれていただけでございます。

やがて上様は、だだっ子が急に間が悪くなったような小声で仰せられました。

「伊勢。……掃部はお前と正反対の男じゃがな。余が思うに……どっちにしても大したことはない。日本の運命はじゃ。大したことはないというのは、大して変りはないという意味じゃ。どうも余にはそんな気がするが、そちは、そうは思わぬかな？」

阿部伊勢守どのは、その翌日の昼過ぎにこの世を去られました。

右のことは、天下の何びとも知らぬ大秘事でございます。いったい伊勢守どのは、いつごろから上様をまっとうなお方としてお相手いたしていたのでありましょうか。わたくしにもわかりませぬ。

わたくしには、どうもその最後のときただいちどだけのように思われてならないのでござい

ますけれど。――いのちの火消えんとする薄明りの中に、伊勢守どのは他のことをかえりみるいとまなく、夢幻のうちに、ほんとうの上様とお話しなされ、上様も御同様の思いから、それに相対されたもののように思われるのでございますけれど。

ともあれ、阿部伊勢守どのは、他の者には何も語らず、何くわぬ顔をし通して、「暗将軍」を仰いで死なれました。

さて、井伊どのはいかがでございますか。いかがなされますか。

こう申してははばかりもございましょうが、とにかく妨げ多く、世の人すべて意外としたあなたさまの御登場が叶えられました背後の力、真実の力は、わたくしがいま申しあげたことから出ているにまちがいございません。けれど、それにもかかわらず、上様がまだどのようなお方であらせられるか、お迷いになっているところから察しますと、あなたさまはまだ上様のかぶっておいであそばす薄衣をとってお話し申しあげたことがないのではございませぬか。

それはまた上様が、あなたさまにすっかり委せられたということであるかも知れませぬ。

しかし、上様が阿部伊勢守どのに或るお姿をお見せになったように、そんな時がいつかきっと来るでございましょう。けれど、井伊どの、どのような上様を御覧いただくことがありましょうと、ここまであのような衣をかぶっておいでなされた上様でございます。それをそのままお通し下された伊勢守どののひそみに、どうぞならっていただきたく、飛鳥井は心からお願い申しあげる次第でございます。

ただ……こういうわたくしにも、実は恐ろしい疑いが消えないのでございます。わたくしは上様が愚人の衣をかぶっておいであそばすようにお話し申しあげました。

けれど……けれど……ときに稲妻のようにあのようにまともなお言葉、おんふるまいを示されるとは申せ、あとはひたすらウスボンヤリ、キョトンとなされ、何かといえば突飛なことをあそばす、いわんや三人の御台所といちどもお交わりになることなく生涯を過すなどという将軍さまが――いえ、人間が、この世にほんとにあるものでございましょうか？

ああ、上様は、ほんとうにまともなお人なのでございましょうか？

六

実にそれから三月(みつき)ばかりして安政五年七月六日、十三代将軍家定は死んだ。享年(きょうねん)三十五歳である。

そのころは江戸にコロリが流行(はや)っていたが、彼の死因はコロリではなかったようである。ただ生来虚弱な肉体が、蠟燭の灯の消えるように消え失せたと史書にはある。

――ただそのあとに、コロリよりももっと恐るべき井伊掃部頭直弼の血の大粛清、いわゆる安政の大獄を残して。

家定は、のっぺりと長い、粉をふいた白瓜みたいな顔で、にたっと笑った。その死床においてである。

「飛鳥井、余は、やっぱり立たなんだのじゃ」
そのメフィストフェレスじみた、いたずらっぽい、うす気味わるい顔と声を、老女飛鳥井は死ぬまで忘れることは出来なかった。――
「いっておくがな、余はやっぱり頭がおかしかったのであるぞよ。……」

解説

細谷正充（文芸評論家）

寡聞にして外国の事情は知らないが、日本では本になったとき、短篇集よりも長篇のほうが売れ行きがいいらしい。なんとなく、納得できないこともない。たしかに読了したときの満足感という意味では、長篇のほうに軍配が上がるかもしれない。だからといって、長篇のほうが短篇より優れていると思うのはナンセンスだ。

たとえば短篇ひとつに、長篇が書けるだけのアイディアと手間をつぎ込んだなどという話はよく聞くものだ。そして、短篇は長篇より遙かに短い枚数で、ひとつの確立された物語世界を構築しなければならない。これは大変なことである。だから考えようによっては、優れた短篇は長篇よりも高度なテクニックが必要だといえるのだ。

その短篇を評価するときに〝切れ味の良い〟もしくは〝切れ味抜群〟などという表現がある。誰が考えたのかは知らないが、実にうまい決め台詞だ。個人的なことだが、書評など書いていると、紋切り型と蔑視しつつも、ついフラフラと使いたくなるんだよね。ま、それはさておき、この〝切れ味〟とは、本来は刃物に使われる言葉だろう。〝味〟とあるところから、料理包丁

を思い浮かべる人も多いのではないか。

ちょっと余談になるが、料理の味の善し悪しに、包丁の切れ味というのは重大な関係があるのだ。なまくら包丁では、野菜の繊維や魚肉の細胞をつぶすことになり、本来のうま味が外に押し出され、味が落ちてしまう。だから切れ味は良くなければならないのだ。だがこれは、小説にも当てはまることではないか。作品の素材を、いかに〝切れ味良く〟捌くかが、作者の腕の見せ所というわけだ。さて、では山田風太郎は、どうであろうか。これはもう、いうまでもない。ここに天才料理人・風太郎が鮮やかに捌いた六つの極上品を並べてみた。どうか思う存分、味わっていただきたい。

「剣鬼と遊女」(「面白倶楽部」昭和三十年九月号)

冒頭を飾るのは、花の吉原を舞台にした、謎の老人の正体を巡る物語。

登場人物が実に豪華だ。まず、花魁の三千歳と直侍こと片岡直次郎。お数寄屋坊主の河内山俊春を筆頭とした六人のダーティーヒーロー、いわゆる〝天保六花撰〟のふたりである。さらに、南部藩と津軽藩の永年にわたる確執から、元南部藩士が津軽侯を狙撃した相馬事件。その狙撃手である相馬大作こと下斗米秀之進まで現れる。こうした時代小説ではお馴染みの人物を脇役として縦横に駆使する手法は、後年の〝明治物〟を彷彿させる。

そして、彼らとの因縁から隠された主人公の正体が明らかになったときのカタルシス。カン

の良い読者なら途中で気付くかもしれない(再読すると分かるが、伏線が張りまくりだ)が、それでもラストで心地よい驚きを感じるのは、ここに至るまでの物語の段取りが、ピタリと決まっているからなのだ。まさに切れ味(この場合は斬れ味だろうか)抜群の逸品なのである。

「元禄おさめの方」(「週刊読売」昭和四十四年七月四日号―八月一日号)

天下の悪法と呼ばれる生類憐愍の令を断行した五代将軍綱吉。彼に仕えて異例の出世を重ねる寵臣柳沢吉保。綱吉に生類憐愍の令を薦めた怪僧隆光。この元禄時代を支配した三人の男に愛された、今は亡きおさめの方を中心に物語は進む。三人の男たちの思い出から、彼女の姿を浮かび上がらせた、これは元禄の「藪の中」である。

だが、ここで追及されるのはおさめの方の真実の姿ではなく、彼女を通じて照らし出される男たちの心底なのだ。なかでも、もっとも興味深いのが柳沢吉保だ。綱吉という絶対的な主人に仕える忠実な犬たらんとする彼は、おさめの方を、自分が犠牲にすべき「我」の象徴とする。この吉保が実行した〝犬の理論〟が、有効な出世の手段として、一面の真理を突いていることは間違いない。

また、ラスト近くで吉保が語る。

「後代、うわっつらはこの元禄に似たる世はまた来るであろう。が、かくのごとき根のすわった芸術と政治に彩られた盛代はそうざらには来ようとは、わしは思わぬ。もし左様な時代が来たとしても、片腹痛くも元禄の再来など称してもらいたくない」

という元禄観は、この作品が書かれた当時の日本に対する強烈な皮肉となっている。ここには、高度経済成長に伴い表面上の繁栄に浮かれていた、昭和元禄に対する作者の憤りが感じられるのだ。

ひとりの女性を巡る男たちの心理から元禄という時代相を浮かび上がらせ、返す刀で現代日本を斬り捨てた、作者の手練が光る作品といえよう。

「姦臣今川状」（「小説宝石」昭和四十六年八月号）

桶狭間で織田信長に討ち取られた今川義元。その後を継いだ氏真は、ただ平和に楽しく生きたいという、本来ならば極めてまともな思想（というほど大袈裟なものではないが）の持ち主。だが戦国の世に、そんな理屈が通用するわけがない。奸臣と噂される今川家家老三浦右衛門と、彼に丸めこまれて氏真の愛妾と密通を続ける三人の家臣は、お家存亡の危機に立ち向かう。

三人の男たちが、主君のためではなく、密通した愛する女たちのために死んでいくのを、家康が真の武士と感動するのが愉快だ。また、凡庸だが愛すべき氏真が、この価値観の逆転した乱世に悠然と天寿を全うしたのは、痛快な皮肉といえよう。戦争の狂気に竿さす、姦臣たちの活躍が爽やかな一篇である。

「筒なし呆兵衛」（「小説新潮」昭和四十六年九月号）

捕らえられ牢に繋がれている、盗賊の首領の大鳥呆兵衛。ジンマシンを好きな形にできる彼は、体じゅうに東照大権現の文字を浮かび上がらせ、斬首を免れた。そんな彼の、懺悔とも自

慢話ともつかないイタズラ人生が語られる。

父親から強いられた忍法修行で特異体質になってしまった呆兵衛。家も取り潰されたことから身を持ち崩し盗賊へと堕ちていった。このあたりのノリは、忍法帖らしくて、ファンには嬉しいかぎりである。そんな彼がイタズラを仕掛けたのが、由井正雪と、老中松平伊豆守だ。とくれば、慶安事件にいかなる秘話があるのかと期待するのだが……。

さらりと肩透かしを食わせて読者を煙にまきながら、最後にまったく違うオチをつける、作者のイタズラ心を楽しんでいただきたい。

「紅閨の神方医」（「週刊小説」昭和四十七年二月十八日号「紅閨参上」改題）

呆兵衛がイタズラに人生を賭けた男ならば、本作の主人公はインチキで世渡りしようとした男である。その男の名前は、万久里小路馬竿斎。ちなみに、彼の人生の目的は、美しく高貴な女性の尻をめくることである。

女性の尻を見たいがために、神方医なる怪しげな医者となった馬竿斎。もちろん、勉強嫌いの彼は、真面目に医学など学んでいない。それでも持ち前の調子の良さと狡猾さで、トントン拍子に出世をするが、当然なことに因果応報の結末が待っていた。

だが、馬竿斎の人生を、笑ってすませるのはどんなものだろう。肩書だけで仕事をしている無能者の多さを考えれば、

「案外それなりにすべてカンニング一点張りの処世法でらくらくと渡り、めでたく極楽往生を

とげる可能性もあるような気がする」
という一文に、深くうなずいてしまう人は多いのではないだろうか。さらに、出世を続ける馬竿斎の治療法が、しだいにエスカレートしていく様も、現代の健康法ブームや宗教ブームを想起させてくれる。
ジョークのような、馬竿斎の人生から見えてくる、現代社会でも通用している諸々のインチキを、改めて考えてみるのも一興であろう。
「陰萎将軍伝」(「小説現代」昭和四十八年八月号)
珍しくも、徳川幕府の最高権力者である将軍が主人公。といっても、徳川十五代将軍中、最低といわれる十三代将軍家定を取り上げているのが、いかにも作者らしい。在職がたった五年足らずとはいえ、ペリー来航により開国を迫られるという、徳川幕府開闢以来の国難期に将軍を務めながら、この影の薄さは確かにただ事ではない。
その最低の理由は作品中に書かれているので、ここでは触れない。だが作者は、この最低将軍の新たなる人間像を浮き彫りにしていく。そこには、国家のため頭脳と下半身を韜晦し続けた賢人がいたのである。ところが作者は、自らが描いた新たな家定像にも疑義を投げかけてみせる。読者を混迷の淵に落とし込む、ラストの一行が鮮やかだ。
ちなみに、下半身の韜晦の理由として家定が挙げる徳川一族のイメージは強烈だ。これは徳川一族に託して語った、作者の人間感といえる。こうしたイメージは、作者の作品の所々に現

れているので、興味のある人は探してみるのも面白いだろう。
以上六篇、味わいはいかがだったろうか。新鮮な素材を練達の腕で料理した山田風太郎特製フルコースに、満足していただけたと思う。本書はまさに〝切れ味抜群〟の作品ばかり集めた、傑作短篇集なのである。

●底　本

「剣鬼と遊女」（『剣鬼と遊女』所収　旺文社文庫　昭和五十九年十月刊）

「元禄おさめの方」（『元禄おさめの方』所収　平安書店　昭和五十年一月）

「姦臣今川状」（『踏絵の軍師』所収　旺文社文庫　昭和六十一年二月刊）

「筒なし呆兵衛」（『怪異二挺根銃』所収　実業之日本社　昭和四十八年七月刊）

「紅閨の神方医」（『怪異二挺根銃』所収　実業之日本社　昭和四十八年七月刊）

「陰萎将軍伝」（『南無殺生三万人』所収　東京文芸社　昭和五十年六月刊）

「お断り」

本作品中には、今日ではいささか不適当と思われる用語が使用されておりますが、作品が書かれた時代背景等を考慮し、概ね発表当時のままとしました。御理解頂きますようお願いいいたします。（編集部）

特選
時代小説

剣鬼と遊女

著　者　山田風太郎
発行者　櫻井道弘
発行所　廣済堂出版
〒105　東京都港区芝3-4-12
電話　03(5445)1202(営業)
03(5445)1204(編集)
振替　00180-0-164137
印刷所　廣済堂印刷株式会社
〈編集担当〉伊藤秋夫

定価は、カバーに明示してあります。
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-331-60560-4 C0193